

南島原市文化財調査報告書 第37集

二本櫓遺跡

— 市道南島原自転車道線整備工事に伴う発掘調査 —

2024

長崎県南島原市教育委員会

南島原市文化財調査報告書 第37集

二本櫛遺跡

— 市道南島原自転車道線整備工事に伴う発掘調査 —

2024

長崎県南島原市教育委員会

発刊にあたって

本書は、長崎県南島原市深江町字二本樋に所在する二本樋遺跡の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査は、南島原市が事業主体となって進めている市道南島原自転車道線整備工事に伴って実施いたしました。整備工事は、平成20年に廃線となった島原鉄道南目線（島原港駅－加津佐駅間）の跡地のうち南島原市内の約32kmを自転車歩行者専用道路として活用する計画となっています。工事が完成した暁には、この道路が南島原市内を縦断するサイクリングロードとして観光面で一役を担うとともに、市民の方々の憩いと健康増進の場として利用されるものと期待しています。

発掘調査では、おもに弥生時代早期の遺物や弥生時代後期の遺構・遺物を検出いたしました。そのなかでも特に注目されるのが、弥生時代後期の竪穴住居の検出と住居内からの土器群の一括出土です。これらは今後、島原半島の弥生時代の様相を明らかにしていくうえで重要な基準的資料として位置づけられることでしょう。

私たちは、発掘調査によって知り得た埋蔵文化財を地域の財産として後世に受け継いでいかなければなりません。学校教育や生涯教育などに広く活用と公開の機会を増やすとともに、学術研究に寄与するものとなるよう力を尽くします。また、地下に眠るまだ実態の明らかでない埋蔵文化財についても、保護と記録についての作業を怠ることなく適切に責任をもって実行していく所存です。

末筆ではございますが、発掘調査を実施するにあたりご理解・ご協力を賜りました地権者の皆様、地元にお住いの皆様、事業部局と工事関係の方々、発掘調査と整理調査に従事いただきました作業員の方々、そのほか関係各位に心より感謝を申し上げ、発刊のあいさついたします。

令和6年3月31日

南島原市教育委員会

教育長 松本 弘明

例 言

- 1 本書は、二本榎遺跡（長崎県南島原市深江町字二本榎所在）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、南島原市建設部建設課が事業主体である市道南島原自転車道線整備工事に伴って実施した。
- 3 現地調査及び整理調査は、南島原市教育委員会が主体となって実施した。調査の体制・担当は、以下のとおりである。

調査主体

南島原市教育委員会	教育長	永田 良二（～令和3年8月）
	同上	松本 弘明（令和3年8月～）
	教育次長	栗田 一政（～令和4年3月）
	同上	五島 裕一（令和4年4月～）
	文化財課長	岡野 博明（～令和4年3月）
	同上	中村 隆敏（令和4年4月～）
	文化財課文化財班長	梶原 知治

調査担当（現地調査・整理調査）

南島原市教育委員会	文化財課文化財班	副参事（学芸員）	本多 和典
-----------	----------	----------	-------

- 4 現地調査における写真撮影は、本多が行った。遺構配置図、土層実測図の作成・製図、航空写真の撮影は、（株）埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。
- 5 整理調査及び本書作成にあたって、草野明、小林賢伸、細波泉、飛永弘恵、中村由美子、横田香織の協力を得た。
- 6 遺物の実測・製図は、（株）イビスク長崎営業所に委託した。土器の拓本は、横田が行った。本書掲載の遺物写真の撮影は、本多が行った。
- 7 本書に関する遺物、図面、写真等は、南島原市深江埋蔵文化財整理室に保管している。
- 8 本書の執筆・編集は、本多による。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
第Ⅱ章	範囲確認調査	3
第Ⅲ章	本調査	8
1	概略	8
2	基本土層	8
3	検出遺構	11
4	包含層ほか出土遺物	32
第Ⅳ章	まとめ	48

挿図目次

第1図	二本櫓遺跡位置図 (S=1/200,000)	1
第2図	範囲確認調査調査坑配置図 (S=1/2,500)	4
第3図	範囲確認調査調査坑土層図 (S=1/40)	5
第4図	範囲確認調査出土遺物 (S=1/3)	6
第5図	土層実測図 (S=1/100)	9
第6図	遺構配置図 (S=1/400)	10
第7図	竪穴住居1実測図 (S=1/60)	11
第8図	竪穴住居1出土遺物① (S=1/3)	12
第9図	竪穴住居1出土遺物② (S=1/3)	13
第10図	竪穴住居1出土遺物③ (S=1/3)	15
第11図	竪穴住居1出土遺物④ (S=1/3)	16
第12図	竪穴住居1出土遺物⑤ (S=1/3)	17
第13図	竪穴住居1出土遺物⑥ (S=1/3)	19
第14図	竪穴住居1出土遺物⑦ (S=1/3)	21
第15図	竪穴住居1出土遺物⑧ (S=1/3)	22
第16図	竪穴住居1出土遺物⑨ (S=1/3)	23
第17図	竪穴住居1出土遺物⑩ (S=1/3)	24
第18図	竪穴住居1出土遺物⑪ (100~103 : S=1/3, 104 : S=1/5)	25
第19図	竪穴住居2実測図 (S=1/60)	26
第20図	竪穴住居2出土遺物① (S=1/3)	28
第21図	竪穴住居2出土遺物② (S=1/3)	29
第22図	竪穴住居2出土遺物③ (S=1/4)	30
第23図	溝実測図 (S=1/40)	31
第24図	土坑1・土坑2実測図 (S=1/40)	31
第25図	土坑3実測図 (S=1/40)	31
第26図	土坑3出土遺物 (S=1/3)	31
第27図	Ⅲ層出土遺物① (S=1/3)	33
第28図	Ⅲ層出土遺物② (S=1/3)	34
第29図	Ⅲ層出土遺物③ (S=1/3)	35
第30図	Ⅲ層出土遺物④ (S=1/3)	36
第31図	Ⅲ層出土遺物⑤ (S=1/3)	37
第32図	Ⅲ層出土遺物⑥ (73~82 : S=1/3, 83~84 : S=2/3)	38
第33図	Ⅱ層ほか出土遺物① (S=1/3)	39
第34図	Ⅱ層ほか出土遺物② (S=1/3)	40

表 目 次

第1表	範囲確認調査出土遺物観察表	7
第2表	竪穴住居1出土遺物観察表①	41
第3表	竪穴住居1出土遺物観察表②	42
第4表	竪穴住居1出土遺物観察表③	43
第5表	竪穴住居2出土遺物観察表	44
第6表	土坑3出土遺物観察表	44
第7表	Ⅲ層出土遺物観察表①	45
第8表	Ⅲ層出土遺物観察表②	46
第9表	Ⅱ層ほか出土遺物観察表	47
第10表	石器観察表	48

図 版 目 次

図版1	航空写真①(南東から)	53
図版2	航空写真②(北から)	54
図版3	航空写真③(俯瞰)	55
図版4	範囲確認調査TP.1南西壁, 範囲確認調査TP.2南西壁, 範囲確認調査TP.3南西壁, 範囲確認調査TP.4南西壁, 範囲確認調査作業状況①, 範囲確認調査作業状況②	56
図版5	調査前状況①(北東から), 調査前状況②(南から)	57
図版6	表土剥ぎ状況①(南から), 表土剥ぎ状況②(道床除去・南西から)	58
図版7	表土剥ぎ状況③(南西から), 表土剥ぎ状況④(掘削完了・北東から)	59
図版8	作業状況	60
図版9	Ⅲ層遺物検出状況①(北東から), Ⅲ層遺物検出状況②(南西から)	61
図版10	Ⅲ層遺物検出状況③(1区・東から), Ⅲ層遺物検出状況④(2区・東から)	62
図版11	Ⅲ層遺物検出状況⑤(2区・北から), Ⅲ層遺物検出状況⑥(3区・北から)	63
図版12	Ⅵ層上面遺構検出状況①(北東から), Ⅵ層上面遺構検出状況②(南西から)	64
図版13	竪穴住居1検出状況①(東から), 竪穴住居1検出状況②(南から)	65
図版14	溝堆積状況①(南東から), 溝堆積状況②(南東から)	66
図版15	竪穴住居2検出状況①(西から), 竪穴住居2検出状況②(南東から)	67
図版16	竪穴住居1堆積状況(南から), 竪穴住居2堆積状況(南東から)	68
図版17	溝検出状況①(東から), 溝検出状況②(南から)	69
図版18	土坑群検出状況(南から), 土坑1検出状況(南から)	70
図版19	土坑2検出状況(東から), 土坑3検出状況(北から)	71
図版20	竪穴住居1出土遺物①	72
図版21	竪穴住居1出土遺物②	73

図版22	竪穴住居 1 出土遺物③	74
図版23	竪穴住居 1 出土遺物④	75
図版24	竪穴住居 1 出土遺物⑤	76
図版25	竪穴住居 1 出土遺物⑥	77
図版26	竪穴住居 1 出土遺物⑦	78
図版27	竪穴住居 1 出土遺物⑧	79
図版28	竪穴住居 1 出土遺物⑨	80
図版29	竪穴住居 1 出土遺物⑩	81
図版30	竪穴住居 1 出土遺物⑪	82
図版31	竪穴住居 1 出土遺物⑫	83
図版32	竪穴住居 1 出土遺物⑬	84
図版33	竪穴住居 1 出土遺物⑭	85
図版34	竪穴住居 1 出土遺物⑮	86
図版35	竪穴住居 1 出土遺物⑯	87
図版36	竪穴住居 1 出土遺物⑰	88
図版37	竪穴住居 1 出土遺物⑱	89
図版38	竪穴住居 1 出土遺物⑲	90
図版39	竪穴住居 1 出土遺物⑳	91
図版40	竪穴住居 2 出土遺物①	92
図版41	竪穴住居 2 出土遺物②	93
図版42	竪穴住居 2 出土遺物③	94
図版43	竪穴住居 2 出土遺物④	95
図版44	Ⅲ層出土遺物①	96
図版45	Ⅲ層出土遺物②	97
図版46	Ⅲ層出土遺物③	98
図版47	Ⅲ層出土遺物④	99
図版48	Ⅲ層出土遺物⑤	100
図版49	Ⅲ層出土遺物⑥	101
図版50	Ⅲ層出土遺物⑦	102
図版51	Ⅱ層ほか出土遺物①	103
図版52	Ⅱ層ほか出土遺物②	104
図版53	出土石器	105

第I章 はじめに

二本榎遺跡が所在する長崎県南島原市深江町二本榎は、島原半島の東部に、市域としては南島原市の最北部に位置している。南島原市は、平成18年に「平成の大合併」で旧南高来郡のうち南東部の深江町、布津町、有家町、西有家町、北有馬町、南有馬町、口之津町、加津佐町の8町が合併しているが、そのなかで二本榎遺跡が所在するのは最北部の深江町であり、水無川を境界として島原市と接している。

島原半島には、平成新山（標高1,483m）を主峰に、普賢岳（標高1,359m）、国見岳（標高1,347m）、妙見岳（標高1,333m）などといった雲仙の山々が周囲に裾野を広げている。半島の西側は比較的急峻な斜面で橋湾と接し、また北東から南東にかけてはなだらかな斜面で有明海と接する。有明海を南下すると、口之津と天草下島の間、約4.5kmを測る早崎瀬戸を抜け、東シナ海へと出ることができる。

二本榎遺跡は、普賢岳東斜面からなだらかに展開する火山性扇状地「深江原」の海岸近く、標高約30mの付近に位置する。

つぎに市内の遺跡から歴史的環境を概観したい。旧石器時代の遺跡は多くないが、大崎鼻遺跡（布津町）から三稜尖頭器の出土がある。縄文時代の遺跡では、まず早期の下末宝遺跡（深江町）がある。押型文土器が多数出土しており、またそれに伴う鍬形鍬も特徴的である。前期では古作遺跡（深江町）から葬式土器の出土がある。弥生時代では、突帯文期の遺跡として「山ノ寺式土器」の標識遺跡として知られる山ノ寺掘木遺跡（深江町）、成人土坑墓と小児土器棺墓の墓域が検出された権現脇遺



第1図 二本榎遺跡位置図 (S=1/200,000)

跡（深江町）、国内最大規模の支石墓群として知られる国史跡原山支石墓群（北有馬町）がある。通野遺跡（有家町）では口唇部に近接して刻目突帯をめぐらす土器群が出土しており、市域では数少ない前期の遺跡である。布津木場原遺跡（布津町）では中期前半に位置づけられる甕棺墓4基が検出されている。また、北岡金比羅祀遺跡（南有馬町）では明治期に中期の合口甕棺が発見されており、銅剣1本を副葬していたと伝わる。今福遺跡（北有馬町）は、弥生時代中・後期の遺跡で、堅穴住居、甕棺墓、環濠などが検出されている。古墳時代に入ると、天ヶ瀬古墳（布津町）がある。すでに墳丘は失われているが後期の円墳と考えられ、露出した横穴式石室が現在に残る。古代の遺跡はほとんど知られていない。中期に入るとキリシタン大名有馬氏の居城である国史跡日野江城跡（北有馬町）がある。階段遺構、掘立柱建物群の検出、金箔瓦、法花などの出土がある。近世期に入ると、鳥原・天草一揆の主戦場となった国史跡原城跡（南有馬町）が知られ、多数のキリシタン遺物や犠牲となった一揆軍の人骨などが出土している。2018年には「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産として世界文化遺産に登録されている。

【参考文献】

- 深江町郷土誌編さん委員会 1971 『深江町郷土誌』 深江町
 古田正隆 1973 『山の寺掘木遺跡』 百人委員会埋蔵文化財報告書第1集 百人委員会
 宮崎貴夫 1984 『今福遺跡Ⅰ』 長崎県文化財調査報告書第68集 長崎県教育委員会
 宮崎貴夫 1985 『今福遺跡Ⅱ』 長崎県文化財調査報告書第77集 長崎県教育委員会
 宮崎貴夫 1986 『今福遺跡Ⅲ』 長崎県文化財調査報告書第84集 長崎県教育委員会
 長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班編 1997 『原始・古代の長崎県 資料編Ⅱ』 長崎県教育委員会
 土橋啓介編 2001 『大崎鼻遺跡』 布津町文化財調査報告書第1集 布津町教育委員会
 本多和典編 2005 『下末宝遺跡・上呼津遺跡』 深江町文化財調査報告書第1集 深江町教育委員会
 本多和典編 2006 『権現脇遺跡』 深江町文化財調査報告書第2集 深江町教育委員会
 本多和典 2007 『権現脇遺跡』 南島原市文化財調査報告書第1集 南島原市教育委員会
 伊藤健司編 2010 『原城跡Ⅳ』 南島原市文化財調査報告書第4集 南島原市教育委員会
 本多和典編 2011 『日野江城跡 総集編Ⅰ』 南島原市文化財調査報告書第6集 南島原市教育委員会
 本多和典 2018 『古作遺跡』 南島原市文化財調査報告書第10集 南島原市教育委員会
 本多和典 2020 『権現脇遺跡』 南島原市文化財調査報告書第21集 南島原市教育委員会
 本多和典 2021 『権現脇遺跡』 南島原市文化財調査報告書第28集 南島原市教育委員会
 本多和典 2022 『通野遺跡』 南島原市文化財調査報告書第30集 南島原市教育委員会

第Ⅱ章 範囲確認調査

南島原市建設部建設課自転車道路整備班により市道南島原自転車道線が計画された。計画は市内を有明海沿いに走っていた島原鉄道南目線（平成20年4月1日廃線）の跡地を整備し、自転車歩行者専用道路として活用するもので、その延長は32.1kmである。

この計画を受けて南島原市教育委員会文化財課は、鉄道跡地の現地確認を行い、周知の埋蔵文化財包蔵地とその周辺について、試掘・範囲確認調査を実施し、その結果に応じて本調査を実施することとした。なお、現地踏査の時点で鉄道敷設によって切り通されていて遺跡の残存が望めないような現況の場合は、試掘・範囲確認調査の対象から除外した。試掘・範囲確認調査を実施した遺跡は、二本榎遺跡（深江町）、大崎鼻遺跡（布津町）、町村遺跡（有家町）、北岡金比羅祀遺跡（南有馬町）、永瀬貝塚（加津佐町）の5遺跡である。

二本榎遺跡における範囲確認調査は、令和3年8月19日から令和3年8月23日の期間において、平面2m四方の調査坑を3か所（TP.1～TP.3）、4m×2mの調査坑1か所（TP.4）を設定し、計20mの調査を行った。

調査は、調査坑の設定を行ったのち、重機によって線路の道床である砂利層と表土層を除去し、その後人力によって層位ごとに掘削を行った。掘削途中、必要に応じて遺構・遺物の検出状況や作業状況の写真撮影を行った。また、完掘した段階で、壁面の土層実測図作成と写真撮影を行った。完掘後の埋め戻しには重機を用いた。

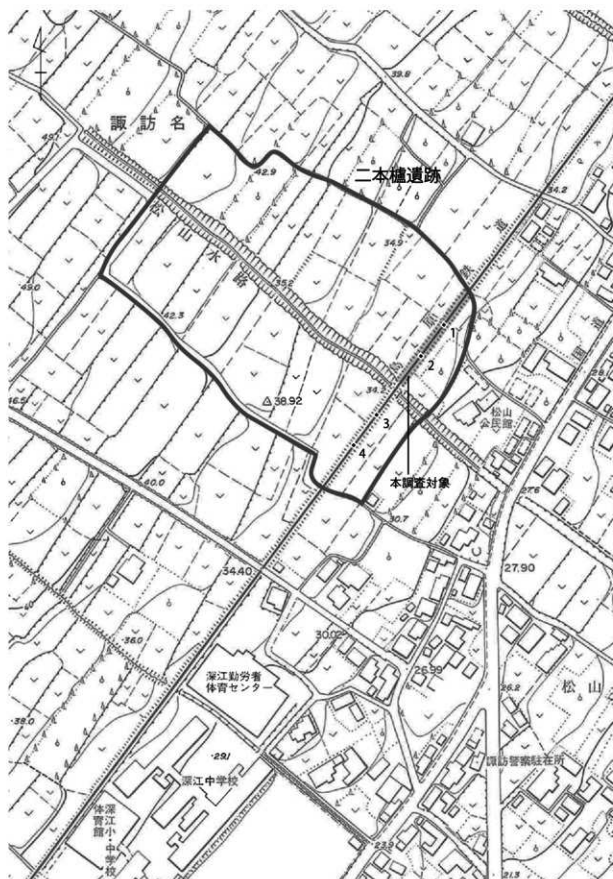
今回の二本榎遺跡における範囲確認調査の基本土層は、深江町域、特に権現脇遺跡において整理されている基本土層に照らし合わせ、おおよその対応関係が確認できた。

深江町域の基本土層は、以下のようになっている。

- I 層 暗褐色土。表土。耕作土。
- II 層 暗褐色土。近世以降の造成土。
- III a 層 黒色土。弥生時代中期～中世の遺物包含層となる場合が多い。
- III b 層 暗褐色土～褐色土。上層（暗褐色土）・下層（褐色土）に細分が可能な場合もある。
縄文時代後期～弥生時代前期の遺物包含層となる場合が多い。
- IV 層 浅黄橙色火山灰。権現脇火砕サージ。
- V a 層 明黄褐色土。縄文時代早期の遺物包含層となる場合が多い。
- V b 層 暗黄褐色土。縄文時代早期の遺物包含層となる場合が多い。
- VI 層 黒色土。
- VII 層 灰白色砂礫。土石流堆積物。

調査の結果、二本榎遺跡における範囲確認調査においては、上記深江町域基本土層のIII a 層、III b 層に相当する二本榎遺跡III層（黒色土）を確認し、また、深江町域基本土層のIV層、V a・V b 層については確認しなかった。

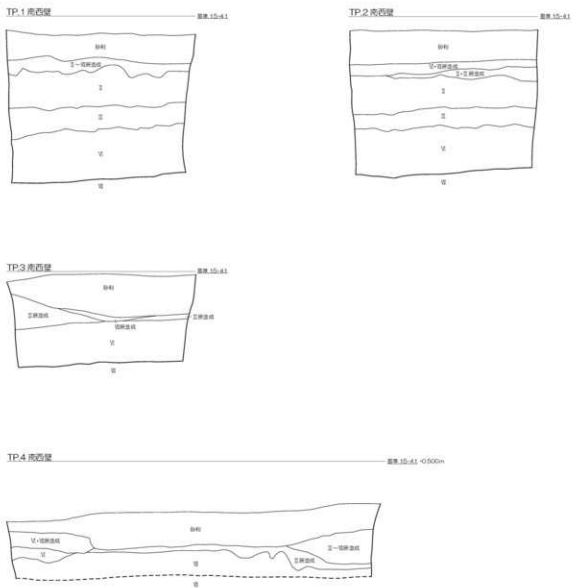
TP.1・TP.2のIII層より良好な遺物の出土がみられた。出土遺物の内容としては、縄文時代後期



第2図 範囲確認調査調査坑配置図 (S=1/2,500)

から中世の時期にかけてのものである。

以上の結果から二本樋遺跡にかかる事業計画地のうち、TP.1・TP.2を含む松山水路より北側部分約450㎡について、着工前に本調査が必要と判断した。



第3図 範囲確認調査調査坑土層図 (S=1/40)

出土遺物

1～9はTP.1出土の遺物、10～13はTP.2出土の遺物である。

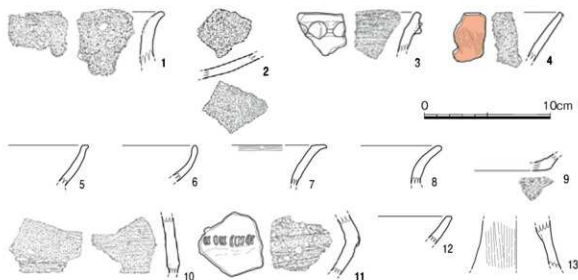
1・2は縄文時代後・晩期の資料である。1は深鉢口縁部で、厚めの器壁は外反し先細りとなる。2は浅鉢で、内外面ともに丁寧に研磨調整を行う。3は突帯文期の粗製浅鉢で、外傾する口縁部に指刻みの突帯がつく。

4～8は弥生時代後期の資料である。4は器種不明であるが、外面にハケメ調整と丹塗りが観察される。5は甕口縁部である。6は小形の鉢である。7は壺か高坏の口縁部で、上面を平坦に整える。8は外反・外傾する壺口縁部である。

9は中世の土師器坏で、底面に糸切り痕が残る。

10は縄文時代晩期から突帯文期の深鉢で、屈曲部が認められる。11は突帯文期の甕で、屈曲部に半截竹管状の工具で刻目を施す。

12・13は弥生時代後期の資料である。12は甕口縁部である。13は高坏脚部である。



第4図 範囲確認調査出土遺物 (S=1/3)

第1表 範囲確認調査出土遺物観察表

目	番号	類別	器種	調査坑	層位	文様・刻印		色澤		出土	備考
						外周	内周	外周	内周		
	1	縄文土器	深鉢	TF.1	Ⅲ	ナデ	ナデ	橙・こみ・橙	橙	灰石・灰石・赤色粒子・白色粒子	
	2	縄文土器	浅鉢	TF.1	Ⅲ	研磨	研磨	こみ・赤褐色	明赤褐色	石灰・白色粒子	内面に灰化跡付着
	3	弥生早期土器	浅鉢	TF.1	Ⅲ	無目/ナデ	ナデ	こみ・赤褐色	灰黄褐色	焼陶石・石灰・白色粒子	
	4	弥生前期土器	不明	TF.1	Ⅲ	丹塗/ハケメ	ナデ	明赤褐色	こみ・橙	灰石・石灰	内面に灰化跡付着
	5	弥生前期土器	壺	TF.1	Ⅲ	ナデ	ナデ	灰黄褐色	明黄褐色	焼陶石・灰石・石灰・赤色粒子	内面に灰化跡付着
	6	弥生前期土器	鉢	TF.1	Ⅲ	ナデ	ナデ	こみ・赤褐色	橙	焼陶石・石灰・白色粒子	
	7	弥生前期土器	甕・高杯	TF.1	Ⅲ	ナデ	ナデ	橙	明黄褐色	焼陶石・灰石・石灰	内面に灰化跡付着
	8	弥生前期土器	甕	TF.1	Ⅲ	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	石灰・白色粒子	
	9	中世土器部	杯	TF.1	Ⅲ	目取ナデ	目取ナデ	橙	橙	赤色粒子	
	10	縄文土器・ 弥生早期土器	深鉢	TF.2	Ⅲ	ナデ	ナデ	橙	こみ・赤褐色	焼陶石・灰石・石灰・赤色粒子	
	11	弥生早期土器	壺	TF.2	Ⅲ	無目/ナデ	ナデ	明赤褐色	暗灰褐色	焼陶石・灰石・石灰	内面に灰化跡付着
	12	弥生前期土器	壺	TF.2	Ⅲ	ナデ	ナデ	橙	橙	焼陶石・灰石・石灰	内周面に灰化物
	13	弥生前期土器	高杯	TF.2	Ⅲ	ハケメ・ナデ	ナデ	灰黄褐色	こみ・赤褐色	焼陶石・灰石・白色粒子	底面浸食

第三章 本調査

1 概略

本調査は、令和4年4月16日から令和4年8月2日の期間において実施した。まず、重機によって鉄道の道床であった砂利層と近世以降に造成された旧表土層とを二段階に分けて掘削、除去した。表土剥ぎが完了した段階で、調査区全体を網羅するように4m間隔のグリッドを設定し、メッシュ杭を設置した。北から南へアルファベットを、西から東へアラビア数字を割り振り、グリッド名称とした。また、土層観察用のベルトを、調査区を縦断するように北西・南東方向の傾斜に沿って3本設定し（ベルト1～3）、1～4区の調査小区を設けた。4mグリッドを単位として層位ごとに掘削調査を行い、遺物の取り上げについても基本的にはグリッドごとに層位別で一括して行った。遺構内出土の遺物については、遺構ごとに番号を振って取り上げた。

範囲確認調査の結果に基づき、調査はⅢ層を掘削調査の対象とし、Ⅵ層上面において遺構の検出作業を行った。調査区の北西壁沿いについては、調査区横を走る道路の建設時の攪乱がみられ、また近世以降の耕作地造成によってⅢ層が一部削平され、層厚が薄くなっている状況が確認された。

調査完了後は、道路建設工事が控えていたため、埋め戻しは行わず事業担当課に現地の引き渡しを行った。

2 基本土層

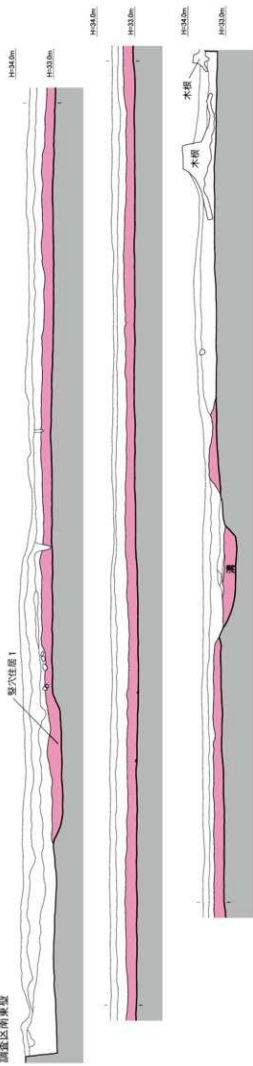
本調査における基本土層は以下のとおりである。

- I 層 灰黄褐（10YR4/2）色土。しまりは強くなく、1cm大以下の礫を含む。
- I' 層 灰黄褐（10YR4/2）色土。しまりは強くなく、3cm大以下の礫を多く含む。
- I* 層 黒褐（10YR3/1）色土。しまりは弱くきめ細かい。1cm大以下の礫を含む。
- Ⅱ 層 黒褐（10YR3/1）色土。しまりはやや強く、3cm大以下の礫を含む。近世以降の造成土。
- Ⅲ 層 黒（10YR3/1）色土。しまりはさほどなく、粘性は弱い。1cm大以下の礫を含む。下位は色調がやや明るくなり、黒褐（10YR3/2）を呈する。また、下位ほど礫の混入が多くなる。縄文時代後期～中世の遺物包含層。
- Ⅵ 層 オリーブ褐（2.5YR4/3）色土。1cm以下の礫を非常に多く含む。下位ほど礫の密度は増し、コブシ大までを含むようになる。
- Ⅶ 層 ぶい黄（2.5Y6/3）。半固結した砂礫。土石流堆積物。

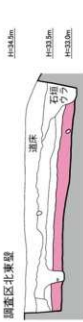
範囲確認調査の成果と同様、雲仙眉山の火山活動に伴う火砕サージである深江町域基本土層Ⅳ層、それから縄文時代早期、主に押型文土器を包含することの多い深江町域基本土層Ⅴ層については、確認されなかった。よって、深江町域基本土層との整合性をとるため、今回の二本権遺跡本調査における基本土層において、Ⅳ層・Ⅴ層については層序名から除外した。

今回の調査で検出した遺構のほぼすべてはⅥ層上面からのものであり、また、出土した遺物の大部分はⅢ層及びⅥ層上面検出の遺構内からのものである。

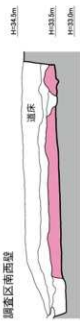
調査区南東壁



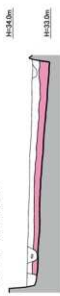
調査区北東壁



調査区南西壁



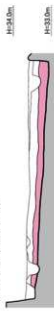
ベルト 1 (南西から)



ベルト 2 (南西から)



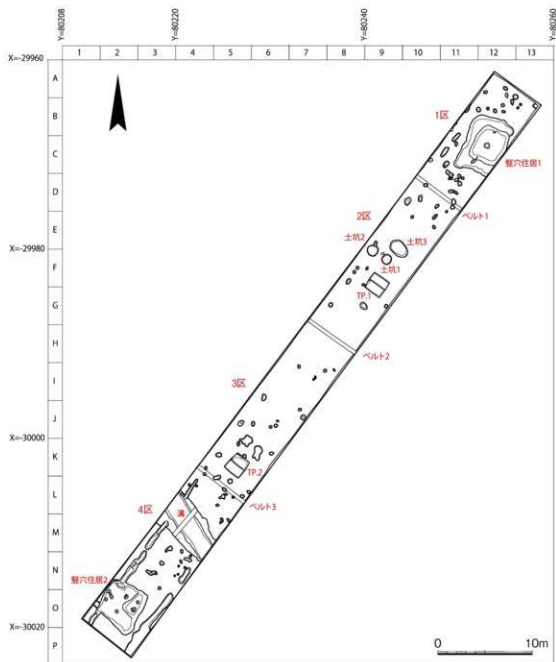
ベルト 3 (南西から)



土層



第 5 図 土層実測図 (S=1/100)



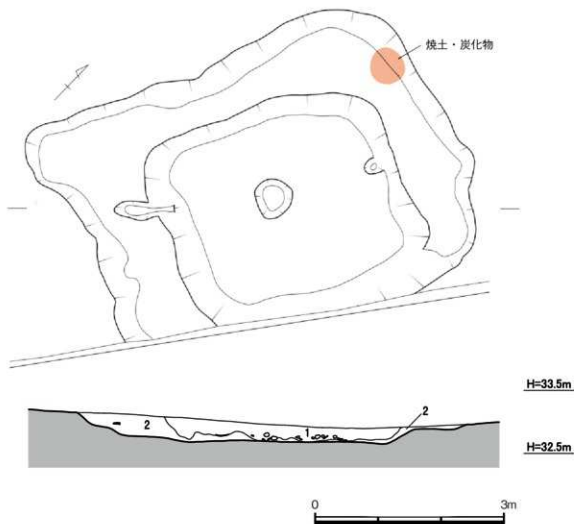
第6図 遺構配置図 (S=1/400)

3 検出遺構

Ⅵ層上面において検出した主な遺構として、竪穴住居2基、溝1条、土坑3基がある。いずれも弥生時代後期に属するものと判断する。

竪穴住居 1 (SI01)

調査区の北東端、グリッドB・C-11・12においての検出である。隅丸方形の平面を呈し、北東・南西方向に5.9～6.2m、北西・南東方向に4.7m以上を測る。検出面からの深さは、最深部で0.45mである。最深部付近は遺構検出面であるⅥ層を掘り抜き、Ⅶ層上面に達している。遺構中央で柱穴1基を確認した。また、遺構内北部において焼土と炭化物の集中的な検出がみられた。当初検出プランが不明瞭であったことから倒木痕として掘削を行っていたが、遺構内から多量の弥生後期土器を検出するに至り、また平面が隅丸方形を呈し、断面形状もすり鉢状ではなく平坦面を形成することから床面と判断し、竪穴住居として認定した。床面は中央部が一段下がり周縁が高くなっているが、海手の南東辺については調査区外に広がるため、判然としない。遺構内から多量に出土した土器群は、住居の廃絶にあたり廃棄したものと判断する。



第7図 竪穴住居1実測図 (S=1/60)

竪穴住居 1 出土遺物

(第 8 図～第 18 図)

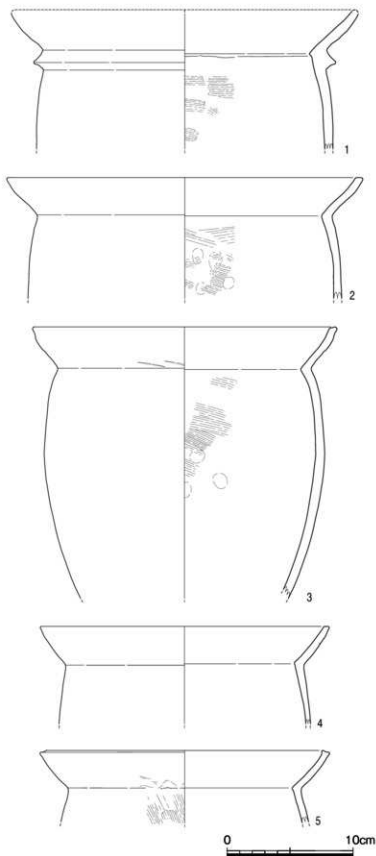
1～103は竪穴住居 1 内出土の遺物である。

1～53は甕の資料である。1は厚手の器壁で口縁部と胴部の境界には断面三角の突帯を巡らす。胴部の比較的上位に最大径をもつものと思われ、そこから口縁部へはわずかに内傾し、口縁部は外傾する。若干内面にハケメ調整を残すが、内外面ともに丁寧にナデ調整を施す。

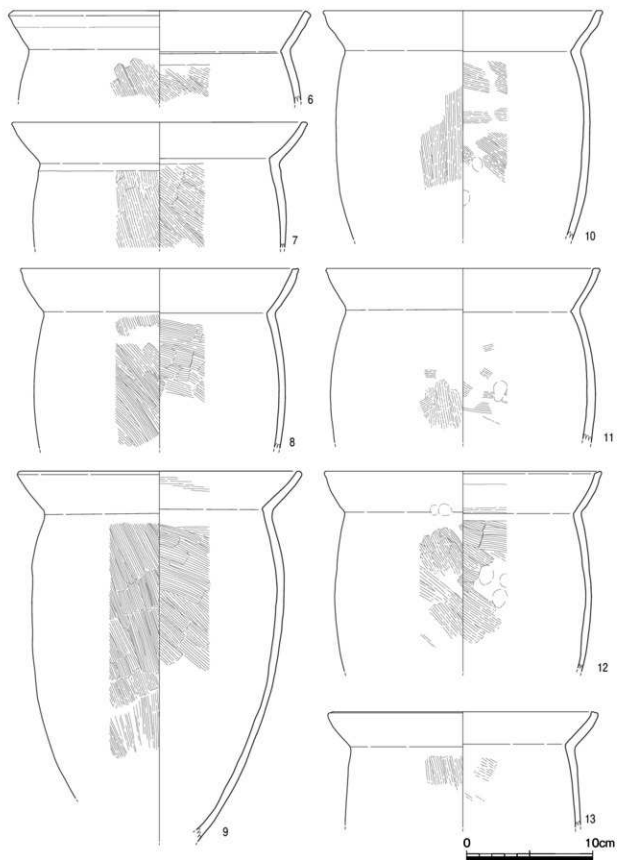
2～53は台付甕の資料である。

2～38は口縁部の残る資料である。いずれも外傾する口縁部でわずかに内湾する。2は胴部にハケメ調整と指頭圧痕を残す。口縁端部は平坦に整える。3は内外面ともにハケメ調整のちナデ調整を行う。口縁部外面の中ほどはわずかに肥厚し、同じく口縁部外面の下部には工具痕が確認できる。口縁端部は平坦に整える。4は口縁部外面に炭化物が付着する。5の胴部外面にはハケメ調整が残り、口縁部外面下部には工具痕が認められる。外面には炭化物が付着する。

6の口縁部はほかに比べると内湾の度合いが弱く、直線的である。端部は平坦である。胴部は内外面ともにハケメ調整のちナデ調整を行う。外面胴部に炭化物が認められる。7は内外面ともにハケメ調整のちナデ調整を行う。口縁部外面にわず



第 8 図 竪穴住居 1 出土遺物① (S=1/3)



第9図 竪穴住居1出土遺物② (S=1/3)

かに炭化物が付着する。8は、外面は比較的目的細かいハケメの調整を行い、内面は比較的目的粗いハケメの調整である。外面には炭化物が付着する。9は底部を欠くが胴部下半から口縁部まで比較的存在が良い。卵形の長い胴部は高い位置で最大径をもち、そこから一旦すぼまって外傾する口縁部に至る。内外面ともにハケメ調整を残すが、胴部下半についてはその後のナデ調整で明瞭ではない。胴部外面に黒斑をもつ。10の口縁部は外面下部を工具により横ナデすることによりその上部が肥厚したようになる。11は口縁端部を平坦に整える。12は口縁端部が平坦で、外面には炭化物が残る。13は口縁端部を上方から平坦にするためなでており、そのため内面側に張り出しを作る。

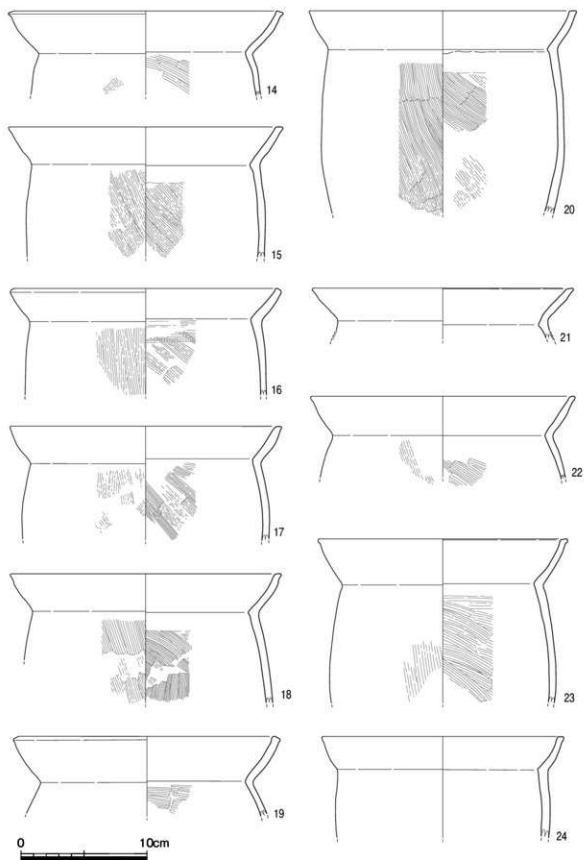
14はやや口縁部幅が広い。口縁端部の平坦整形のため、外面側に張り出しを作る。15は口縁部外面に炭化物が付着する。16の口縁部立ち上がりはやや短めである。17の外面には炭化物が付着する。18の胴部には内外面ともにハケメ調整が残るが、内面は中ほどまでは縦方向、上位は斜方向、外面は縦方向である。19はやや器面の状態が悪い。胴部の張りが強いものと思われる。20は特に胴部外面のハケメ調整を明瞭に残す。外面、口縁部から胴部上半にかけて炭化物の付着が認められる。21は外面の器壁の剥落が著しい。内面胴部には目的粗いハケメ調整が認められる。22は器壁の状態があまりよくない。23の口縁部は端部の整形により外側で段を作る。内外面のハケメ調整は比較的目的粗い工具によるものである。胴部外面には炭化物が付着する。24は胴部の張りが他に比べると弱く、口縁部の立ち上がりが短い。

25はほかに比べると胴上部でのすぼまりが強い。器壁の状態が良くないが、内外面ともに胴部にはハケメ調整が観察される。26は内外面ともにナデ調整が丁寧である。27は胴部の張りが弱く、口縁部は断面先細りとなって端部の平坦整形は認められない。外面胴部には炭化物が付着する。28は橙色系の器壁が特徴的である。口縁端部を平坦に整える。29・30も口縁端部を平坦に整える。30の外面胴部には炭化物が観察される。31は内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。

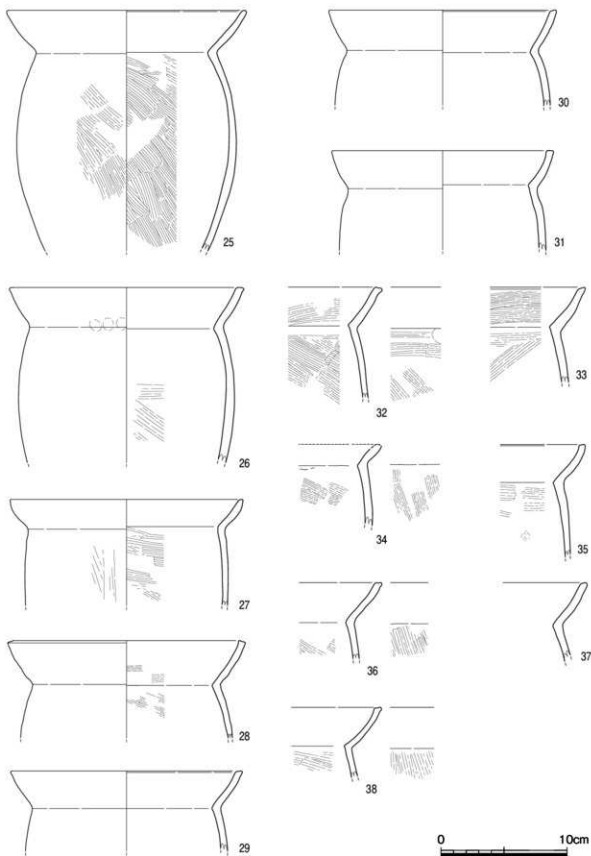
32は口縁端部が外側へと張り出す。33は外面に炭化物が付着する。34は口縁部の立ち上がりが短い。35は内湾の強い口縁部で、外面には炭化物が認められる。36～38は比較的手薄の器壁である。36の外面には炭化物が付着する。37は器面の状態が良くないが、口縁部外面には炭化物の付着が確認できる。

39～44は胴部の資料である。42～44には脚台部も一部残存する。39は底部・口縁部を欠くが、胴部全体の形状が把握できる。内外面ともに丁寧なナデ調整を施しているが、内面下半には幅2cm弱の工具による調整が確認できる。40は胴部下半の資料で、外面は丁寧なナデ調整を施しており、内面にはハケメ調整が残る。41は内外面にハケメ・ナデ調整を行ったのちに工具によりさらになでており、粗いミガキ調整を施したような器面となっている。42は胴部下半で、脚台がついたものと思われる。外面は丁寧なナデ調整で、内面には炭化物が付着する。43は、外面は比較的丁寧にナデ調整を行うが、内面はハケメ調整が残る。内面の底面近くには炭化物の残存が認められる。44は脚台部から胴部下半の資料で、外面のナデ調整は丁寧である。内面のハケメ調整は比較的目的細かい工具が用いられる。外面、脚部と胴部の境界付近に炭化物が認められる。

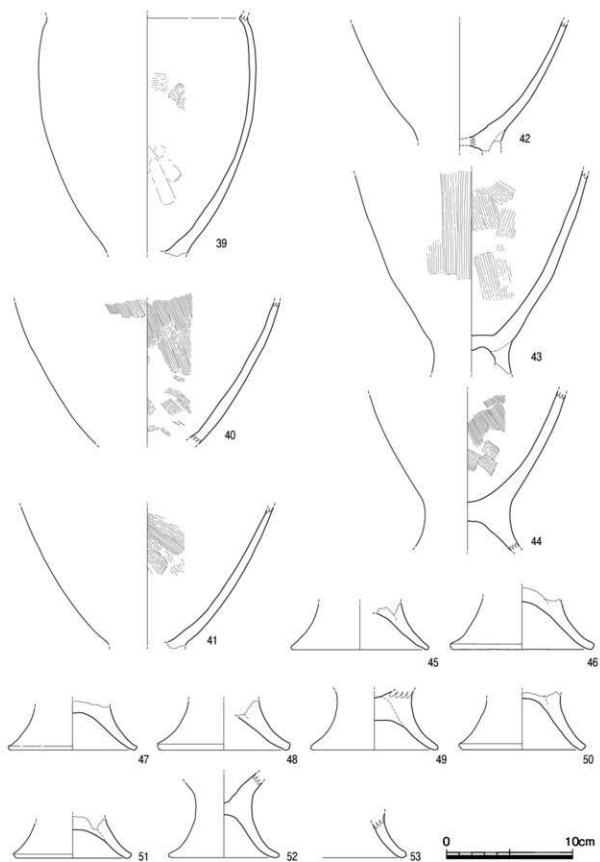
45～53は多くが上述してきたような甕の底部になるものと思われる脚台部の資料である。いずれも断面先細りとなって外反し、裾を広げるものである。破断面の観察から多くが胴部と脚台部との接合後に内面に粘土を充填していることが観察される。



第10図 竪穴住居1出土遺物③ (S=1/3)



第11図 竪穴住居1出土遺物④ (S=1/3)



第12図 竪穴住居1出土遺物⑤ (S=1/3)

54~57は比較的背の低い堯もしくは鉢となるものである。54は胴部がわずかに外傾しながら立ち上がり、内湾・外傾する口縁部がつく。胴部最大径は口縁部との境界で、胴部上位でのすまりはみられない。内面にはハケメ調整を明瞭に残すが、外面は丁寧になでている。外面には炭化物が付着する。55の胴部は中ほどでの膨らみが強くそこから上半はほぼ直立しており、口縁部は断面先細りとなって外傾する。内外面ともに目の粗いハケメ調整が施されている。56は半球状の胴部に外傾する口縁部がつく。内外面ともに目の粗いハケメ調整が施される。外面には黒斑が認められる。57の胴部は張りの弱い逆三角形をなし、口縁部は外傾する。底部には脚台がつくであろうか。内面の口縁部と胴部の境界となる稜はやや甘く不明瞭である。内外面ともに目の粗いハケメ調整を行う。58は脚台付の鉢である。大きく外反する脚台部に腰の張った胴部をもち、口縁部は断面直線的に外傾する。口縁端部は丸く整形する。

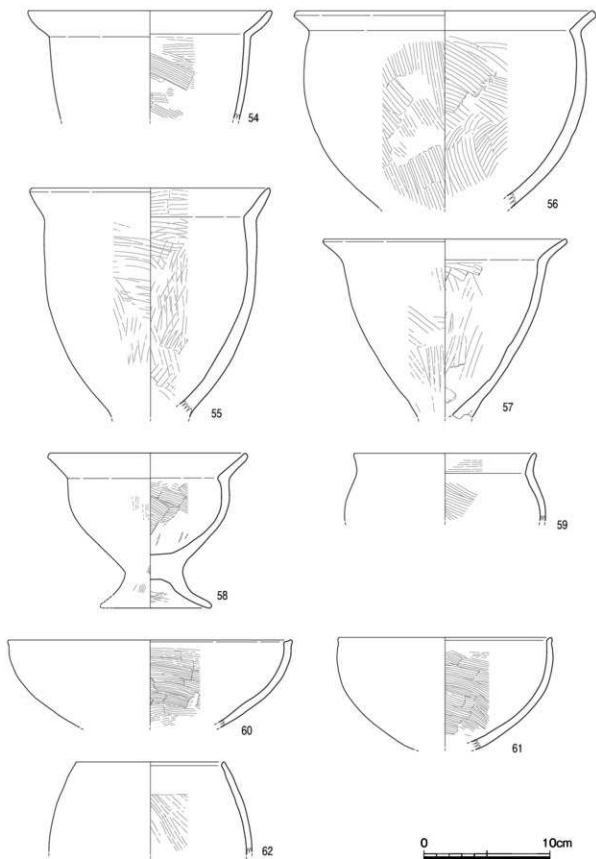
59は丸い胴部に短い口縁部がやや外傾してつく。内面に認められるハケメ調整は目が粗い。60は丸みを帯びた胴部の鉢で、内面にはハケメ調整が残る。口縁端部はナデ調整により外側にわずかな張り出しをもつ。61も丸い胴部の鉢で、底部は丸底か。内面にはハケメ調整を残すが、外面は丁寧にナデ調整を施す。62は丸みを帯びた胴部から口縁部はそのまま緩やかに内湾する。内外面ともにナデ調整で仕上げる。

63~90は壺の資料である。63は丸い肩部に大きく外反する長い頸部がつき、口縁部はそこから短く立ち上がる。肩部と頸部との境界では内面で段を作る。肩部には基部の付け根から放射状に延びる暗文を施す。64は63と比べると小ぶりであるが同様の器形で、口縁部の立ち上がりは短い。焼成不良で器面の状態が悪い。65は大きく外反する頸部に短い口縁部が立ち上がるが、下方へも張り出しをもつ。66の頸部はやはり外反するが短めで、外面の肩部と頸部との境界は緩やかにカーブして移行し、不明瞭である。口縁部はやや外傾して立ち上がる。また内面、肩部と頸部の境界で段を作る。67は大きく外反する頸部で、口縁部は上下にそれぞれつまみ出して若干張り出す程度である。68は頸部が大きく外反して開き肥厚させてそのまま口縁部となる。69は内傾する頸部が上方で外反し、直立する口縁部に至る。内外面ともに頸部と口縁部との境界は不明瞭である。口縁端部は丸く整える。

70は丸い肩部から頸部が外傾して立ち上がる。肩部内面にはハケメ調整が認められる。また肩部外面には黒色の彩文がやや乱雑に施される。71・72は同一個体の可能性が高い。同一個体であればやや縦に長い胴部から丸みを帯びた肩部に至り、外反して大きく開く頸部がつく。胴部には四角突帯が貼り付けられ、刻目が施される。また肩部外面にはナデ調整のちに粗くミガキ調整を施しており、あるいは暗文的効果を狙ったものであることも考えられる。73は肩部の資料で、内面、頸部との境界で段を作る。74は肩部と頸部の境界の資料で、三角突帯を巡らせる。

75は丸みを帯びた平底から胴部の上位で最大径を作り、若干丸みを帯びた肩部へと至り、口縁部は少し外傾して直線的に立ち上がる。内面にはハケメ調整を残し、また底面付近には指頭圧痕が顕著に認められる。外面は全体に丁寧なナデ調整を行い、肩部にはミガキによって暗文を施す。76は丸みを帯びた胴部・肩部からやや外傾する口縁部が直線的に延びる。器面の状態があまりよくないが、口縁部外面には黒色の彩文が認められる。

77は丸い体部に短い口縁部が若干外傾して立ち上がる。口縁端部はつまみ出しによりわずかに外側に張り出し、口縁部から肩部にかけてミガキによる暗文が巡る。胴部下半には焼成後に外面から穿た



第13図 竪穴住居1出土遺物⑥ (S=1/3)

れた穿孔がみられる。78は狭小な若干丸みを帯びた底部をもち、丸い体部に短い直立する口縁部がつく。外面での肩部から口縁部への移行は不明瞭である。肩部には黒色の彩文が乱雑に施される。79は狭小な平底から丸い胴部に至り、口縁部は短く直線的にやや外傾して立ちあがる。内外面ともにハケメ調整を施すが、外面はそののちナデ調整を行って肩部にはミガキによる暗文を入れる。80は肩部と口縁部の境界に三角突帯を巡らしており、やや長い口縁部は直線的に外傾する。口縁部と肩部にはミガキの暗文が入る。内面、頸部と口縁部との境界には段を作る。81はやや外傾する口縁部で、外面にはミガキによる暗文が施されている。82は外傾する口縁部で、端部はナデ調整により外側に段を作る。83は肩部の資料で、内面には明瞭にハケメ調整を残し、外面はハケメ調整・ナデ調整ののちにミガキによる暗文を施す。

84~90は壺底部の資料である。84~89はいずれも狭小で丸底気味の底部である。84・85は内面にハケメ調整を残し、外面は丁寧にナデ調整を行う。86の内面は丁寧にナデ調整を施しており、外面には目の細かいハケメ調整を施したのちにナデ調整を行っている。87は外面、底面付近に黒斑をもつ。外面は丁寧にナデ調整で、内面はハケメ調整で、特に底面付近には工具小口の痕跡が明瞭に残る。88の外面はハケメ調整ののちに丁寧にナデ調整を行う。89は、外面は丁寧にナデ調整を行い、内面はハケメ調整をそのまま残す。90は小型の壺の底部と思われる。内外面ともにハケメ調整が観察される。

91~99は高坏の資料である。

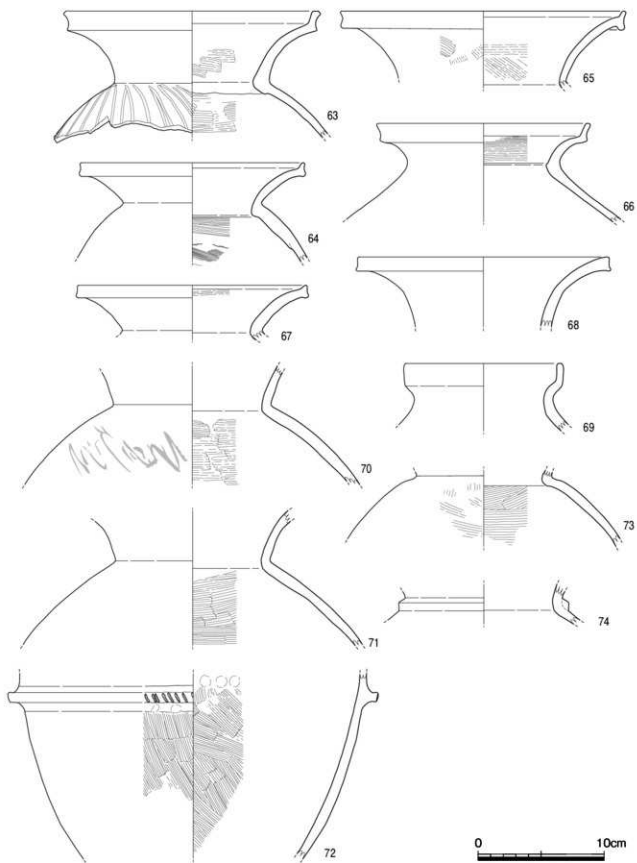
91は鐏状の口縁部がほぼ水平で延びるものと思われる。浅い皿部の外面はケズリ調整、内面はハケメ調整である。脚部は外面に縦方向のハケメ調整が施されている。92は皿部から屈曲して口縁部が大きく広がってつく。口縁部の断面は先細りである。内外面ともに丁寧にナデ調整が施されている。93は深めの皿部から屈曲して口縁部がつく。口縁部内面にはミガキによる暗文が入る。

94は浅い皿部から内外に段を作って口縁部が若干外反しながら大きく開いてつく。内面は全体にミガキをかけ、外面はハケメ調整・ナデ調整ののち線状のミガキを施し暗文としている。内面全体と、明瞭ではないが外面の口縁部には丹塗りを施している。砂粒を含まない精緻な胎土である。95は浅めの皿部にやや外傾する口縁部が立ち上がる。皿部と口縁部との境界には刻目突帯が巡り、口縁端部は外側へつまみ出して平坦部を作る。内外面ともにナデ調整を行い、口縁部には黒色の細線を連続して引き彩文となす。脚部には円周を三分割して透かしが入る。透かしは上部が半円形のもの1箇所、方形のもの2箇所である。

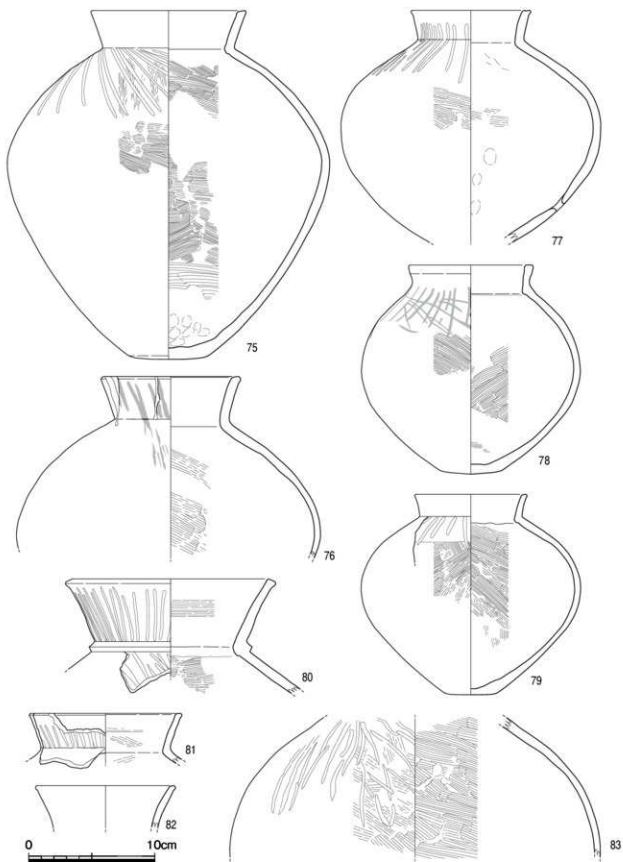
96は皿部の資料で外面にはケズリ調整が施される。97は脚部で、円周を四分分割する透かしが対角関係同士で高さをそろえて段違いとなる。透かし上部の形態はいずれも半円形である。98は脚部外面と皿部内面に丁寧にミガキ調整を行っている。99は比較的小型の高坏脚部である。砂粒を含まない精緻な胎土で外面にはミガキが施される。小さい円形の透かしをもつ。

100~102は器台の資料である。100は、上下の裾部は外反して大きく広がり、その端部はつまみ出しによって上下に張り出しをもつ。くびれ部には水平方向にクシメ文を施し、その上下に方形の透かしを、円周を四分分割して切り出す。101は裾部が大きく外反し、円周を三分分割する方形の透かしをもつ。102は強く外反して開く裾部である。

103は刻目突帯文をもつ弥生時代早期の甕である。さほど屈曲は強くなく、断面三角の突帯には指による刻目が施される。外面は擦過調整、内面はナデ調整である。

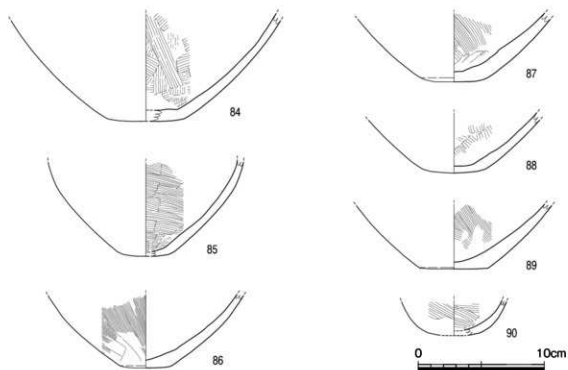


第14図 竪穴住居1出土遺物⑦ (S=1/3)

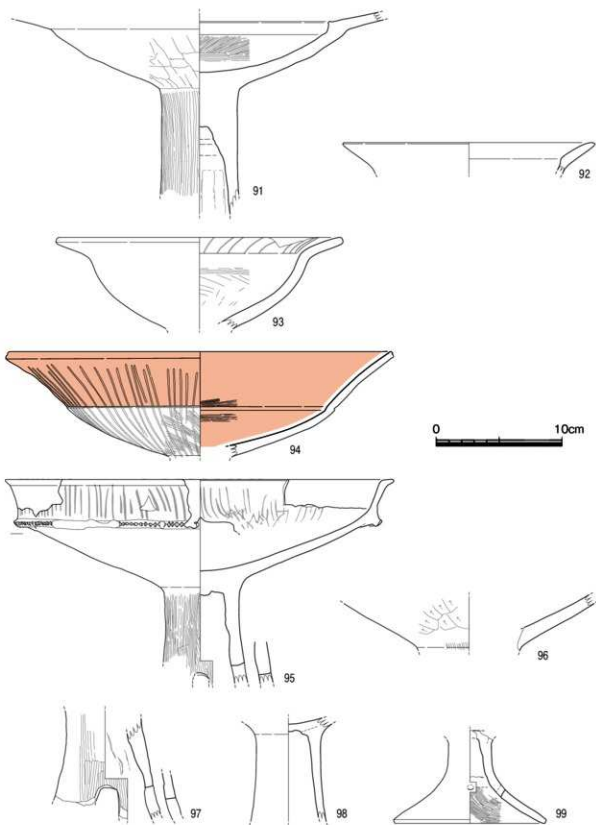


第15図 竪穴住居1出土遺物⑧ (S=1/3)

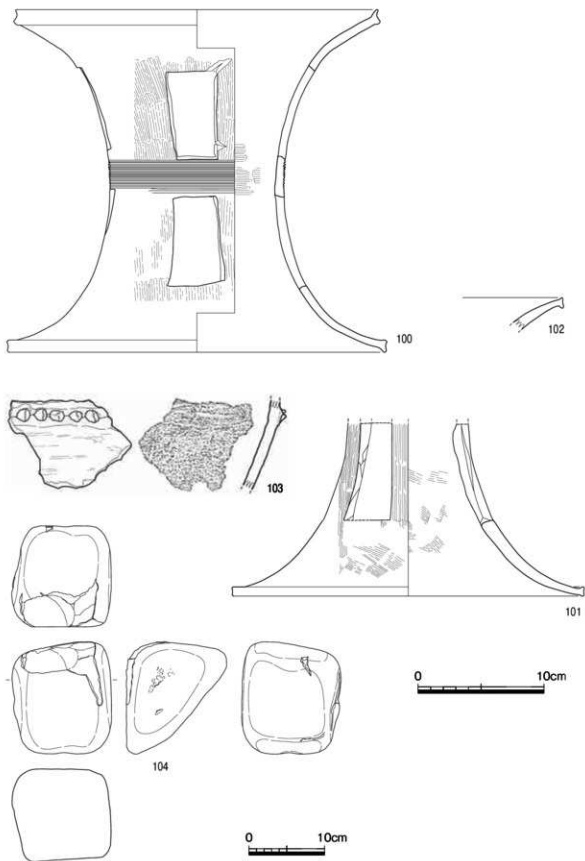
104は水磨を受けた砂岩の亜角礫を素材としており、平坦面を砥石や台石として使用している。



第16図 竪穴住居1出土遺物⑨ (S=1/3)



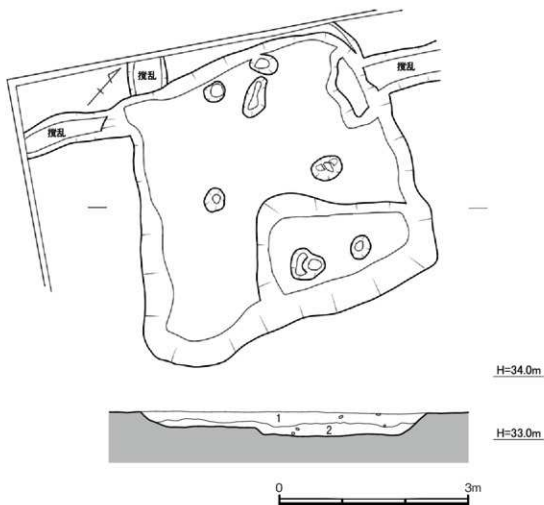
第17図 竪穴住居1出土遺物⑩ (S=1/3)



第18図 竪穴住居1出土遺物① (100~103 : S=1/3, 104 : S=1/5)

竪穴住居 2 (SI02)

調査区の南西端、グリッド N・O・2・3 における検出である。隅丸方形の平面を呈し、北東・南西方向に 4.0～4.8m、北西・南東方向に 4.3～4.5m を測る。遺構内で北東・南西方向に並ぶ 2 基の柱穴を検出しており、これらが住居の主柱となるものと思われる。検出面から床面までの深さは、0.4m を測る。床面はⅥ層を掘り抜き、Ⅶ層に達しているが、遺構内出土遺物をみると突帯文期の資料が多くみられるため、本来は遺構内堆積、2 層の上面あたりが床面であったことも考えられる。



第19図 竪穴住居 2 実測図 (S=1/60)

竪穴住居 2 出土遺物 (第20図～第22図)

1～24は竪穴住居 2 内出土の遺物である。

1～5は長胴甕の資料である。1は、縦に長い胴部は比較的上位で最大径をもち、そこから一旦すぼまって外傾・内湾する口縁部に至る。内外面ともにナデ調整を施すが、外面胴部中ほどにはハケメ調整が残る。外面の胴部上位から口縁部にかけて炭化物が付着する。2はほかの長胴甕に比べると胴部の最大径が低い位置にくる。底部は脚台付きである。器面の状態が良くないが、内面にはハケメ調整が観察される。外面には上半に炭化物の付着が認められる。3は胴部から口縁部へのすぼまりは弱い。外面には炭化物が付着する。4は脚台部から胴部下位の資料である。5は底部付近の資料で、内面には炭化物が残存する。6は比較的大型の甕もしくは壺の胴部である。突帯を巡らし刻目を施す。7は大型の甕もしくは壺の底部である。若干の丸みをもつ。

8・9は壺である。8はわずかに丸みをもつ平底で球形の胴部に外反して大きく開く頸部がつき、さらに口縁部が短く直立する。内面には明瞭にハケメ調整を残し、外面は全体にナデ調整を行うが体部上半についてはハケメ調整が残る。9は外反して大きく開く口縁部・頸部の資料で、口縁端部は上下に張り出しをもつ。

10・11は器台である。10は上下の裾部が外反して大きく開く。裾部端部はつまみだしにより張り出す。くびれ部にクシメ文を横方向に走らせ、その上下に円周を三分割して方形の透かしを切り出す。11は大きく外反する裾部である。

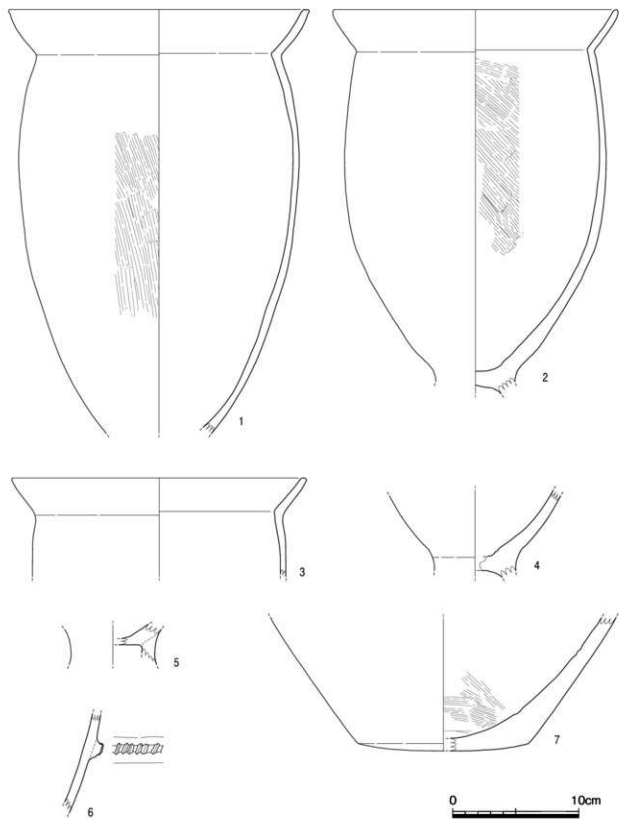
12～24は縄文時代後期から突帯文期の資料である。

12は強く外傾する深鉢の口縁部である。内外面ともにナデ調整である。13はやや内傾する深鉢口縁部である。口縁端部は上方からのナデ整形により外側へ張り出しを作る。14・15は刻目突帯文をもつ甕である。14は胴部突帯部分で強い屈曲をもち、口縁部は内傾し、端部は若干外反する。刻目は指によるものである。15は胴部突帯の資料で、屈曲はさほど強くない。刻目は棒状の工具の側面を押しあてたものと思われる。16は晩期深鉢もしくは突帯文期甕の底部である。断面、強い張り出しをもつ。

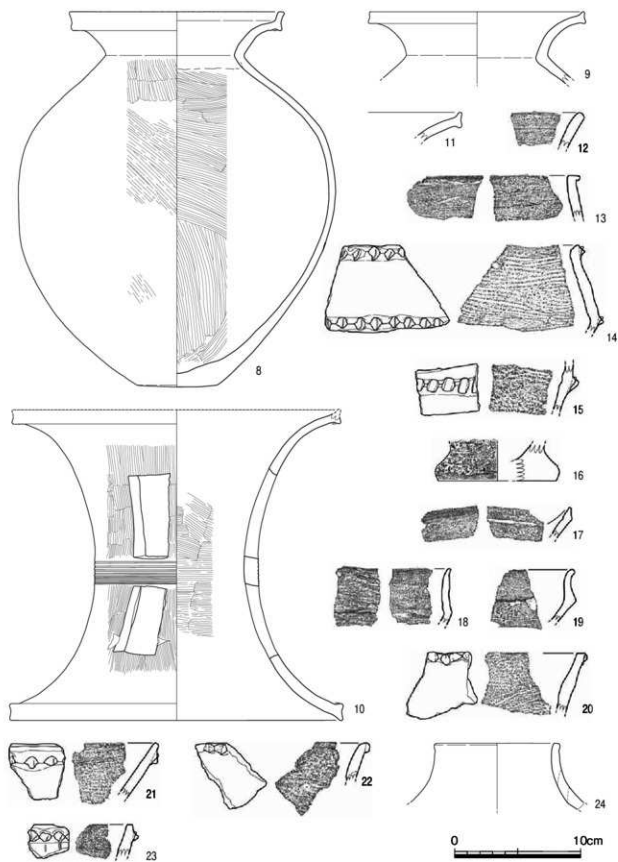
17は縄文時代後期の波状口縁鉢である。内面には段をもち、内外面ともに研磨調整が施される。18・19は断面逆「く」字形の浅鉢である。18は屈曲が弱く口縁部は垂直に近く立ち上がる。19の口縁部はしっかりと屈曲し内傾するが、端部は外反する。胴部外面に炭化物が付着する。

20～23は刻目をもつ粗製浅鉢である。20は外傾する口縁部で端部は上方から平坦に整える。刻目は指によるものか。21は外傾する口縁部で指刻みである。22は突帯を貼り付けず、口縁外端部に直接工具を押し引いて刻目を施す。23は口縁端部を平坦に整える。指刻みである。24は壺の口縁部・頸部である。内面は擦過調整、外面はナデ調整である。

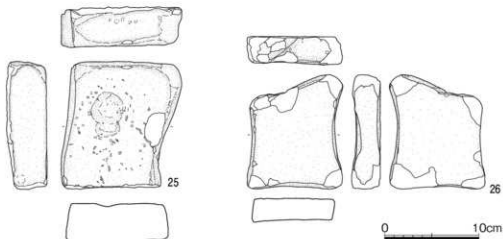
25は中央部に生痕化石をもつ砂岩を素材とした砥石である。3面を研ぎ面としており、正面には敲打痕も観察されることから、生痕の凹みも利用して台石としても使用したのと考えられる。26は赤いラミナ構造の縮模様が観察される堆積岩が素材で、6面ともを研ぎ面としている。うち上側面には溝状の研ぎ面がみられる。



第20図 竪穴住居2出土遺物① (S=1/3)



第21図 竪穴住居 2 出土遺物② (S=1/3)



第22図 竪穴住居2 出土遺物③ (S=1/4)

溝 (SD01)

L列～N列にかけて調査区を北西から南西に縦断するものである。幅は最大で3.8mを測る。堆積状況と遺構内出土遺物から掘削と埋没を複数回繰り返している。最初の掘削は少なくとも弥生時代後期以前と考えられる。最終的に完全埋没したのちも自然流路として存続したものと判断する。遺構内出土遺物としては、ほとんどが弥生時代後期と思われるものであるが、2層より近世磁器片の出土が1点みられた。

土坑1 (SK01)

グリッドF9からの検出で、土坑2と並ぶように検出した。北西・南東0.98m、北東・南西1.04mを測り、平面円形を呈する。深さは最深部で8cmと浅い。覆土にはⅢ層土と同質の黒色土が入るが、非常に多量の炭化木材を確認した。弥生土器小片の出土がみられた。

土坑2 (SK02)

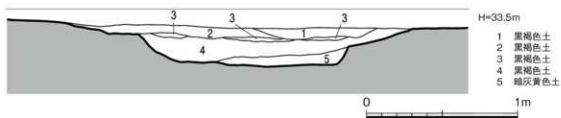
グリッドE9からの検出である。土坑1の北西側、山手に隣接する。北西・南東1.20m、北東・南西1.14mの平面円形を呈しており、最深部で深さは9cmである。土坑1よりひと回り大きい。覆土からは土坑1同様、多量の炭化木材を検出している。

土坑3 (SK03)

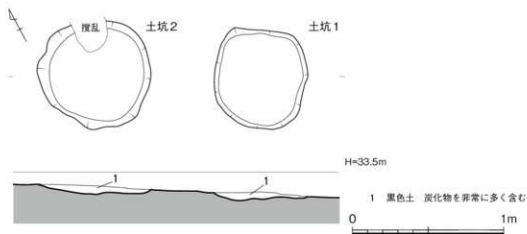
グリッドE9・E10からの検出である。土坑1の北東側に位置する。北西・南東2.10m、北東・南西1.46mの平面楕円形をなしており、最深部で深さは21cmである。1・2層より炭化物の検出がみられた。

土坑3出土遺物

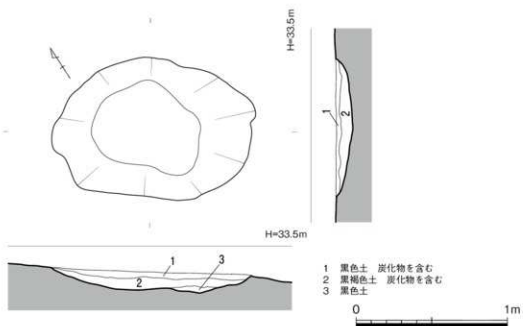
1は高坏の口縁部と思われる。口縁部下端には刻目を施す。内外面ともにナデ調整である。



第23図 溝実測図 (S=1/40)



第24図 土坑1・土坑2実測図 (S=1/40)



第25図 土坑3実測図 (S=1/40)



第26図 土坑3出土遺物 (S=1/3)

4 包含層ほか出土遺物

Ⅲ層出土遺物（第27図～第32図）

1～29は縄文時代晩期・突帯文期の資料，30～81は弥生時代後期の資料，82は中世の資料である。

1・2は縄文時代晩期の深鉢口縁部である。1はやや厚手で、大きく外反する。内外面ともに比較的丁寧にナデ調整を施す。2は内外面ともに擦過調整で、口縁端部はナデ調整の整形により外反する。

3～13は突帯文土器の甕である。3～6は口縁部の資料，7～13は胴屈曲部の資料である。12は工具による刻目を施すが、他は指先によって施された刻目である。3は器壁に焼成前の穿孔様のものがあるが、有機質のもの粘土への混入であることも考えられ意図的なものかは不明である。口唇部上端を平坦に整えている。4は非常に強い内傾を示す。内面には横方向の貝殻条痕調整が観察される。

5は口唇部上面を平坦に整える。

7は外面に炭化物の付着が認められる。8・9の屈曲は緩やかである。10は内外面に貝殻条痕調整を施す。11の外面には炭化物が付着する。12は厚手の器壁で、突帯裏には横方向の強いナデ調整を施す。

14・15は縄文時代晩期もしくは突帯文期の深鉢・甕の底部である。14は断面、強い張り出しをもつ。15の張り出しはここまで強くない。

16は突帯文期の断面逆「く」字をなす鉢である。強く胴部で屈曲し、口縁部は内傾、口唇部は先細りとなって強く外反する。外面、屈曲より下位は擦過調整、屈曲より上位は丁寧にナデ調整である。内面は貝殻条痕調整のちにナデ調整を施す。17は縄文時代後期の波状口縁の鉢である。波頂部の資料で、内面には段を作り、内外面ともに研磨調整を施す。

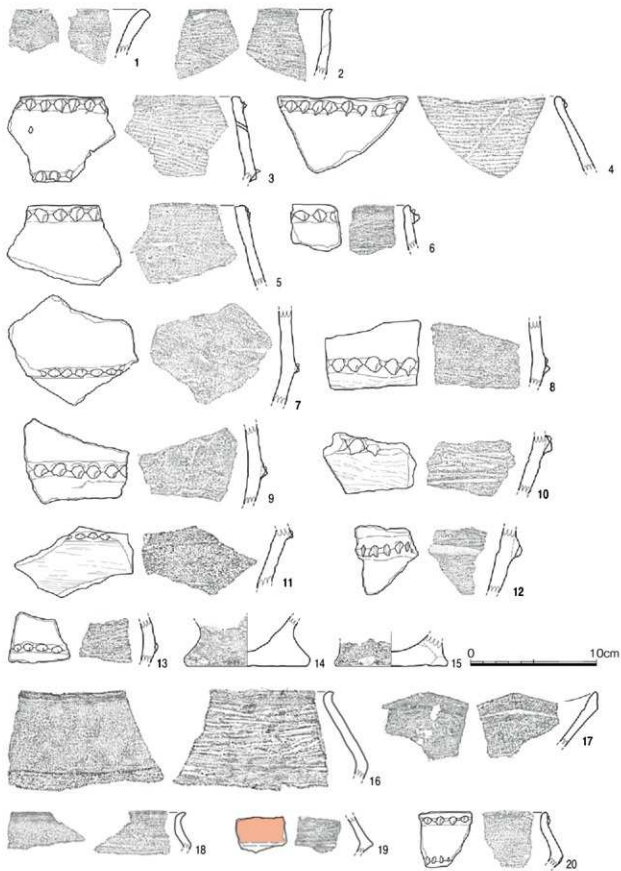
18～20は突帯文期の断面逆「く」字をなす浅鉢である。18の強く内傾する口縁部は、上位で強く外反し、先細りとなる。黒色磨研である。19は屈曲部から口縁部は強く内傾する。外面には赤色塗彩を行う。20の内傾する口縁部は上位で外反する。口縁部に指による刻目を、胴屈曲にはヘラ状工具による刻目を施す。

21～23は縄文時代晩期・突帯文期の粗製浅鉢である。21は胴部から緩やかに内湾して口縁部はわずかに外傾する。外面には厚い炭化物の付着が認められる。22は外傾する口縁部の資料で、器壁は比較的薄手である。外面には厚く炭化物が付着する。23は外傾する口縁部で、口唇部に接して突帯が貼り付けられ、指による刻目が施される。外面には炭化物が付着する。24は薄手の器壁で、細い断面三角の突帯に指による強い刻目を入れる。25は厚手の組織痕土器である。外面にはアングンの圧痕が観察される。

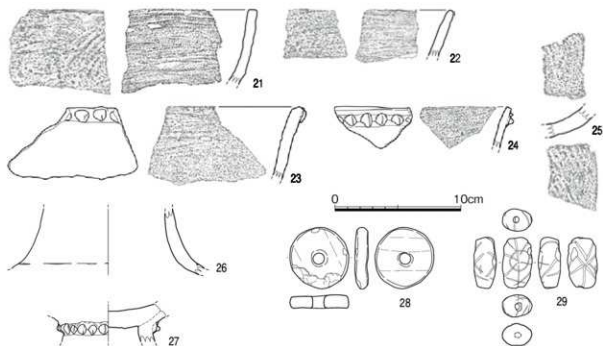
26はおそらく突帯文期のものと思われる壺の頸部である。外面には研磨調整を施す。肩部と頸部との境界には鋭利な工具による沈線が巡るが、その後の研磨調整で途切れ途切れである。27は突帯文期の高坏である。脚部最上位に刻目突帯をもつ。

28は紡錘車である。粗製土器片の周囲を打ち欠いたのちに研磨を施し、中央には穿孔を入れる。29は土鉢か、もしくは管玉の土製模造品と考えられる。線刻が施される。

30～41は脚台付長胴甕の資料である。いずれも胴部は高い位置で最大径を作り、そこから一旦内傾して内湾する口縁部が外傾する。30の口縁部は外端部のつまみ出しと外面のナデ調整で外側への張り出しが明瞭である。31の口縁部は立ち上がりやや短めである。32は外面に炭化物の付着が認められる。33は器壁が薄く、口縁部の外傾の度合いが強い。胴部外面最上位に炭化物が付着する。34は外面の胴部と口縁部の境界が不明瞭である。35は外面に炭化物が付着する。36の口唇部は平坦に整え、内面へと傾斜する。外面には炭化物が付着する。37は外面、胴部から口縁部への移行が緩やかである。



第27図 III層出土遺物① (S=1/3)



第28図 III層出土遺物② (S=1/3)

口縁部外面上位に炭化物が付着する。38は器面の状態が悪いが、外面には炭化物が残存する。口唇部を平坦に整える。

42は胴部と口縁部との境界に三突帯を巡らす甕の資料である。

43~48は長胴甕の脚台の資料である。43~47はそれぞれ裾部が外反・先細りしながら大きく開く。

49は脚台部の資料で、裾端部外面に沈線を引く。

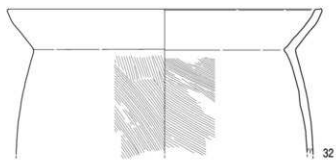
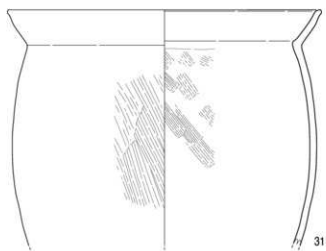
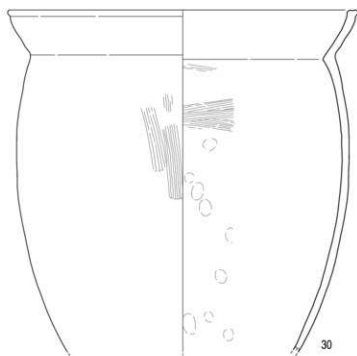
50~52は鉢の資料である。50は胎土に赤色粒子を含む。外面にはハケメ調整が明瞭に残る。51は丸みを帯びた胴部に口縁部が大きく外傾する。脚台をもつものか。52はボウル状の器形で、口縁部外面には段を作る。

53~67は壺の資料である。53は大きく開く頸部に短い口縁部が立ち上がる。54は口縁部の立ち上がりがやや高く、口縁部下位には「M」字状の二段の段をもつ。高坏の可能性もある。55の口縁部立ち上がりは短い。56は大きく開く頸部でその端部をそのまま上下につまみ出して口縁部とする。58の頸部は若干内湾する。

59~61は頸部が肩部から外傾してそのまま口縁部となる資料である。59・60は外反し、61は直線的である。62はおそらく長胴の胴部をもつもので、肩部はなで肩、そこから延びる頸部・口縁部は直線的で外傾する。橙色系の色調が特徴的である。63は胴部の資料で、断面四角の突帯に刻目を施す。64~67は底部の資料である。いずれも狭小な平底で内面にハケメ調整を残すが、64はやや丸みを帯びる。

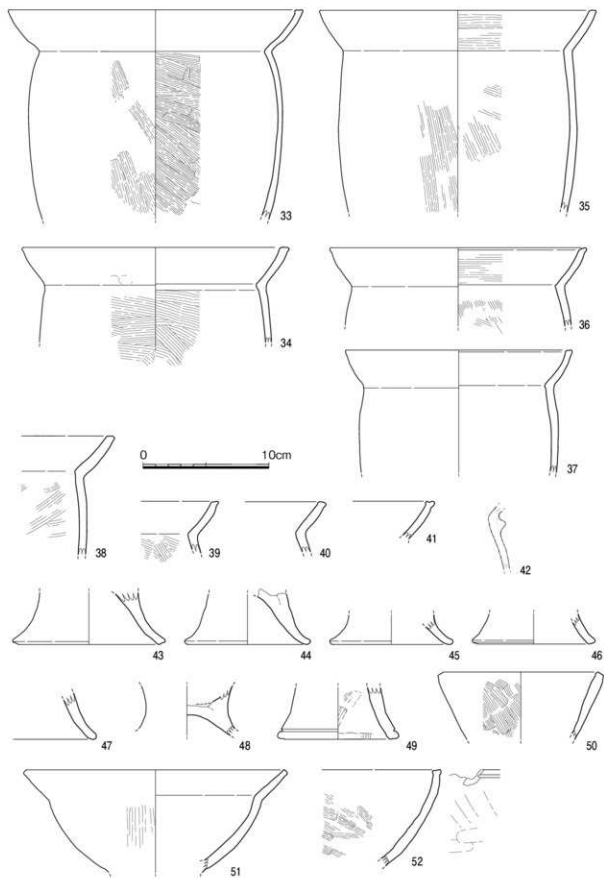
68~72は高坏の資料である。68は浅い坏部から口縁部が直線的に立ち上がり、その接合部には刻目を施す。口縁部は外側へつまみ出す。69は直立する口縁部で、外面には暗文を入れる。70・71は鐙状の口縁部をもつもので、どちらも内面、坏部と口縁部の境界には張り出しをもつ。70は外面にはハケメ調整を行い、内面はハケメ調整ののちにミガキを施す。72は脚部の資料である。

73~79は器台の資料である。73~77は裾部で、大きく外反し、端部をつまみ出す。78・79は透かしの部分で、工具による切り込みがみられる。

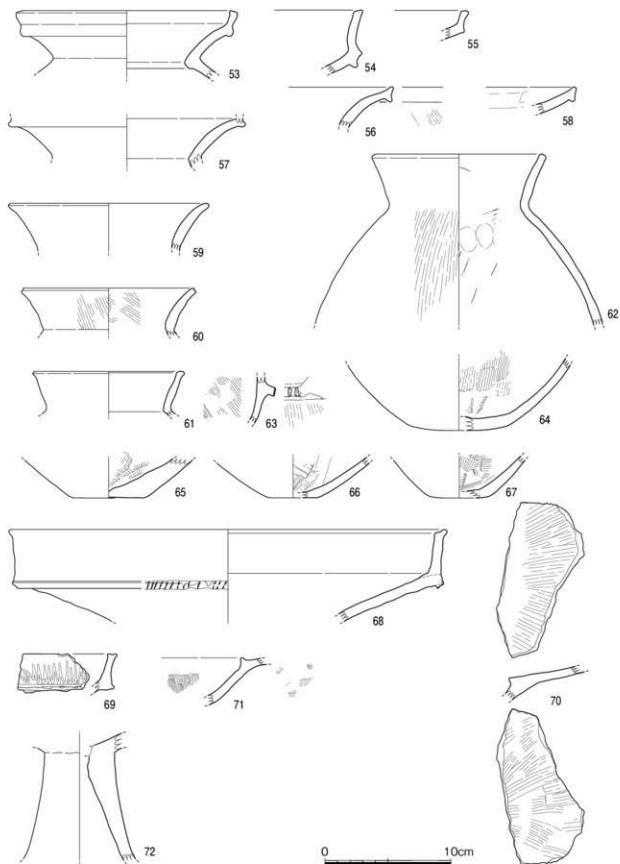


0 10cm

第29図 Ⅲ層出土遺物③ (S=1/3)



第30图 Ⅲ层出土遗物④ (S=1/3)

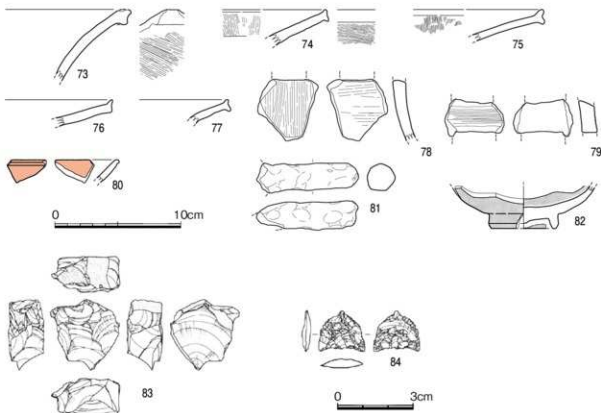


第31图 Ⅲ層出土遺物⑤ (S=1/3)

80は皿か坏となるもので、内外面ともに丹塗りである。口縁部外面には沈線を引く。81は杓子形土製品の柄の部分と思われる。

82は青磁の碗である。

83は黒曜石の石核である。打面を変えながら多方向から剥離を行っており、一部に自然面を残している。84は黒曜石製の石鏃である。長さに対して横幅のほうが広く、両側片は弧状である。また、基部については内湾する。83・84ともに漆黒色を呈し、不純物の少ない良質な黒曜石を素材とする。



第32図 Ⅲ層出土遺物⑤ (73~82:S=1/3, 83-84:S=2/3)

Ⅱ層ほか出土遺物 (第33図・第34図)

1~18は縄文時代後期から突帯文期にかけての資料, 19~40は弥生時代中・後期の資料, 41~48は中世の資料である。

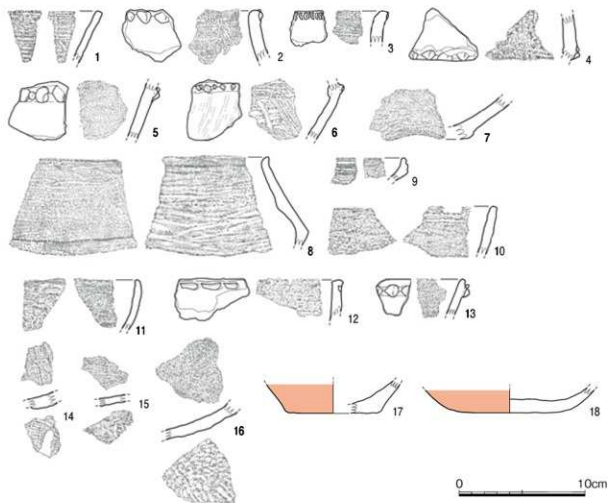
1は縄文時代晩期の深鉢で、外傾する口縁部である。比較的薄手の器壁である。

2~6は突帯文期の甕である。2は内傾する口縁部で、外反させた口唇部に直接刻目を施す。刻目は指先による。3は外反する口唇部に半截竹管状の工具で刻目を施す。4~6は胴部突帯の資料である。4・5は指による刻目である。6の刻目原体は不明である。

7は浅鉢の底部である。内外面ともに研磨調整を行う。8は鉢で、強い屈曲から口縁部は内傾し、口唇部は先細りとなって外反する。9は縄文時代後期の鉢口縁部で、口縁部文様帯に沈線と縄文が認められる。

10~13は粗製浅鉢である。10・11は外面に炭化物が付着する。12は工具の押しききにより刻目を入れる。13は指先による刻目である。

14~16は組織痕土器である。14・15はアンギン, 16は龍目の圧痕が認められる。



第33図 II層ほか出土遺物① (S=1/3)

17・18は壺の底部である。17は平底，18は平端部をもつが胴部との境界は不明瞭である。どちらも外面に丹塗りを施す。

19は弥生時代中期の甕である。断面三角で外側へのびる口縁部は上方へ反る。

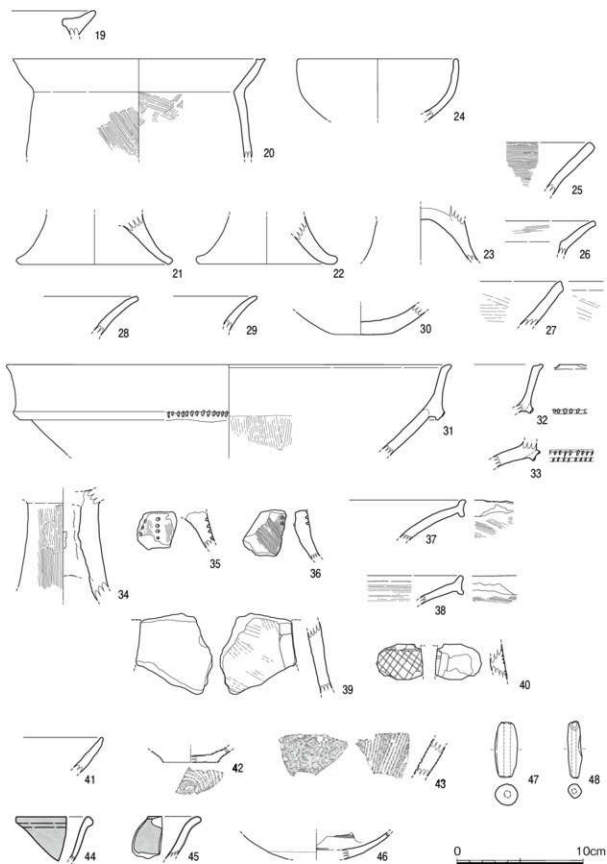
20～23は脚台付長胴甕である。20は内外面にハケメ調整を残す。21～23は脚台部の資料である。いずれも裾部は先細りとなって大きく外反する。24～27は鉢である。24は内外面ともに丁寧に作る。25は一応鉢と判断したが、高坏脚部の可能性もある。外面はミガキ調整，内面はハケメ調整である。26は大きく外傾する口縁部である。27は直線的に外傾する口縁部である。

28～30は壺である。28・29は外傾・外反する口縁部である。30は底部で、狭小な平底をなす。

31～36は高坏である。31は深めの坏部をもち、口縁部は若干外傾する。坏部と口縁部との境界には刻目を施す。32・33も31同様刻目をもつ。34～36は脚部である。34の外面には目の細かいハケメを縦方向に施す。35・36は列点文をもつ。

37～40は器台である。37・38は裾部で、端部は上下に張り出しをもつ。39・40は透かしの切り出しが確認できる。40は鋭利な工具によって格子目文が施される。

41・42は土師器の坏である。42は底面に糸切り痕をもつ。43は須恵質の擂鉢で、内面にクシメが入る。44・45は青磁碗である。44の口縁部は外側へ肥厚し、45の口縁部は外反する。46は唐津焼皿で、内面に鉄絵が認められる。47・48は土唾である。



第34図 II層ほか出土遺物② (S=1/3)

第2表 竪穴住居1 出土遺物観察表①

図 番 号	種類	数量	クワット	発掘層位	文様・彫刻		色澤		出土	備考
					外周	内周	外周	内周		
8	灰土焼結土器	壺	-	SRI	十字	ハクメ・十字	横	横	黄褐色・灰石・石灰・白色粒子・赤色粒子	灰土焼結土器 口径 27.8
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	十字	ハクメ・十字	横	横	黄褐色・灰石・白色粒子	灰土焼結土器 口径 28.4 断面最大径 25.2
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	明赤褐色	横	黄褐色・灰石・白色粒子・赤色粒子	灰土焼結土器 口径 24.4 断面最大径 22.5
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	十字	ハクメ・十字	横	横・灰黄褐色	黄褐色・灰石・白色粒子	灰土焼結土器 断面に炭化物付着 口径 22.2
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ	十字	に高い稜	明赤褐色	黄褐色・灰石	断面に炭化物付着 口径 22.2
9	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	に高い稜	横	黄褐色・灰石	灰土焼結土器 断面に炭化物付着 口径 24.2
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	明赤褐色	横	黄褐色・灰石・白色粒子	灰土焼結土器 断面に炭化物付着 口径 22.7 断面最大径 20.3
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ	ハクメ・十字	に高い稜	に高い稜	黄褐色・灰石	断面に炭化物付着 口径 22.2 断面最大径 20.2
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ	ハクメ	横	横	黄褐色・灰石・石灰・白色粒子	口径 22.2 断面最大径 20.2
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	横	横	黄褐色・灰石	灰土焼結土器 口径 22.4 断面最大径 20.3
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	横	横	黄褐色・石灰	灰土焼結土器 口径 22.0
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	横・灰黄褐色	横	黄褐色・石灰・白色粒子	灰土焼結土器 断面に炭化物付着 口径 22.2 断面最大径 20.4
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	明赤褐色・灰黄褐色	明赤褐色	黄褐色・灰石・白色粒子	灰土焼結土器 口径 21.4
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ	横	横	黄褐色・灰石・石灰	灰土焼結土器 口径 22.0
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	に高い稜	に高い稜	黄褐色・灰石	断面に炭化物付着 口径 22.0
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ	ハクメ・十字	明赤褐色・黄褐色	明赤褐色	黄褐色・灰石・白色粒子	灰土焼結土器 口径 22.0
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	横	横	黄褐色・灰石・白色粒子	灰土焼結土器 断面に炭化物付着 口径 22.4 断面最大径 20.9
10	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ	ハクメ	に高い稜	横	黄褐色・灰石	灰土焼結土器 断面に炭化物付着 口径 22.4 断面最大径 19.9
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ	ハクメ	に高い稜	横	黄褐色・灰石	口径 21.0
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ	ハクメ	に高い稜	横	黄褐色・灰石	断面に炭化物付着 口径 21.4
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ	ハクメ	に高い稜	に高い稜	黄褐色・灰石	断面に炭化物付着 口径 21.4
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	に高い稜	に高い稜	黄褐色・灰石	断面に炭化物付着 口径 21.8
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ	ハクメ	に高い稜	に高い稜	黄褐色・灰石・石灰	断面に炭化物付着 口径 21.8 断面最大径 17.2
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ	ハクメ	横	に高い稜・灰黄褐色	黄褐色・灰石・石灰・白色粒子・赤色粒子	灰土焼結土器 口径 19.2 断面最大径 17.4
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	十字	ハクメ・十字	明赤褐色	明赤褐色	黄褐色・灰石	灰土焼結土器 口径 18.4 断面最大径 17.3
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	十字	ハクメ・十字	に高い稜	に高い稜	黄褐色・灰石・白色粒子	断面に炭化物付着 口径 18.2 断面最大径 16.2
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	十字	ハクメ・十字	横	横	黄褐色・灰石・石灰	灰土焼結土器 口径 18.0
	灰土焼結土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ	明赤褐色	に高い稜	黄褐色・灰石	灰土焼結土器 口径 18.4

区	番号	種類	目的	グリッド	調査年度	文庫・図録		色紙		出土	備考
						外蔵	内蔵	外蔵	内蔵		
11	30	居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ナブ	横・橙	横	黄褐色・石灰	灰褐色土 焼成土器 口縁(18.2)
	31	居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ナブ	濃い黄緑	濃い黄緑	黄褐色・石灰・白色粒子・赤色粒子	灰褐色土 口縁(17.8)
	32	居住施設土器	壺	-	SHI	ハナメ・ナブ	ハナメ・ナブ	濃い黄	横	黄褐色・石灰・白色粒子	灰褐色土
	33	居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ハナメ・ナブ	黄	黄	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	焼成土器
	34	居住施設土器	壺	-	SHI	ハナメ・ナブ	ハナメ・ナブ	濃い黄	横	黄褐色・石灰・石灰	灰褐色土
	35	居住施設土器	壺	-	SHI	ハナメ・ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	焼成土器
	36	居住施設土器	壺	-	SHI	ハナメ・ナブ	ハナメ・ナブ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	焼成土器
	37	居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ハナメ・ナブ	黄	黄	黄褐色・石灰・白色粒子	焼成土器
38	居住施設土器	壺	-	SHI	ハナメ・ナブ	ハナメ	横	濃い黄緑	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子・赤色粒子	焼成土器	

第3表 竪穴住居1出土遺物観察表②

区	番号	種類	目的	グリッド	調査年度	文庫・図録		色紙		出土	備考
						外蔵	内蔵	外蔵	内蔵		
12	39	居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ハナメ・ナブ	横	濃い黄緑	黄褐色・石灰・白色粒子	灰褐色土
	40	居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ハナメ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土
	41	居住施設土器	壺	-	SHI	ハナメ・ナブ	ハナメ・ナブ	横	黄	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土
	42	居住施設土器	壺	CI2	SHI-B	ナブ	ナブ	濃い黄緑	濃い黄緑	石灰	灰褐色土 内蔵に灰化跡付着
	43	居住施設土器	壺	-	SHI	ハナメ・ナブ	ハナメ	濃い黄緑	横	黄褐色・石灰・白色粒子	灰褐色土 焼成土器
	44	居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ハナメ	濃い黄緑	濃い黄緑	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土 焼成土器
	45	居住施設土器	壺	BI2	SHI-B	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土 焼成土器
	46	居住施設土器	壺	CI2	SHI-B	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土 焼成土器
	47	居住施設土器	壺	CI2	SHI-B	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土 焼成土器
	48	居住施設土器	壺	CI2	SHI-B	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土 焼成土器
	49	居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土 焼成土器
	50	居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ナブ	黄	黄	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土
13	51	居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ナブ	濃い黄緑	濃い黄緑	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土
	52	居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ナブ	濃い黄緑	横	黄褐色・石灰	灰褐色土 磨り粉砕土器
	53	居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ナブ	濃い黄緑	濃い黄緑	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土
	54	居住施設土器	壺	-	SHI	ハナメ・ナブ	ハナメ・ナブ	濃い黄緑・黄	濃い黄緑・黄	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土 焼成土器
	55	居住施設土器	壺	-	SHI	ハナメ	ハナメ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土 口縁(19.4)
	56	居住施設土器	壺	-	SHI	ハナメ	ハナメ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土 口縁(24.2)
	57	居住施設土器	壺	-	SHI	ハナメ	ハナメ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土 口縁(18.6)
	58	居住施設土器	壺	-	SHI	ハナメ・ナブ	ハナメ	横	濃い黄・横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	口縁(14.6) 焼成土器
	59	居住施設土器	壺	-	SHI	ハナメ	ハナメ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土 口縁(14.6)
	60	居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ハナメ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土 口縁(17.2)
	62	居住施設土器	壺	CI2	SHI-B	ナブ	ナブ	濃い黄緑	濃い黄緑	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土
	14	61	居住施設土器	壺	-	SHI	焼成土器/ハナメ・ナブ	ハナメ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子・赤色粒子
63		居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ハナメ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子・赤色粒子	灰褐色土 口縁(18.6)
64		居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	口縁22.9
65		居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土 口縁(17.1)
67		居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰	灰褐色土 口縁(18.4)
68		居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰	灰褐色土
69		居住施設土器	壺	-	SHI	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子・赤色粒子	灰褐色土
70		居住施設土器	壺	-	SHI	焼成土器/ナブ	ハナメ	横・濃い黄	横	黄褐色・石灰・石灰	灰褐色土

群	番号	遺跡	グリッド	遺跡番号	文様・図型		色相		土質	備考	
					外周	内周	外周	内周			
14	71	弥生前期土器	黄	-	SRI	縦文/ナデ	ハケメ	に高い横	横	赤陶石・灰石・石灰・白色釉子・赤色釉子	灰土灰瓦
	72	弥生前期土器	黄	-	SRI	横文/ハケメ+ナデ	ハケメ	横	横	赤陶石・灰石・白色釉子	灰土灰瓦
	73	弥生前期土器	黄	C12	SRI-B	ハケメ+ナデ	ハケメ	に高い横	横	赤陶石・灰石・石灰	灰土灰瓦
	74	弥生前期土器	黄	C12	SRI-B	ナデ	ナデ	に高い横	に高い横	赤陶石・灰石・石灰・白色釉子	灰土灰瓦
	75	弥生前期土器	黄	-	SRI	縦文/ハケメ+ナデ	ハケメ	灰黄緑・に高い横	横	赤陶石・灰石・白色釉子	灰土灰瓦 麻尾遺跡II集塊 13号 11.4 調査最大径 125.6cm
76	弥生前期土器	黄	-	SRI	斜文/ナデ	ハケメ	赤	赤	赤陶石・灰石・石灰・白色釉子	口付1.2 調査最大径 122.4	
77	弥生前期土器	黄	-	SRI	縦文/ハケメ+ナデ	ハケメ+ナデ	に高い横	に高い横	赤陶石・灰石・石灰・白色釉子	灰土灰瓦・準品未4 13号 9.45 調査最大径 20.85	
15	78	弥生前期土器	黄	-	SRI	斜文/ハケメ+ナデ	ハケメ	横	に高い横	赤陶石・灰石・石灰・白色釉子	灰土灰瓦 13号 10.0 調査最大径 127.45
	79	弥生前期土器	黄	-	SRI	縦文/ハケメ+ナデ	ハケメ	に高い横	に高い横	赤陶石・灰石・石灰・白色釉子	灰土灰瓦 13号 9.45 調査最大径 127.45
	80	弥生前期土器	黄	-	SRI	縦文/ナデ	ハケメ	横	横	赤陶石・灰石・石灰・白色釉子	灰土灰瓦 13号 16.80
	81	弥生前期土器	黄	-	SRI	縦文/ナデ	ハケメ+ナデ	横	横	赤陶石・灰石・石灰・白色釉子・赤色釉子	灰土灰瓦 13号 12.25

第4表 壑穴住居1出土遺物観察表③

群	番号	遺跡	グリッド	遺跡番号	文様・図型		色相		土質	備考	
					外周	内周	外周	内周			
16	82	弥生前期土器	黄	-	SRI	ナデ	ナデ	に高い横	に高い横	赤陶石・灰石・石灰・白色釉子・赤色釉子	灰土灰瓦
	83	弥生前期土器	黄	-	SRI	縦文/ハケメ+ナデ	ハケメ	に高い横	横	赤陶石・灰石	灰土灰瓦
	84	弥生前期土器	黄	-	SRI	ナデ	ナデ	横	横	赤陶石・灰石	灰土灰瓦
	85	弥生前期土器	黄	-	SRI	ハケメ+ナデ	ハケメ	に高い横・縦横	に高い横	赤陶石・灰石・白色釉子	灰土灰瓦
	86	弥生前期土器	黄	-	SRI	ハケメ+ナデ	ナデ	に高い横	に高い横	赤陶石・灰石・白色釉子	灰土灰瓦 13号 4.25
	87	弥生前期土器	黄	-	SRI	ナデ	ハケメ	に高い横	横	赤陶石・灰石・石灰・白色釉子	灰土灰瓦 麻尾遺跡II集塊 13号 5.45
	88	弥生前期土器	黄	-	SRI	ハケメ+ナデ	ハケメ	に高い横	に高い横	赤陶石・灰石	灰土灰瓦 13号 5.45
	89	弥生前期土器	黄	-	SRI	ナデ	ハケメ	横	横	赤陶石・灰石・石灰・白色釉子・赤色釉子	灰土灰瓦 13号 5.45
	90	弥生前期土器	黄	-	SRI	ハケメ	ハケメ	に高い横	黄	赤陶石・灰石	灰土灰瓦
	91	弥生前期土器	高杯	-	SRI	ナデ/ハケメ	ハケメ	明黄緑	明黄緑	赤陶石・灰石・石灰・赤色釉子	灰土灰瓦
17	92	弥生前期土器	高杯	-	SRI	ナデ	ナデ	に高い横	に高い横	赤陶石・灰石・石灰・白色釉子	灰土灰瓦 13号 26.25
	93	弥生前期土器	高杯	-	SRI	ナデ	縦文/ナデ	明黄緑	明黄緑	赤陶石・灰石・白色釉子	灰土灰瓦 13号 23.0
	94	弥生前期土器	高杯	-	SRI	縦文/1デタ・ハケメ	内周部・1デタ・ハケメ	横	横	灰石・黄緑	内周部・赤銅内周 口部1.1
	95	弥生前期土器	高杯	-	SRI	斜文・横目・透かし/ナデ	斜文/ナデ	横	横	赤陶石・灰石・石灰・白色釉子・赤色釉子	13号1.1
	96	弥生前期土器	高杯	-	SRI	ナデ	ナデ	横	横	赤陶石・灰石・石灰・白色釉子・赤色釉子	灰土灰瓦
	97	弥生前期土器	高杯	C12	SRI-B	透かし/ハケメ+ナデ	ナデ	に高い横	に高い横	赤陶石・灰石・石灰	灰土灰瓦
	98	弥生前期土器	高杯	-	SRI	ハケメ+ナデ	1デタ	横	横	赤陶石・灰石・白色釉子	灰土灰瓦
	99	弥生前期土器	高杯	-	SRI	透かし/1デタ	ハケメ	横	横	灰石	灰土灰瓦 準品未4 13号 12.25
	100	弥生前期土器	即台	-	SRI	透かし・クシメ/ハケメ+ナデ	ハケメ+ナデ	横	横	赤陶石・灰石・石灰・白色釉子	灰土灰瓦 13号 28.9 13号 30.25
	101	弥生土器・古式土器部	即台	-	SRI	透かし/ハケメ+ナデ	ハケメ+ナデ	赤	横	赤陶石・灰石・石灰・白色釉子	灰土灰瓦 準品未4
102	弥生土器・古式土器部	即台	-	SRI	ナデ	ナデ	に高い横	に高い横	赤陶石・灰石	灰土灰瓦	
103	弥生中期土器	壺	-	SRI	横目・横目+ナデ	ナデ	縦横・黄	灰白	赤陶石・灰石・白色釉子	麻尾遺物貯蔵庫	

第5表 竪穴住居2出土遺物観察表

図 番	種別	層別	グリッド	遺跡番号	文相・形状		色相		土土	備考
					外周	内周	外周	内周		
33	竪穴住居土部	遺	-	S102	ハナメ・ナメ	ナメ	こみ+黄	こみ+黄	焼石・灰石	灰土炭化物付着 139 (21.6)
	竪穴住居土部	遺	-	S102	ナメ	ハナメ・ナメ	こみ+黄	黄	焼石・灰石・石灰・白色粒子・ 赤色粒子	灰土炭化物付着 139 (22.8)
	竪穴住居土部	遺	-	S102	ナメ	ハナメ・ナメ	黄	黄	焼石・灰石・白色粒子	灰土炭化物付着
	竪穴住居土部	遺	-	S102	ナメ	ナメ	灰黄緑	こみ+黄緑	焼石・灰石・石灰・白色粒子	灰土炭化物
	竪穴住居土部	遺	-	S102	ナメ	ナメ	黄	こみ+黄緑	焼石・灰石・石灰	灰土炭化物付着
	竪穴住居土部	遺+産	-	S102	煎豆/ハナメ	ハナメ	黄	黄	焼石・石灰・白色粒子	灰土炭化物付着
	竪穴住居土部	遺+産	-	S102	ナメ	ハナメ	黄	黄	焼石・灰石・石灰・白色粒子	灰土炭化物付着 (25.6)
	竪穴住居土部	産	-	S102	ハナメ・ナメ	ハナメ	こみ+黄	こみ+黄	焼石・灰石・石灰・白色粒子・ 赤色粒子	灰土炭化物付着 (25.6)
34	竪穴住居土部	産	02	S102-B	ナメ	ナメ	明黄緑	明黄緑	焼石・灰石・白色粒子	灰土炭化物付着 139 (17.2)
	竪穴住居土部	産付	02	S102	遺付・煎豆/ハナメ	ハナメ	こみ+黄緑	こみ+黄緑	焼石・灰石	灰土炭化物付着 139 (26.7)
	竪穴住居土部	産付	-	S102	ハナメ・ナメ	ナメ	こみ+黄緑	こみ+黄緑	焼石・灰石・石灰	
	縄文土部・ 竪穴住居土部	遺跡	-	S102	ナメ	ナメ	こみ+黄緑・黄	こみ+黄緑・黄	焼石・灰石・石灰・白色粒子	
	縄文土部・ 竪穴住居土部	遺跡	-	S102	ナメ	ナメ	こみ+黄	こみ+黄緑	焼石・灰石・石灰・白色粒子	
	縄文土部・ 竪穴住居土部	遺	-	S102	煎豆/ナメ	煎豆黄緑	浅黄緑	浅黄緑	焼石・灰石・石灰	
	縄文土部・ 竪穴住居土部	遺	-	S102	煎豆/ナメ	煎豆	こみ+黄緑	こみ+黄緑	焼石・灰石・白色粒子	
	縄文土部・ 竪穴住居土部	遺跡+産	-	S102	ナメ	ナメ	こみ+黄緑	黄緑	焼石・灰石・石灰・白色粒子	灰土炭化物付着 139 (9.5)
	縄文土部・ 竪穴住居土部	煎	-	S102	煎豆	煎豆	こみ+黄緑	黄	焼石・灰石・石灰・白色粒子	煎豆口環
	縄文土部・ 竪穴住居土部	浅緑	-	S102	煎豆	煎豆	こみ+黄	こみ+黄	焼石・灰石・石灰・白色粒子	
	縄文土部・ 竪穴住居土部	浅緑	-	S102	煎豆	煎豆	浅黄緑	こみ+黄緑	焼石・灰石・石灰・白色粒子	煎豆炭化物付着
	縄文土部・ 竪穴住居土部	浅緑	-	S102	煎豆/煎豆	ナメ・煎豆	こみ+黄緑	こみ+黄緑	焼石・灰石・石灰・白色粒子	
35	縄文土部・ 竪穴住居土部	浅緑	-	S102	煎豆/煎豆	ナメ	こみ+黄緑	こみ+黄緑	焼石・灰石	
	縄文土部・ 竪穴住居土部	浅緑	-	S102	煎豆/煎豆	ナメ	こみ+黄緑	こみ+黄緑	焼石・灰石	
	縄文土部・ 竪穴住居土部	浅緑	-	S102	煎豆/煎豆	ナメ	こみ+黄緑	こみ+黄緑	焼石・灰石・石灰・白色粒子	
	縄文土部・ 竪穴住居土部	浅緑	-	S102	煎豆/ナメ	ナメ	こみ+黄緑	浅黄緑	焼石・灰石・石灰・白色粒子	
	縄文土部・ 竪穴住居土部	浅緑	-	S102	煎豆/ナメ	ナメ	こみ+黄緑	浅黄緑	焼石・灰石・石灰・白色粒子	
	縄文土部・ 竪穴住居土部	産	-	S102	ナメ	煎豆	明黄緑	浅黄	焼石・灰石・石灰	灰土炭化物付着 139 (18.1)

第6表 土坑3出土遺物観察表

図 番	種別	層別	グリッド	遺跡番号	文相・形状		色相		土土	備考
					外周	内周	外周	内周		
36	竪穴住居土部	高坪	E9-E10	S101	煎豆/ナメ	ナメ	こみ+黄緑	こみ+黄緑	焼石・灰石・石灰	

第7表 III層出土遺物観察表①

図	番号	種類	数量	グロット	層位	文様・彫刻				色澤		出土	備考	
						外側		内側		外側	内側			
						外側	内側	外側	内側	外側	内側			
17	1	縄文土器	浅鉢	-	Ⅲ	ナツ	ナツ	なし	なし	なし	なし	赤褐色・黒石・石灰	外側に灰化跡付着	
	2	縄文土器	浅鉢	D9	Ⅲ	彫刻	彫刻	横・二山+横線	二山+横線	なし	なし	赤褐色・黒石・石灰		
	3	弥生早期土器	甕	D89	Ⅲ	無目/ナツ	貝殻縁	なし	なし	なし	なし	赤褐色・黒石・石灰		
	4	弥生早期土器	甕	D81	Ⅲ	無目/ナツ	貝殻縁	なし	なし	なし	なし	赤褐色・黒石・石灰		
	5	弥生早期土器	甕	D89	Ⅲ	無目/ナツ	ナツ	貝殻縁・二山+横線	二山+横線	なし	なし	赤褐色・黒石・石灰		
	6	弥生早期土器	甕	N4	Ⅲ	無目/ナツ	ナツ	彫刻	彫刻	なし	なし	赤褐色・黒石・石灰		
	7	弥生早期土器	甕	CE	Ⅲ	無目/ナツ	ナツ	二山+横線	二山+横線	なし	なし	赤褐色・黒石・白色粒子	外側に灰化跡付着	
	8	弥生早期土器	甕	C11	Ⅲ	無目/ナツ	ナツ	横・二山+横線	貝殻縁	なし	なし	赤褐色・黒石・白色粒子		
	9	弥生早期土器	甕	D81	Ⅲ	無目/彫刻	ナツ	無目/二山+横線	二山+横線	なし	なし	赤褐色・黒石・石灰		
	10	弥生早期土器	甕	D89	Ⅲ	無目/貝殻縁	貝殻縁	二山+横線	二山+横線	なし	なし	赤褐色・黒石・白色粒子		
	11	弥生早期土器	甕	CE	Ⅲ	無目/貝殻縁	彫刻	彫刻	彫刻	なし	なし	赤褐色・黒石・白色粒子	外側に灰化跡付着	
	12	弥生早期土器	甕	D81	Ⅲ	無目/ナツ	ナツ	二山+横線	二山+横線	なし	なし	赤石・石灰		
	13	弥生早期土器	甕	D89	Ⅲ	無目/ナツ	彫刻	二山+横線	二山+横線	なし	なし	赤褐色・黒石・白色粒子		
	14	縄文土器 弥生早期土器	浅鉢・甕	B22	Ⅲ	ナツ	ナツ	なし	なし	なし	なし	赤褐色・黒石・白色粒子	灰化現象 見取(180)	
15	縄文土器 弥生早期土器	浅鉢・甕	D81	Ⅲ	ナツ	ナツ	横	二山+横線	二山+横線	なし	なし	赤褐色・白色粒子	灰化現象 見取(180)	
16	縄文土器 弥生早期土器	鉢	D89	Ⅲ	ナツ・彫刻	貝殻縁・ナツ	二山+横線	二山+横線	二山+横線	なし	なし	赤褐色・黒石・石灰		
17	縄文土器	鉢	B21	Ⅲ	縁部	縁部	浅黄緑	浅黄緑・橙	赤褐色・橙	なし	なし	赤褐色・黒石	底面に口跡	
18	弥生早期土器	浅鉢	C11	Ⅲ	縁部	縁部	赤黄緑	赤黄	赤褐色・黒石	なし	なし	赤褐色・黒石・石灰		
19	弥生早期土器	浅鉢	D81	Ⅲ	縁部	縁部	二山+横線	二山+横線	赤褐色・黒石・石灰	なし	なし	赤褐色・黒石・石灰	外側に灰化跡付着 赤化現象	
20	弥生早期土器	浅鉢	D89	Ⅲ	無目/ナツ	ナツ	浅黄緑	浅黄緑	赤褐色・黒石・石灰・白色粒子	なし	なし	赤褐色・黒石・石灰・白色粒子		
25	21	縄文土器 弥生早期土器	浅鉢	B22	Ⅲ	貝殻縁	貝殻縁	なし	なし	なし	なし	赤褐色・黒石・白色粒子	外側に灰化跡付着	
	22	縄文土器 弥生早期土器	浅鉢	4-G-13	Ⅲ	貝殻縁	貝殻縁	なし	なし	なし	なし	赤褐色	外側に灰化跡付着	
	23	縄文土器 弥生早期土器	浅鉢	D89	Ⅲ	無目/ナツ	ナツ	二山+横線	浅黄緑	赤褐色・黒石・白色粒子	なし	なし	赤褐色・黒石・白色粒子	外側に灰化跡付着
	24	縄文土器 弥生早期土器	浅鉢	C12	Ⅲ	無目/ナツ	ナツ	二山+横線	浅黄緑	赤褐色・黒石・白色粒子	なし	なし	赤褐色・黒石・石灰	
	25	縄文土器 弥生早期土器	浅鉢	C12	Ⅲ	彫刻	(アノボ)	ナツ	横	二山+横線	なし	なし	赤褐色・黒石	
	26	縄文土器 弥生早期土器	甕	CE	Ⅲ	浅黄/彫刻	ナツ・彫刻	なし	なし	赤褐色	なし	なし	赤褐色・黒石・石灰・黒砂	灰化現象 外側に灰化跡付着
	27	縄文土器 弥生早期土器	高坏	C12	Ⅲ	無目/ナツ	ナツ	浅黄緑・浅黄緑	浅黄緑	赤褐色・黒石・赤色粒子	なし	なし	灰化現象・焼結跡	
	28	縄文土器 弥生早期土器	団扇形	Ⅲ	-	-	-	浅黄緑	-	赤褐色・黒石・石灰	なし	なし	赤褐色・黒石・石灰	
	29	縄文土器 弥生早期土器	土鍋	Ⅲ	無目/ナツ	-	-	二山+横線	-	赤褐色・黒石・石灰	なし	なし	赤褐色・黒石・石灰	
	30	30	弥生前期土器	甕	Ⅲ	ハナメ+ナツ	ハナメ+ナツ	横	なし	二山+横	なし	なし	赤褐色・黒石・石灰・白色粒子	灰化現象 口跡(178) 断面最大径(26.4)
31		弥生前期土器	甕	B22	Ⅲ	ハナメ+ナツ	ハナメ+ナツ	横	二山+横線	なし	なし	赤褐色・黒石・白色粒子・赤色粒子	灰化現象 口跡(250) 断面最大径(24.2)	
32		弥生前期土器	甕	C12	Ⅲ	ハナメ+ナツ	ハナメ	二山+横線	浅黄・赤黄	赤褐色・黒石・石灰・白色粒子	なし	なし	灰化現象 外側に灰化跡付着 口跡(250) 断面最大径(23.6)	
31	33	弥生前期土器	甕	C11	Ⅲ	ハナメ+ナツ	ハナメ+ナツ	明黄緑	明黄緑	赤褐色・黒石・白色粒子	なし	なし	灰化現象 外側に灰化跡付着 口跡(224) 断面最大径(29.2)	
	34	弥生前期土器	甕	B11.C11	Ⅲ	ハナメ+ナツ	ハナメ	明黄緑	明黄	赤褐色・白色粒子	なし	なし	灰化現象 口跡(222) 断面最大径(29.2)	
	35	弥生前期土器	甕	B21	Ⅲ	ハナメ+ナツ	ハナメ	横	横	赤褐色・黒石	なし	なし	灰化現象 外側に灰化跡付着 口跡(220) 断面最大径(29.0)	
	36	弥生前期土器	甕	B21	Ⅲ	ハナメ+ナツ	ハナメ+ナツ	明黄緑	二山+横線	赤褐色・黒石・石灰	なし	なし	灰化現象 外側に灰化跡付着 口跡(220)	

第8表 III層出土遺物観察表②

図	番号	種類	数量	フリット	層位	文様・彫刻						土質	備考
						内面		外面		色澤			
						外端	内端	外端	内端	内端	内端		
37	37	磁片(板瓦)	壹	B02	Ⅲ	ナテ		ハナメ・ナテ	ニホい	ニホい	赤褐色・灰赤・白色粒子	瓦葺瓦文 極細文(瓦割片者 1.5%) (1.5%)	
	38	磁片(板瓦)	壹	B02	Ⅲ	ナテ		ハナメ・ナテ	磨	磨	赤褐色・灰赤	瓦割(瓦割片者 1.5%) (1.5%)	
	39	磁片(板瓦)	壹	C12	Ⅲ	ナテ		ハナメ	磨	磨	赤褐色・灰赤・白色粒子	瓦割(瓦割片者 1.5%) (1.5%)	
	40	磁片(板瓦)	壹	D01	Ⅲ	ナテ		ナテ	瓦割	ニホい	赤褐色・灰赤・白色粒子		
	41	磁片(板瓦)	壹	D01	Ⅲ	ナテ		ナテ	ニホい	ニホい	赤褐色・灰赤・白色粒子		
	42	磁片(板瓦)	壹	B01	Ⅲ	ナテ		ナテ	磨	磨	灰赤・灰赤・白色粒子		
	43	磁片(板瓦)	壹	A20 B03	Ⅲ	ナテ		ナテ	ニホい	ニホい	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割瓦文 瓦割 (12.0%)	
	44	磁片(板瓦)	壹	A20	Ⅲ	ナテ		ナテ	ニホい	ニホい	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割瓦文 瓦割 (10.0%)	
	45	磁片(板瓦)	壹	S01	Ⅲ	ナテ		ナテ	明赤釉	明赤釉	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割瓦文 瓦割 (9.0%)	
	46	磁片(板瓦)	壹	02	Ⅲ	ナテ		ナテ	明赤釉	明赤釉	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割瓦文 瓦割(片者 9.0%)	
	47	磁片(板瓦)	壹	H4-13	Ⅲ	ナテ		ナテ	ニホい	ニホい	赤褐色・灰赤・石瓦		
	48	磁片(板瓦)	壹	D01	Ⅲ	ナテ		ナテ	ニホい	ニホい	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割瓦文	
38	49	磁片(板瓦)	高円	D09	Ⅲ	瓦割/ナテ		ナテ	ニホい	瓦割	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割瓦文 瓦割 (9.0%)	
	50	磁片(板瓦)	鉢	C11	Ⅲ	ハナメ		ナテ	磨	磨	赤褐色・灰赤・石瓦・白色粒子	瓦割瓦文 口縁 (12.2%)	
	51	磁片(板瓦)	鉢	02	Ⅲ	ハナメ・ナテ		ナテ	明赤釉	明赤釉	赤褐色・灰赤・石瓦・白色粒子	瓦割瓦文 口縁 (20.0%)	
	52	磁片(板瓦)	鉢	C11	Ⅲ	ナテ		ナテ	ニホい	瓦割	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割(片者 10.0%)	
	53	磁片(板瓦)	鉢	C11	Ⅲ	ナテ		ナテ	ニホい	磨	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割瓦文 口縁 (17.6%)	
	54	磁片(板瓦)	鉢	C12	Ⅲ	ナテ		ナテ	磨	磨	赤褐色・灰赤・白色粒子		
	55	磁片(板瓦)	鉢	B02	Ⅲ	ナテ		ナテ	磨	磨	赤褐色・灰赤・白色粒子・白色粒子		
	56	磁片(板瓦)	鉢	C12	Ⅲ	ナテ		ナテ	磨	ニホい	赤褐色・灰赤・白色粒子		
	57	磁片(板瓦)	鉢	B02	Ⅲ	ナテ		ナテ	磨	磨	赤褐色・灰赤	瓦割瓦文	
	58	磁片(板瓦)	鉢	B02	Ⅲ	ナテ		ナテ	磨	磨	赤褐色・灰赤・白色粒子		
	59	磁片(板瓦)	鉢	C11	Ⅲ	ナテ		ナテ	磨	磨	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割瓦文 口縁 (15.0%)	
	39	60	磁片(板瓦)	鉢	C12	Ⅲ	ハナメ・ナテ		ハナメ・ナテ	磨	磨	赤褐色・灰赤・白色粒子	瓦割瓦文 口縁 (12.0%)
61		磁片(板瓦)	鉢	C22	Ⅲ	ナテ		ナテ	磨	磨	赤褐色・灰赤・石瓦	口縁 (12.0%)	
62		磁片(板瓦)	鉢	B02	Ⅲ	ハナメ		ナテ	磨	磨	赤褐色・灰赤・石瓦・白色粒子	瓦割瓦文 口縁 (15.0%)	
63		磁片(板瓦)	鉢	C12	Ⅲ	磨瓦/ナテ		ハナメ	磨	磨	赤褐色・灰赤		
64		磁片(板瓦)	鉢	C12	Ⅲ	ナテ		ハナメ・ナテ	磨	瓦割	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割瓦文 瓦割 (8.0%)	
65		磁片(板瓦)	鉢	C12	Ⅲ	ナテ		ハナメ	ニホい	ニホい	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割瓦文 (5.0%)	
66		磁片(板瓦)	鉢	B02	Ⅲ	ナテ		ナテ	ニホい	ニホい	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割瓦文 瓦割 (3.0%)	
67		磁片(板瓦)	鉢	B01	Ⅲ	ナテ		ハナメ	瓦割	瓦割	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割瓦文 瓦割 (4.0%)	
68		磁片(板瓦)	高円	C02	Ⅲ	磨瓦/ナテ		ナテ	磨	瓦割	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割瓦文 瓦割(片者 12.0%) (10.0%)	
69		磁片(板瓦)	高円		Ⅲ	磨瓦/ナテ		ナテ	ニホい	ニホい	赤褐色・灰赤・白色粒子・白色粒子		
70		磁片(板瓦)	高円	B02	Ⅲ	ハナメ		ハナメ・1.5%	瓦割	瓦割	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割(片者 1.5%) (1.5%)	
40		71	磁片(板瓦)	高円	C12	Ⅲ	ナテ		ナテ	磨	磨	赤褐色・灰赤・石瓦	
	72	磁片(板瓦)	高円	C11	Ⅲ	ハナメ・ナテ		ハナメ・ナテ	赤釉・ニホい	ニホい	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割瓦文	
	73	磁片(板瓦)	器台	C11	Ⅲ	ハナメ		ナテ	磨	ニホい	赤褐色・灰赤・白色粒子		
	74	磁片(板瓦)	器台	B01	Ⅲ	ハナメ		ハナメ・ナテ	ニホい	ニホい	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割(片者 1.5%) (1.5%)	
	75	磁片(板瓦)	器台	B01	Ⅲ	ナテ		ナテ	ニホい	ニホい	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割(片者 1.5%) (1.5%)	
	76	磁片(板瓦)	器台	B01	Ⅲ	ナテ		ナテ	ニホい	磨	赤褐色・灰赤・石瓦	瓦割(片者 1.5%) (1.5%)	
	77	磁片(板瓦)	器台	C12	Ⅲ	ナテ		ナテ	明赤釉	明赤釉	赤褐色・灰赤・石瓦		
	78	磁片(板瓦)	器台	C11	Ⅲ	磨瓦/ナテ		ハナメ・ナテ	ニホい	ニホい	赤褐色・灰赤・石瓦		
	79	磁片(板瓦)	器台	H4-13	Ⅲ	磨瓦/ナテ		ハナメ	磨	磨	赤褐色・灰赤・石瓦		
	80	磁片(板瓦)	皿・耳	B03	Ⅲ	磨瓦/瓦割/磨瓦		磨瓦/瓦割	瓦割	赤・瓦割	赤褐色・灰赤		
	81	磁片(板瓦)	土製品	-	Ⅲ	ナテ		-	-	-	-		
	82	中核陶器部	筒形	C12	Ⅲ	-		-	灰白	灰白	白色粒子	瓦割瓦文 瓦割 (5.0%)	

第9表 II層ほか出土遺物観察表

図	番号	種類	数量	グロット	層位	文種・形状				備考		
						外周		内周			色澤	
						外周	内周	外周	内周		外周	内周
10	1	縄文土器・ 弥生早期土器	漆灰	E11	Ⅱ	貝殻製成	貝殻製成	灰黒色	灰黒・黄褐色	陶器・黄褐色	内面に黄褐色付着	
	2	弥生早期土器	塗	H5-11	Ⅱ	縄目/十字	十字	灰黒・黄褐色	灰黒・黄褐色・ 灰黒色	陶器・灰白・石灰		
	3	弥生早期土器	塗	-	縄目	縄目/十字	十字	黄	黄褐色	灰白・石灰	内面に黄褐色付着	
	4	弥生早期土器	漆灰	E10	Ⅱ	縄目/十字	十字	灰黒・黄褐色	灰黒・黄褐色	陶器・白・黄褐色		
	5	弥生早期土器	塗	-	縄土	縄目/縄目	十字	灰黒色	黄褐色	陶器・灰白・石灰	内面に黄褐色付着	
	6	弥生早期土器	塗	E9	Ⅱ	縄目/貝殻製成	貝殻製成	明赤褐色	明赤褐色	陶器・灰白・石灰	内面に黄褐色付着	
	7	縄文土器・ 弥生早期土器	灰緑	-	縄土	縄目	縄目	灰黒・黄褐色	黄褐色	陶器・灰白・石灰		
	8	弥生早期土器	漆	E9	Ⅱ	十字	貝殻製成・十字	黄褐色	黄褐色	陶器・灰白・石灰		
	9	縄文土器	漆	E2	Ⅱ	波線・縄目/十字	十字	灰黒・黄褐色	灰黒・黄褐色	陶器・石灰		
	10	縄文土器・ 弥生早期土器	灰緑	-	縄土	貝殻製成・十字	貝殻製成・十字	黄褐色	灰黒・黄褐色	陶器・石灰・白色粒子	内面に黄褐色付着	
	11	縄文土器・ 弥生早期土器	灰緑	E9	Ⅱ	波線	十字	黄褐色	灰黒・黄	灰白・石灰	内面に黄褐色付着	
	12	弥生早期土器	灰緑	M1	Ⅱ	縄目/波線	十字	灰黒・黄褐色	灰黒・黄褐色	陶器・灰白・赤褐色粒子		
	13	弥生早期土器	灰緑	E9	Ⅱ	縄目/十字	十字	灰黒・黄褐色	灰黒色	陶器・灰白・石灰	内面に黄褐色付着	
	14	縄文土器・ 弥生早期土器	灰緑	E7	Ⅱ	波線(アノボ)	十字	灰黒・黄	黄褐色	灰白・石灰		
	15	縄文土器・ 弥生早期土器	灰緑	-	縄土	波線(アノボ)	十字	黄褐色	明赤褐色	陶器・灰白		
16	縄文土器・ 弥生早期土器	灰緑	-	縄土	波線(縄目)	十字	黄	灰黒・黄褐色	陶器・灰白・石灰・白色粒子			
17	弥生早期土器	漆	-	波線	丹塗形/波線	十字	灰黒・黄・ 明赤褐色	灰黒・黄褐色	陶器・灰白・石灰	灰緑黄褐色 付着(12.0)		
18	弥生早期土器	漆	E8	Ⅱ	丹塗形/十字	十字	灰黒・黄褐色・ 黄	灰黒・黄褐色	陶器・灰白・石灰	灰緑黄褐色 付着(12.0)		
19	弥生中期土器	塗	L4	Ⅱ	十字	十字	灰黒・黄褐色・ 黄	灰黒・黄褐色	陶器・灰白・石灰			
20	弥生後期土器	塗	E10	Ⅱ	ハナメ	ハナメ	灰黒・黄・ 黄	灰黒・黄褐色・ 黄	陶器・灰白・石灰	灰緑黄褐色 内面に黄褐色付着 (12.0 12.0)		
21	弥生後期土器	塗	E9	Ⅱ	十字	十字	灰黒・黄褐色	灰黒・黄褐色	陶器・灰白・石灰	灰緑黄褐色 付着(12.0)		
22	弥生後期土器	塗	-	縄土	十字	十字	灰黒・黄	灰黒・黄	陶器・灰白・白色粒子	灰緑黄褐色 付着(12.0)		
23	弥生後期土器	塗	E9	Ⅱ	十字	十字	灰黒・黄	灰黒色	陶器・灰白・石灰	灰緑黄褐色 付着(12.0)		
24	弥生後期土器	漆	-	縄土	十字	十字	灰黒・黄褐色	灰黒・黄褐色	陶器・灰白・石灰	灰緑黄褐色 付着(12.0)		
25	弥生後期土器	漆	-	縄土	十字	ハナメ	黄	灰黒・黄褐色	灰白・石灰	内面に黄褐色付着		
26	弥生後期土器	漆	-	波線	十字	十字	赤褐色	赤褐色	陶器・灰白・石灰			
27	弥生後期土器	漆	F10	Ⅱ	十字	十字	明赤褐色	明赤褐色	陶器・灰白・石灰			
28	弥生後期土器	漆	J6	Ⅱ	十字	十字	黄	黄	陶器・灰白・石灰・赤褐色			
29	弥生後期土器	漆	C11	Ⅱ	十字	十字	灰黒・黄褐色	灰黒・黄褐色	陶器・灰白・石灰			
30	弥生後期土器	漆	C11	Ⅱ	十字	十字	灰黒色	灰黒・黄褐色	陶器・灰白・石灰	灰緑黄褐色 付着(15.0)		
31	弥生後期土器	高粘	-	波線	縄目/十字	十字	黄	黄	陶器・灰白・石灰	灰緑黄褐色 内面に黄褐色付着 (12.0 12.0)		
32	弥生後期土器	高粘	E10	Ⅱ	縄目/十字	十字	灰黒・黄	灰黒・黄	陶器・灰白・石灰			
33	弥生後期土器	高粘	G6	Ⅱ	縄目/十字	十字	灰黒・黄褐色	灰黒・黄褐色	陶器・灰白・石灰			
34	弥生後期土器	高粘	E10	Ⅱ	ハナメ・十字	十字	灰黒・黄	灰黒・黄	陶器・灰白・石灰			
35	弥生後期土器	高粘	E10	Ⅱ	縄目/十字	十字	明赤褐色	黄	灰白・石灰	内面に黄褐色 付着(12.0)		
36	弥生後期土器	高粘	J5	Ⅱ	縄目/十字	十字	黄	黄	灰白・石灰・赤褐色粒子	内面に黄褐色 付着(12.0)		
37	弥生後期土器	高粘	D9	Ⅱ	ハナメ・十字	十字	灰黒・黄褐色	灰黒・黄褐色	陶器・灰白・石灰			
38	弥生後期土器	高粘	L4	Ⅱ	ハナメ	十字	黄	黄	陶器・灰白・石灰			
39	弥生後期土器	高粘	C12	Ⅱ	波線/十字	ハナメ・十字	黄	黄褐色	陶器・灰白・石灰			
40	弥生後期土器	高粘	D13	Ⅱ	波線/十字	ハナメ・十字	黄	黄	陶器・灰白・石灰			
41	弥生土器	漆	F10	Ⅱ	波線	波線	明赤褐色	明赤褐色	陶器・灰白			
42	弥生土器	漆	K6	Ⅱ	波線	波線	黄	黄	灰白			
43	弥生土器	灰緑黄褐色	J9	Ⅱ	十字	波線/十字	灰	灰	赤褐色粒子			
44	弥生陶器部	漆製成	-	縄土	-	-	灰・十字	十字	-			
45	弥生陶器部	漆製成	J9	Ⅱ	-	-	灰・十字	十字	-			
46	弥生陶器部	灰緑黄褐色	D11	Ⅱ	-	波線	灰・十字	灰	白色粒子	灰緑黄褐色		
47	弥生土器	土質	J7	Ⅱ	十字	-	黄	-	-			
48	弥生土器	土質	E9	Ⅱ	十字	-	明赤褐色	-	-			

第10表 石器観察表

図	番号	グリット	遺跡・層位	遺物	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
18	194	-	Ⅱ	砥石・白石	砂岩	14.8	13.2	12.2	366.0	
19	25	-	Ⅱ	砥石	砂岩	13.15	12.8	4.05	127.0	
20	26	-	Ⅱ	砥石	砂岩	10.15	11.1	2.35	51.0	
21	83	19	Ⅱ	石槌	黒曜石	2.8	2.7	1.4	9.9	
22	84	19	Ⅱ	石鏃	黒曜石	1.05	1.05	0.35	4.15	

第IV章 まとめ

今回の発掘調査は、二本樋遺跡が新規発見の遺跡として周知されてから初めて実施されたものであり、今後具体的に遺跡の性格を明らかにしていくうえでの第一歩となるものである。成果としては、弥生時代後期の方形プランの竪穴住居2基、溝1条、土坑群といった遺構の検出、そして、竪穴住居からの土器群の一括出土、Ⅲ層からの弥生時代早期及び弥生時代後期の遺物の出土がある。また、縄文時代後期や弥生時代中期、中世の資料も散見され、二本樋遺跡及びその周辺においては、縄文時代から現在に至るまで断続的に生活が営まれてきたことがわかる。なかでも特に竪穴住居の検出は、南島原市北部地域（深江町・布津町域）において弥生時代を通じて初めてとなるもので、その意義は非常に大きい。円形住居から方形住居への移行時期という観点から弥生時代・古墳時代を考えていくときにも、ひとつの事例として重要になってこよう。

竪穴住居内より出土した土器群は一括性が高く、特に竪穴住居1からのものは住居廃絶に伴い廃棄されたと考えられ、ほぼ単一の時期に使用されたことがうかがわれる。ここでは、2棟の竪穴住居より出土した土器群を中心にしてⅢ層出土のものも含め、二本樋遺跡から出土した弥生時代後期土器の様相について概観しておきたい。

構成される器種としては、甕、鉢、壺、高坏、器台がある。

甕については、脚台付長胴甕（竪穴住居1出土・第8図3、第9図9、竪穴住居2出土・第20図1など）が大半を占める。細身の倒卵形をなす長胴の胴部にわずかに内湾しながら外傾する「く」字形の口縁部が接続する。底部については、明らかに長胴甕の底部になるような平底や丸底の資料は検出されておらず、裾を大きく広げて断面先細りとなる脚台が備わるものと判断される。胴部最大径は胴部のかなり上位に位置するものがほとんどで、そこから口縁部接続部にむかってのすぼまりはさほど強くない。口径が22cm前後、胴部最大径が20cm前後となるものが多くみられ、ある程度の規格性がうかがわれる。甕としては、脚台付長胴甕のほか口縁部と胴部の境界に三角安帯をもつもの（竪穴住居1出土・第8図1）が1点、また大型甕の可能性のある底部（竪穴住居2出土・第20図7）が1点あり、これらの存在にも注意を払っておきたい。

二本樋遺跡における脚台付長甕の様相は、胴部最大径が胴部のほぼ中ほどにきて口径を上回り、底部形態も丸底と脚台のものが共存する肥後地方で出土する長胴甕の状況とは一線を画している。また、脚台をほぼ持つことなく、平底か凸レンズ底で構成される佐賀平野の長胴甕の様相とも異なっている。肥後地方や佐賀平野においては長胴甕に伴ってタケキやケズリによって製作される畿内・庄内系の甕も出土するが、二本樋遺跡においては皆無である。

背の低い甕か鉢となる資料としては、口縁部を外へと屈曲させるもの（竪穴住居1出土・第13図54

～58)、丸い胴部から口縁部を外反させるもの(堅穴住居1出土・第13図59)、ボウル状のもの(堅穴住居1出土・第13図60・61)、口縁部が内傾する金魚鉢状のもの(堅穴住居1出土・第13図62)がみられる。堅穴住居1出土の第13図55～57は、厚手の器壁、断面直線的にのびる口縁部、粗い目の工具によって施されたハケム調整といった点で長胴甕とは全く異なった製作手法がとられており、脚台付長胴甕を製作する集団とは別の集団による製作を想定しておく必要がある。

壺としては、大別して長頸のもの(堅穴住居1出土・第14図63～68)、短頸のもの(堅穴住居1出土・第15図75～81)の二つがみられる。長頸のものは、ラッパ状に外反して大きく開き、口縁部は二重口縁となるものと、単口縁のものがある。短頸のものは、断面直線的な口縁部が直立するかやや外傾する。全体的な形状までわかるのは短頸のものに限られるが、狭小な平底か凸レンズ状の丸みを帯びた底部をもち、胴部は球状である。口縁部から肩部にかけてミガキによる暗文や黒色塗料による彩文を施すものが含まれる。また、なで肩でおそらく長胴となり、断面直線的に外傾する口縁部をもつもの(Ⅲ層出土・第31図62)が1点みられるが、これは肥後系のものであろうか。

高坏は、鈎状の口縁がつくもの(堅穴住居1出土・第17図91・93)、口縁部が外反気味に外へと長くのびるもの(堅穴住居1出土・第17図94)、口縁部が直立し、皿部と口縁部との境界に刻目を施すもの(堅穴住居1出土・第17図95、Ⅲ層出土・第31図68)の三種に大別される。脚部には透かしをもつものもある。壺同様、ミガキによる暗文や黒色塗料による彩文を施すものがみられる。

器台は、いわゆる「肥前型器台」と呼ばれる透かしをもつものが出土している。上下二段の方形透かしをもち、その間の筒部にクシメ文を入れるもの(堅穴住居1出土・第18図100、堅穴住居2出土・第21図10)である。これらの器台は、単体で据え置くことのできない丸底や狭小な平底である壺とのセットで考えるべきであり、実用的用途の上での位置づけを考慮しておく必要がある。その使用実態のひとつとして、二本榎遺跡においては堅穴住居廃絶に際しての祭儀的行為の存在の可能性を指摘しておきたい。

以上、二本榎遺跡における弥生時代後期土器についてみてきた。二本榎遺跡で多数の出土をみた脚台付長胴甕は、島原半島北部の伊古遺跡(雲仙市瑞穂町)、十園遺跡(雲仙市国見町)などでも出土が認められ、島原半島における在地系土器として位置づけられよう。弥生時代後期、有明海を媒介としたヒトの移動や文化的交流の中で、甕形の土器は弥生時代中期から続く脚台の伝統を維持しつつ有明海沿岸地域とも密接に連動して長胴化し、島原半島独自の脚台付長胴甕の成立に至ったものと考えられる。

ただ一方、二本榎遺跡の場合は煮炊き用と考えられる甕のほはすべてを在地系の脚台付長胴甕が占めるのに対し、島原半島北部の伊古遺跡などでは肥後系の甕や庄内系の甕の出土も見られ、島原半島内においても遺跡ごとに様相は異なるようである。こうした在地系甕と搬入系甕の導入と使用実態の差異は、有明海という海によって隔てられた、あるいは繋がった沿岸地域の地理的位置関係のみならず、政治的関係性や生活形態の違いなども反映している可能性があり、そうした視野も研究の展望として持ち合わせておきたい。

以上、二本榎遺跡において主に堅穴住居及びⅢ層から出土した弥生時代後期の土器群についてみてきた。今後周辺地域の様相とも照らし合わせながら詳細に検討していく必要があるが、現時点での二本榎遺跡出土のこれらの土器群の時期的な位置づけについては、弥生時代後期後葉の、やや古い様

相を示すものを一部含みながら、後期終末をその主たる位置にするものとして捉えたい。

【参考文献】

- 宮崎貴夫 1986 「今福遺跡Ⅲ」長崎県文化財調査報告書第84集 長崎県教育委員会
- 古庄浩明 1989 「中九州における古式土師器の成立－白川・緑川水系地域について－」『考古学資料館紀要』第5輯 國學院大學考古学資料館
- 原田範昭 1999 「中九州における弥生時代後期土器の編年－熊本平野部の土器にみる社会背景－」『先史学・考古学 論究Ⅲ』 龍田考古学会
- 古門雅高 2005 「有明海西岸地域における弥生時代後期の土器」『西海考古』第6号 西海考古同人会
- 竹中哲朗・辻田直人 2005 「十園遺跡Ⅱ」国見町文化財調査報告書第5集 国見町教育委員会
- 辻田直人・小野綾夏・大野瑞恵・村子晴奈 2010 「伊古遺跡Ⅲ」雲仙市文化財調査報告書第8集 雲仙市教育委員会
- 辻田直人・村子晴奈 2017 「十園遺跡Ⅲ・伊古遺跡Ⅳ」雲仙市文化財調査報告書第16集 雲仙市教育委員会
- 古門雅高 2018 「長崎県本土部における弥生後期土器研究の現状と課題」『竹松遺跡Ⅲ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第6集 長崎県教育委員会
- 蒲原宏行 2019 「佐賀平野における弥生後期の土器編年」『弥生・古墳時代論叢』六一書房
- 宮崎貴夫 2019 「環有明海とその周辺をめぐる流動と変動」『長崎地域の考古学研究』株式会社昭和堂
- 小川慶晴編 2021 「内野貝塚（第1分冊）」南島原市文化財調査報告書第23集 南島原市教育委員会
- 本多和典 2021 「推現脇遺跡」南島原市文化財調査報告書第28集 南島原市教育委員会

圖 版



航空写真① (南東から)



航空写真②（北から）



航空写真③（俯瞰）



範囲確認調査 TP.1南西壁



範囲確認調査 TP.2南西壁



範囲確認調査 TP.3南西壁



範囲確認調査 TP.4南西壁



範囲確認調査作業状況①



範囲確認調査作業状況②



調査前状況①（北東から）



調査前状況②（南から）



表土剥ぎ状況① (南から)



表土剥ぎ状況② (道床除去・南西から)



表土剥ぎ状況③（南西から）



表土剥ぎ状況④（掘削完了・北東から）



作業状況



Ⅱ層遺物検出状況①（北東から）



Ⅱ層遺物検出状況②（南西から）



Ⅲ層遺物検出状況③（1区・東から）



Ⅲ層遺物検出状況④（2区・東から）



Ⅲ層遺物検出状況⑤（2区・北から）



Ⅲ層遺物検出状況⑥（3区・北から）



Ⅵ層上面遺構検出状況①（北東から）



Ⅵ層上面遺構検出状況②（南西から）



竪穴住居 1 検出状況① (東から)



竪穴住居 1 検出状況② (南から)



溝堆積状況① (南東から)



溝堆積状況② (南東から)



竪穴住居 2 検出状況① (西から)



竪穴住居 2 検出状況② (南東から)



竪穴住居1堆積状況（南から）



竪穴住居2堆積状況（南東から）



溝検出状況①（東から）



溝検出状況②（南から）



土坑群検出状況 (南から)



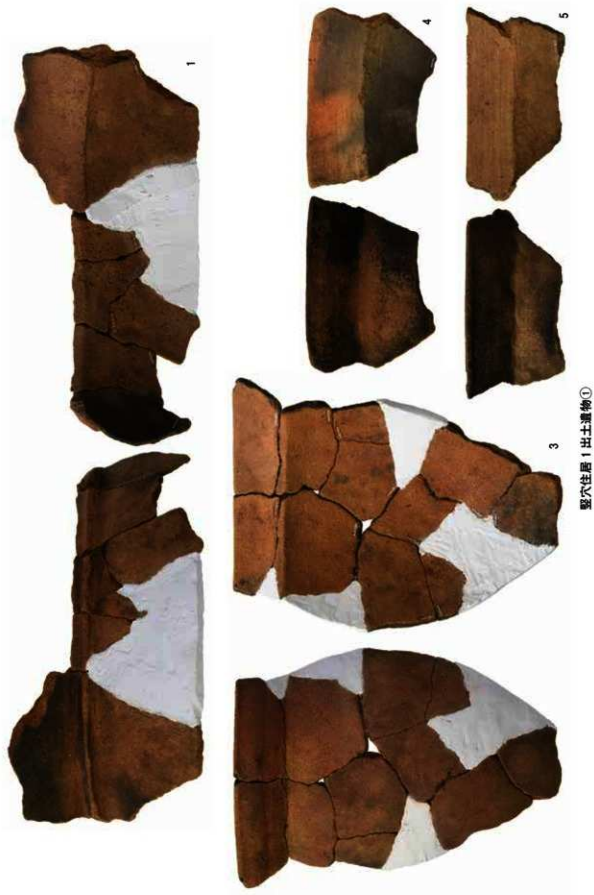
土坑1検出状況 (南から)



土坑2検出状況（東から）



土坑3検出状況（北から）



整穴住居 1 出土遺物①



2



6



7



8

豎穴住居1出土遺物②



整穴住居 1 出土遺物③

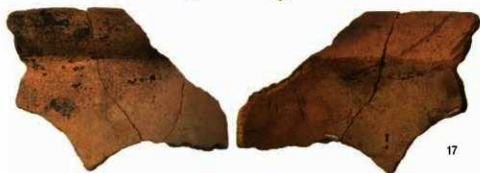


10



12

整穴住居 1 出土遺物④



竖穴住居 1 出土遺物⑤



19



20

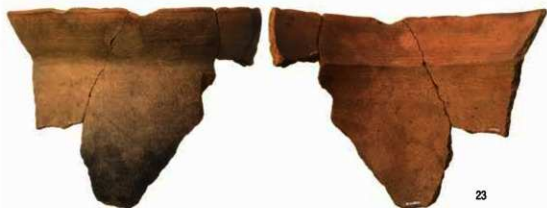


21



22

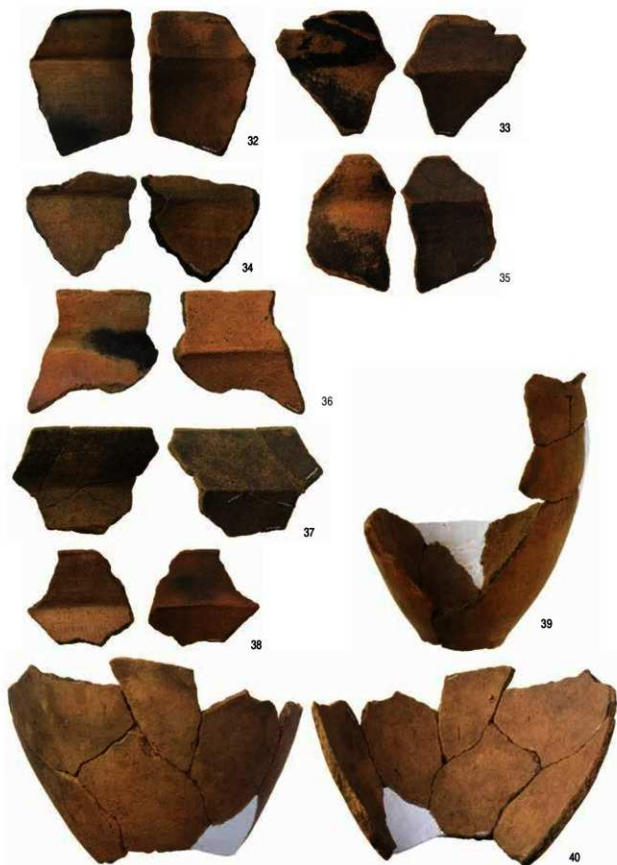
豎穴住居 1 出土遺物⑥



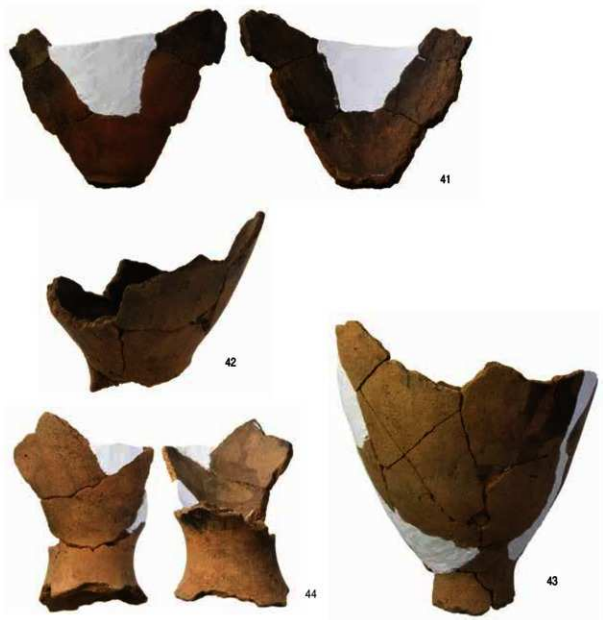
豎穴住居 1 出土遺物⑦



豎穴住居1出土遺物⑧



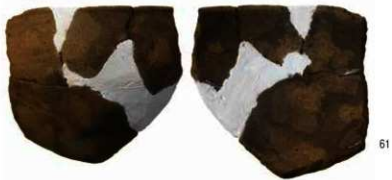
豎穴住居 1 出土遺物⑨



豎穴住居 1 出土遺物⑩



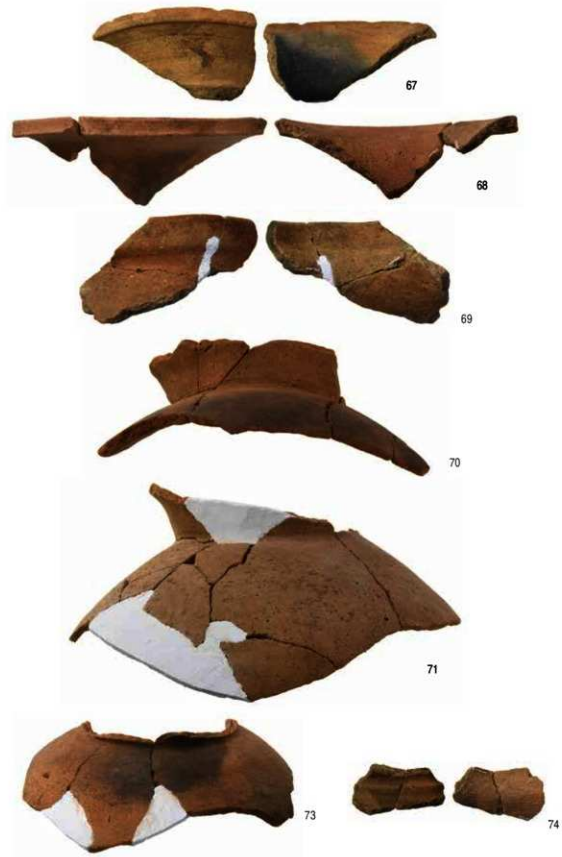
豎穴住居 1 出土遺物①



雙穴住居 1 出土遺物②



豎穴住居 1 出土遺物③



豎穴住居 1 出土遺物⑭



整穴住居 | 出土遺物⑨



雙穴住居 1 出土遺物^⑬



80



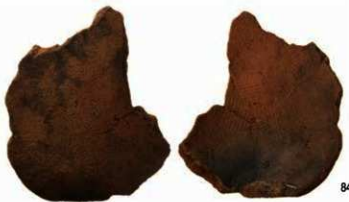
81



82



83



84



86



87



85



89

雙穴住居 1 出土遺物⑦



88



90



92



91



93



94

竖穴住居1出土遺物⑩



竖穴住居 1 出土遺物⑨



雙穴住居 1 出土遺物②



豎穴住居 2 出土遺物①



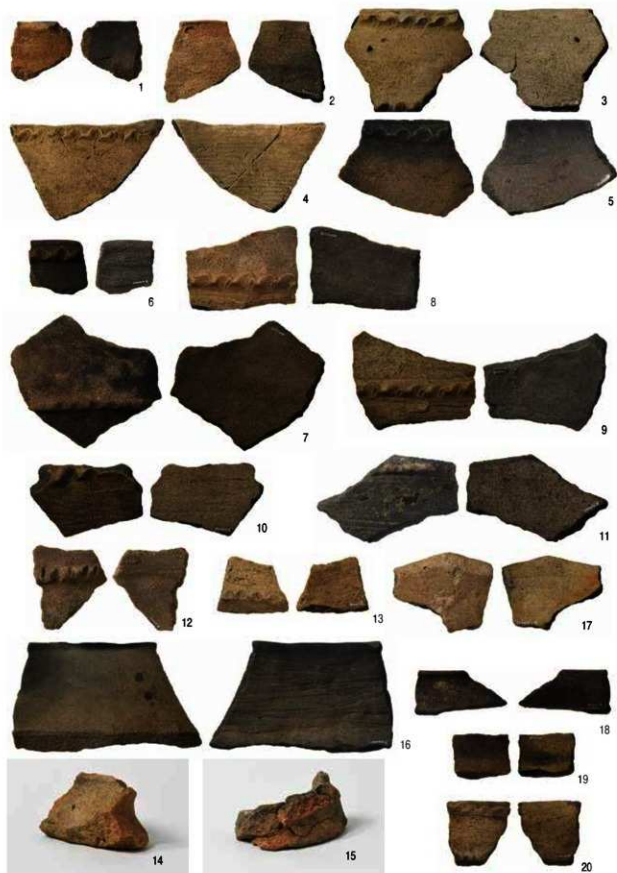
豎穴住居 2 出土遺物②



雙穴住居 2 出土遺物③



豎穴住居 2 出土遺物④



Ⅱ層出土遺物①



Ⅲ層出土遺物②



31

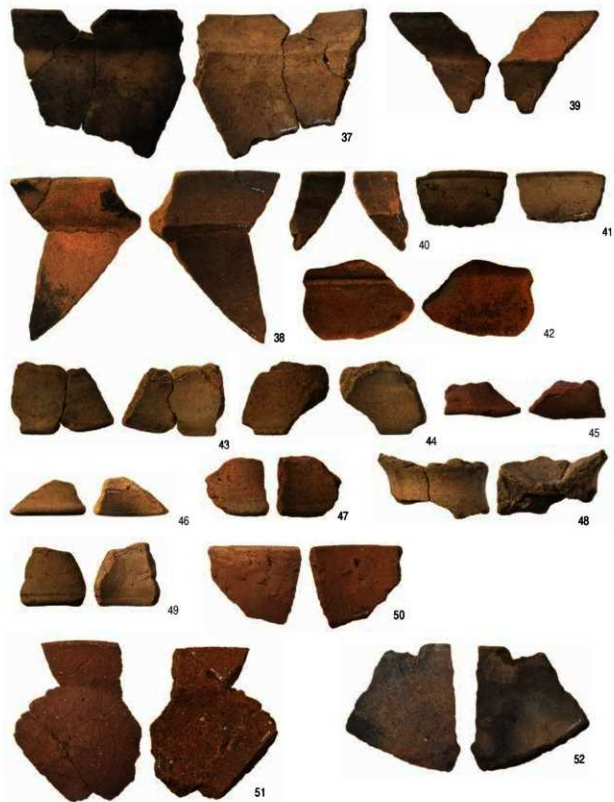


32

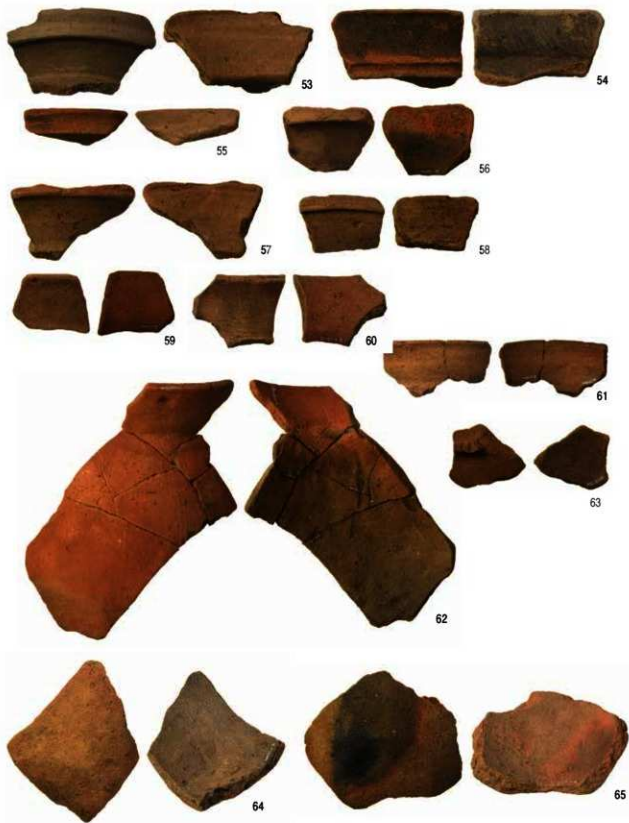
Ⅲ層出土遺物③



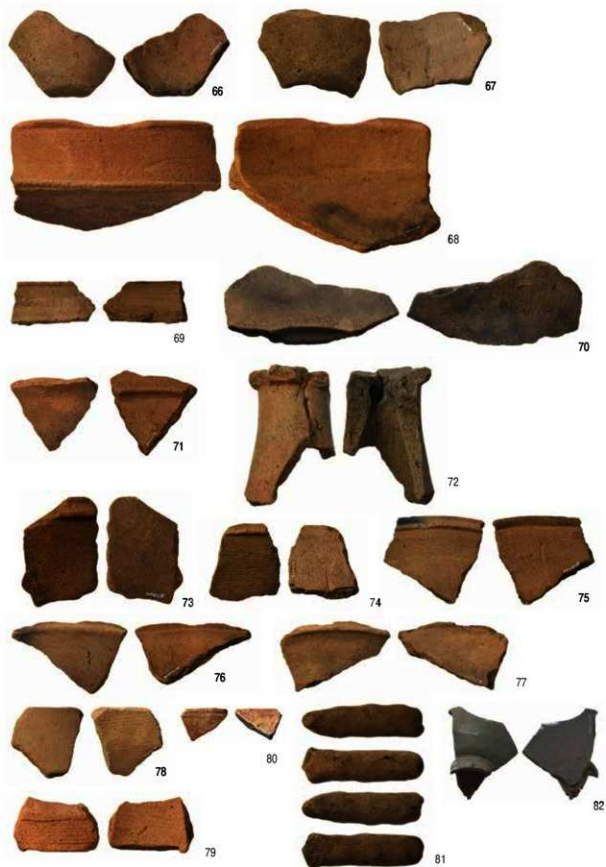
Ⅲ層出土遺物④



Ⅲ層出土遺物⑤



Ⅱ層出土遺物⑥



Ⅲ層出土遺物②



Ⅱ層ほか出土遺物①



Ⅱ層ほか出土遺物②

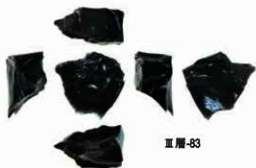


竖穴住居1-104



竖穴住居2-25

竖穴住居2-26



Ⅲ層-83



Ⅲ層-84

出土石器

報告書抄録

ふりがな	にほんはぜいせき							
書名	二本榎遺跡							
副書名	市道南島原自転車道線整備工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第37集							
編著者名	本多 和典							
編集機関	南島原市教育委員会							
所在地	〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地 TEL0957-73-6705							
発行年月日	西暦2024年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇° 〇′	東経 〇° 〇′	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にほんはぜいせき 二本榎遺跡	みなみしまばりし 南島原市 ふかやまちょう 深江町	42214	141	32° 43′ 36″	130° 21′ 22″	20220416 ～ 20220802	452㎡	道路整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
二本榎遺跡	遺物包含地	縄文時代 弥生時代 中世		竪穴住居 溝 土坑		刻目突帯文土器 脚台付長胴甕 暗文甕		

南島原市文化財調査報告書 第37集

二本櫨遺跡

2024. 3. 31

発行 長崎県南島原市教育委員会
〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷 株式会社 昭和堂

南島原市文化財調査報告書 第37集

二本櫓遺跡

— 市道南島原自転車道線整備工事に伴う発掘調査 —

2024

長崎県南島原市教育委員会

南島原市文化財調査報告書
第37集

二本櫓遺跡

— 市道南島原自転車道線整備工事に伴う発掘調査 —

2024

長崎県南島原市教育委員会

南島原市文化財調査報告書 第37集

二本櫛遺跡

— 市道南島原自転車道線整備工事に伴う発掘調査 —

2024

長崎県南島原市教育委員会

発刊にあたって

本書は、長崎県南島原市深江町字二本樋に所在する二本樋遺跡の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査は、南島原市が事業主体となって進めている市道南島原自転車道線整備工事に伴って実施いたしました。整備工事は、平成20年に廃線となった島原鉄道南目線（島原港駅－加津佐駅間）の跡地のうち南島原市内の約32kmを自転車歩行者専用道路として活用する計画となっています。工事が完成した暁には、この道路が南島原市内を縦断するサイクリングロードとして観光面で一役を担うとともに、市民の方々の憩いと健康増進の場として利用されるものと期待しています。

発掘調査では、おもに弥生時代早期の遺物や弥生時代後期の遺構・遺物を検出いたしました。そのなかでも特に注目されるのが、弥生時代後期の竪穴住居の検出と住居内からの土器群の一括出土です。これらは今後、島原半島の弥生時代の様相を明らかにしていくうえで重要な基準的資料として位置づけられることでしょう。

私たちは、発掘調査によって知り得た埋蔵文化財を地域の財産として後世に受け継いでいかなければなりません。学校教育や生涯教育などに広く活用と公開の機会を増やすとともに、学術研究に寄与するものとなるよう力を尽くします。また、地下に眠るまだ実態の明らかでない埋蔵文化財についても、保護と記録についての作業を怠ることなく適切に責任をもって実行していく所存です。

末筆ではございますが、発掘調査を実施するにあたりご理解・ご協力を賜りました地権者の皆様、地元にお住いの皆様、事業部局と工事関係の方々、発掘調査と整理調査に従事いただきました作業員の方々、そのほか関係各位に心より感謝を申し上げ、発刊のあいさついたします。

令和6年3月31日

南島原市教育委員会

教育長 松本 弘明

例 言

- 1 本書は、二本榎遺跡（長崎県南島原市深江町字二本榎所在）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、南島原市建設部建設課が事業主体である市道南島原自転車道線整備工事に伴って実施した。
- 3 現地調査及び整理調査は、南島原市教育委員会が主体となって実施した。調査の体制・担当は、以下のとおりである。

調査主体

南島原市教育委員会	教育長	永田 良二（～令和3年8月）
	同上	松本 弘明（令和3年8月～）
	教育次長	栗田 一政（～令和4年3月）
	同上	五島 裕一（令和4年4月～）
	文化財課長	岡野 博明（～令和4年3月）
	同上	中村 隆敏（令和4年4月～）
	文化財課文化財班長	梶原 知治

調査担当（現地調査・整理調査）

南島原市教育委員会	文化財課文化財班	副参事（学芸員）	本多 和典
-----------	----------	----------	-------

- 4 現地調査における写真撮影は、本多が行った。遺構配置図、土層実測図の作成・製図、航空写真の撮影は、（株）埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。
- 5 整理調査及び本書作成にあたって、草野明、小林賢伸、細波泉、飛永弘恵、中村由美子、横田香織の協力を得た。
- 6 遺物の実測・製図は、（株）イビスク長崎営業所に委託した。土器の拓本は、横田が行った。本書掲載の遺物写真の撮影は、本多が行った。
- 7 本書に関する遺物、図面、写真等は、南島原市深江埋蔵文化財整理室に保管している。
- 8 本書の執筆・編集は、本多による。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
第Ⅱ章	範囲確認調査	3
第Ⅲ章	本調査	8
1	概略	8
2	基本土層	8
3	検出遺構	11
4	包含層ほか出土遺物	32
第Ⅳ章	まとめ	48

挿図目次

第1図	二本櫓遺跡位置図 (S=1/200,000)	1
第2図	範囲確認調査調査坑配置図 (S=1/2,500)	4
第3図	範囲確認調査調査坑土層図 (S=1/40)	5
第4図	範囲確認調査出土遺物 (S=1/3)	6
第5図	土層実測図 (S=1/100)	9
第6図	遺構配置図 (S=1/400)	10
第7図	竪穴住居1実測図 (S=1/60)	11
第8図	竪穴住居1出土遺物① (S=1/3)	12
第9図	竪穴住居1出土遺物② (S=1/3)	13
第10図	竪穴住居1出土遺物③ (S=1/3)	15
第11図	竪穴住居1出土遺物④ (S=1/3)	16
第12図	竪穴住居1出土遺物⑤ (S=1/3)	17
第13図	竪穴住居1出土遺物⑥ (S=1/3)	19
第14図	竪穴住居1出土遺物⑦ (S=1/3)	21
第15図	竪穴住居1出土遺物⑧ (S=1/3)	22
第16図	竪穴住居1出土遺物⑨ (S=1/3)	23
第17図	竪穴住居1出土遺物⑩ (S=1/3)	24
第18図	竪穴住居1出土遺物⑪ (100~103 : S=1/3, 104 : S=1/5)	25
第19図	竪穴住居2実測図 (S=1/60)	26
第20図	竪穴住居2出土遺物① (S=1/3)	28
第21図	竪穴住居2出土遺物② (S=1/3)	29
第22図	竪穴住居2出土遺物③ (S=1/4)	30
第23図	溝実測図 (S=1/40)	31
第24図	土坑1・土坑2実測図 (S=1/40)	31
第25図	土坑3実測図 (S=1/40)	31
第26図	土坑3出土遺物 (S=1/3)	31
第27図	Ⅲ層出土遺物① (S=1/3)	33
第28図	Ⅲ層出土遺物② (S=1/3)	34
第29図	Ⅲ層出土遺物③ (S=1/3)	35
第30図	Ⅲ層出土遺物④ (S=1/3)	36
第31図	Ⅲ層出土遺物⑤ (S=1/3)	37
第32図	Ⅲ層出土遺物⑥ (73~82 : S=1/3, 83~84 : S=2/3)	38
第33図	Ⅱ層ほか出土遺物① (S=1/3)	39
第34図	Ⅱ層ほか出土遺物② (S=1/3)	40

表 目 次

第1表	範囲確認調査出土遺物観察表	7
第2表	竪穴住居1出土遺物観察表①	41
第3表	竪穴住居1出土遺物観察表②	42
第4表	竪穴住居1出土遺物観察表③	43
第5表	竪穴住居2出土遺物観察表	44
第6表	土坑3出土遺物観察表	44
第7表	Ⅲ層出土遺物観察表①	45
第8表	Ⅲ層出土遺物観察表②	46
第9表	Ⅱ層ほか出土遺物観察表	47
第10表	石器観察表	48

図 版 目 次

図版1	航空写真①(南東から)	53
図版2	航空写真②(北から)	54
図版3	航空写真③(俯瞰)	55
図版4	範囲確認調査 TP.1 南西壁, 範囲確認調査 TP.2 南西壁, 範囲確認調査 TP.3 南西壁, 範囲確認調査 TP.4 南西壁, 範囲確認調査作業状況①, 範囲確認調査作業状況②	56
図版5	調査前状況①(北東から), 調査前状況②(南から)	57
図版6	表土剥ぎ状況①(南から), 表土剥ぎ状況②(道床除去・南西から)	58
図版7	表土剥ぎ状況③(南西から), 表土剥ぎ状況④(掘削完了・北東から)	59
図版8	作業状況	60
図版9	Ⅲ層遺物検出状況①(北東から), Ⅲ層遺物検出状況②(南西から)	61
図版10	Ⅲ層遺物検出状況③(1区・東から), Ⅲ層遺物検出状況④(2区・東から)	62
図版11	Ⅲ層遺物検出状況⑤(2区・北から), Ⅲ層遺物検出状況⑥(3区・北から)	63
図版12	Ⅵ層上面遺構検出状況①(北東から), Ⅵ層上面遺構検出状況②(南西から)	64
図版13	竪穴住居1検出状況①(東から), 竪穴住居1検出状況②(南から)	65
図版14	溝堆積状況①(南東から), 溝堆積状況②(南東から)	66
図版15	竪穴住居2検出状況①(西から), 竪穴住居2検出状況②(南東から)	67
図版16	竪穴住居1堆積状況(南から), 竪穴住居2堆積状況(南東から)	68
図版17	溝検出状況①(東から), 溝検出状況②(南から)	69
図版18	土坑群検出状況(南から), 土坑1検出状況(南から)	70
図版19	土坑2検出状況(東から), 土坑3検出状況(北から)	71
図版20	竪穴住居1出土遺物①	72
図版21	竪穴住居1出土遺物②	73

図版22	竪穴住居 1 出土遺物③	74
図版23	竪穴住居 1 出土遺物④	75
図版24	竪穴住居 1 出土遺物⑤	76
図版25	竪穴住居 1 出土遺物⑥	77
図版26	竪穴住居 1 出土遺物⑦	78
図版27	竪穴住居 1 出土遺物⑧	79
図版28	竪穴住居 1 出土遺物⑨	80
図版29	竪穴住居 1 出土遺物⑩	81
図版30	竪穴住居 1 出土遺物⑪	82
図版31	竪穴住居 1 出土遺物⑫	83
図版32	竪穴住居 1 出土遺物⑬	84
図版33	竪穴住居 1 出土遺物⑭	85
図版34	竪穴住居 1 出土遺物⑮	86
図版35	竪穴住居 1 出土遺物⑯	87
図版36	竪穴住居 1 出土遺物⑰	88
図版37	竪穴住居 1 出土遺物⑱	89
図版38	竪穴住居 1 出土遺物⑲	90
図版39	竪穴住居 1 出土遺物⑳	91
図版40	竪穴住居 2 出土遺物①	92
図版41	竪穴住居 2 出土遺物②	93
図版42	竪穴住居 2 出土遺物③	94
図版43	竪穴住居 2 出土遺物④	95
図版44	Ⅲ層出土遺物①	96
図版45	Ⅲ層出土遺物②	97
図版46	Ⅲ層出土遺物③	98
図版47	Ⅲ層出土遺物④	99
図版48	Ⅲ層出土遺物⑤	100
図版49	Ⅲ層出土遺物⑥	101
図版50	Ⅲ層出土遺物⑦	102
図版51	Ⅱ層ほか出土遺物①	103
図版52	Ⅱ層ほか出土遺物②	104
図版53	出土石器	105

第I章 はじめに

二本榎遺跡が所在する長崎県南島原市深江町二本榎は、島原半島の東部に、市域としては南島原市の最北部に位置している。南島原市は、平成18年に「平成の大合併」で旧南高来郡のうち南東部の深江町、布津町、有家町、西有家町、北有馬町、南有馬町、口之津町、加津佐町の8町が合併しているが、そのなかで二本榎遺跡が所在するのは最北部の深江町であり、水無川を境界として島原市と接している。

島原半島には、平成新山（標高1,483m）を主峰に、普賢岳（標高1,359m）、国見岳（標高1,347m）、妙見岳（標高1,333m）などといった雲仙の山々が周囲に裾野を広げている。半島の西側は比較的急峻な斜面で橋湾と接し、また北東から南東にかけてはなだらかな斜面で有明海と接する。有明海を南下すると、口之津と天草下島の間、約4.5kmを測る早崎瀬戸を抜け、東シナ海へと出ることができる。

二本榎遺跡は、普賢岳東斜面からなだらかに展開する火山性扇状地「深江原」の海岸近く、標高約30mの付近に位置する。

つぎに市内の遺跡から歴史的環境を概観したい。旧石器時代の遺跡は多くないが、大崎鼻遺跡（布津町）から三稜尖頭器の出土がある。縄文時代の遺跡では、まず早期の下末宝遺跡（深江町）がある。押型文土器が多数出土しており、またそれに伴う鍬形鍬も特徴的である。前期では古作遺跡（深江町）から葬式土器の出土がある。弥生時代では、突帯文期の遺跡として「山ノ寺式土器」の標識遺跡として知られる山ノ寺掘木遺跡（深江町）、成人土坑墓と小児土器棺墓の墓域が検出された権現脇遺



第1図 二本榎遺跡位置図 (S=1/200,000)

跡（深江町）、国内最大規模の支石墓群として知られる国史跡原山支石墓群（北有馬町）がある。通野遺跡（有家町）では口唇部に近接して刻目突帯をめぐらす土器群が出土しており、市域では数少ない前期の遺跡である。布津木場原遺跡（布津町）では中期前半に位置づけられる甕棺墓4基が検出されている。また、北岡金比羅祀遺跡（南有馬町）では明治期に中期の合口甕棺が発見されており、銅剣1本を副葬していたと伝わる。今福遺跡（北有馬町）は、弥生時代中・後期の遺跡で、堅穴住居、甕棺墓、環濠などが検出されている。古墳時代に入ると、天ヶ瀬古墳（布津町）がある。すでに墳丘は失われているが後期の円墳と考えられ、露出した横穴式石室が現在に残る。古代の遺跡はほとんど知られていない。中期に入るとキリシタン大名有馬氏の居城である国史跡日野江城跡（北有馬町）がある。階段遺構、掘立柱建物群の検出、金箔瓦、法花などの出土がある。近世期に入ると、鳥原・天草一揆の主戦場となった国史跡原城跡（南有馬町）が知られ、多数のキリシタン遺物や犠牲となった一揆軍の人骨などが出土している。2018年には「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産として世界文化遺産に登録されている。

【参考文献】

- 深江町郷土誌編さん委員会 1971 『深江町郷土誌』 深江町
古田正隆 1973 『山の寺掘木遺跡』 百人委員会埋蔵文化財報告書第1集 百人委員会
宮崎貴夫 1984 『今福遺跡Ⅰ』 長崎県文化財調査報告書第68集 長崎県教育委員会
宮崎貴夫 1985 『今福遺跡Ⅱ』 長崎県文化財調査報告書第77集 長崎県教育委員会
宮崎貴夫 1986 『今福遺跡Ⅲ』 長崎県文化財調査報告書第84集 長崎県教育委員会
長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班編 1997 『原始・古代の長崎県 資料編Ⅱ』 長崎県教育委員会
土橋啓介編 2001 『大崎鼻遺跡』 布津町文化財調査報告書第1集 布津町教育委員会
本多和典編 2005 『下末宝遺跡・上呼津遺跡』 深江町文化財調査報告書第1集 深江町教育委員会
本多和典編 2006 『権現脇遺跡』 深江町文化財調査報告書第2集 深江町教育委員会
本多和典 2007 『権現脇遺跡』 南島原市文化財調査報告書第1集 南島原市教育委員会
伊藤健司編 2010 『原城跡Ⅳ』 南島原市文化財調査報告書第4集 南島原市教育委員会
本多和典編 2011 『日野江城跡 総集編Ⅰ』 南島原市文化財調査報告書第6集 南島原市教育委員会
本多和典 2018 『古作遺跡』 南島原市文化財調査報告書第10集 南島原市教育委員会
本多和典 2020 『権現脇遺跡』 南島原市文化財調査報告書第21集 南島原市教育委員会
本多和典 2021 『権現脇遺跡』 南島原市文化財調査報告書第28集 南島原市教育委員会
本多和典 2022 『通野遺跡』 南島原市文化財調査報告書第30集 南島原市教育委員会

第Ⅱ章 範囲確認調査

南島原市建設部建設課自転車道路整備班により市道南島原自転車道線が計画された。計画は市内を有明海沿いに走っていた島原鉄道南目線（平成20年4月1日廃線）の跡地を整備し、自転車歩行者専用道路として活用するもので、その延長は32.1kmである。

この計画を受けて南島原市教育委員会文化財課は、鉄道跡地の現地確認を行い、周知の埋蔵文化財包蔵地とその周辺について、試掘・範囲確認調査を実施し、その結果に応じて本調査を実施することとした。なお、現地踏査の時点で鉄道敷設によって切り通されていて遺跡の残存が望めないような現況の場合は、試掘・範囲確認調査の対象から除外した。試掘・範囲確認調査を実施した遺跡は、二本榎遺跡（深江町）、大崎鼻遺跡（布津町）、町村遺跡（有家町）、北岡金比羅祀遺跡（南有馬町）、永瀬貝塚（加津佐町）の5遺跡である。

二本榎遺跡における範囲確認調査は、令和3年8月19日から令和3年8月23日の期間において、平面2m四方の調査坑を3か所（TP.1～TP.3）、4m×2mの調査坑1か所（TP.4）を設定し、計20mの調査を行った。

調査は、調査坑の設定を行ったのち、重機によって線路の道床である砂利層と表土層を除去し、その後人力によって層位ごとに掘削を行った。掘削途中、必要に応じて遺構・遺物の検出状況や作業状況の写真撮影を行った。また、完掘した段階で、壁面の土層実測図作成と写真撮影を行った。完掘後の埋め戻しには重機を用いた。

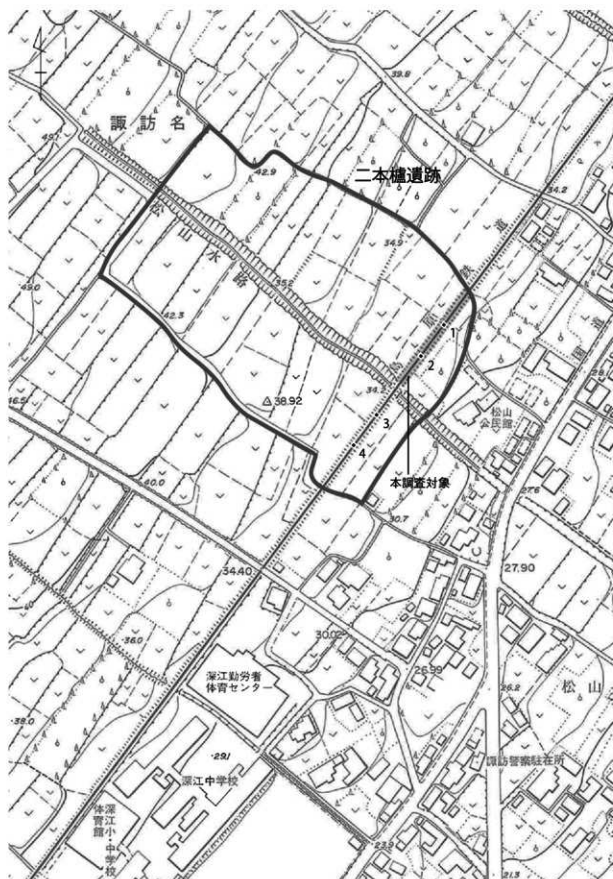
今回の二本榎遺跡における範囲確認調査の基本土層は、深江町域、特に権現脇遺跡において整理されている基本土層に照らし合わせ、おおよその対応関係が確認できた。

深江町域の基本土層は、以下のようになっている。

- I 層 暗褐色土。表土。耕作土。
- II 層 暗褐色土。近世以降の造成土。
- III a 層 黒色土。弥生時代中期～中世の遺物包含層となる場合が多い。
- III b 層 暗褐色土～褐色土。上層（暗褐色土）・下層（褐色土）に細分が可能な場合もある。
縄文時代後期～弥生時代前期の遺物包含層となる場合が多い。
- IV 層 浅黄橙色火山灰。権現脇火砕サージ。
- V a 層 明黄褐色土。縄文時代早期の遺物包含層となる場合が多い。
- V b 層 暗黄褐色土。縄文時代早期の遺物包含層となる場合が多い。
- VI 層 黒色土。
- VII 層 灰白色砂礫。土石流堆積物。

調査の結果、二本榎遺跡における範囲確認調査においては、上記深江町域基本土層のIII a 層、III b 層に相当する二本榎遺跡III層（黒色土）を確認し、また、深江町域基本土層のIV層、V a・V b 層については確認しなかった。

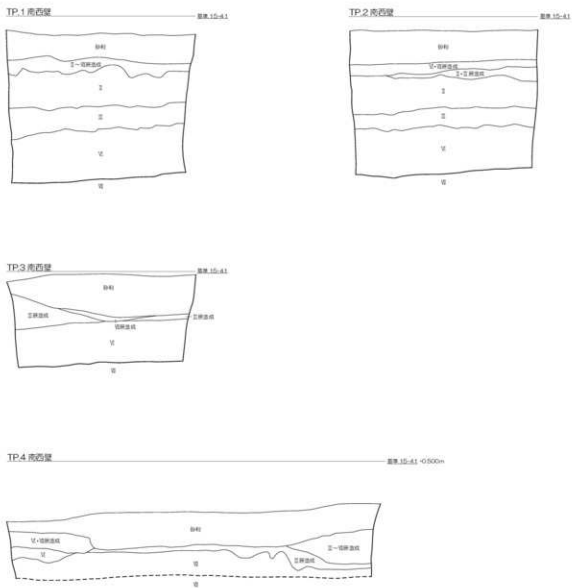
TP.1・TP.2のIII層より良好な遺物の出土がみられた。出土遺物の内容としては、縄文時代後期



第2図 範囲確認調査調査坑配置図 (S=1/2,500)

から中世の時期にかけてのものである。

以上の結果から二本樋遺跡にかかる事業計画地のうち、TP.1・TP.2を含む松山水路より北側部分約450㎡について、着工前に本調査が必要と判断した。



第3図 範囲確認調査調査坑土層図 (S=1/40)

出土遺物

1～9はTP.1出土の遺物、10～13はTP.2出土の遺物である。

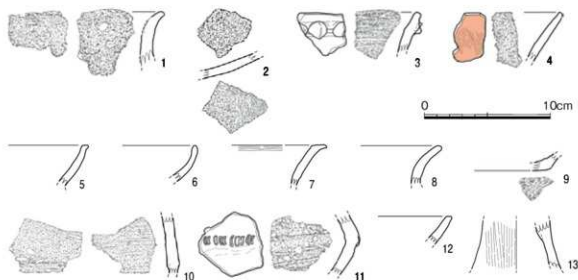
1・2は縄文時代後・晩期の資料である。1は深鉢口縁部で、厚めの器壁は外反し先細りとなる。2は浅鉢で、内外面ともに丁寧に研磨調整を行う。3は突帯文期の粗製浅鉢で、外傾する口縁部に指刻みの突帯がつく。

4～8は弥生時代後期の資料である。4は器種不明であるが、外面にハケメ調整と丹塗りが観察される。5は甕口縁部である。6は小形の鉢である。7は壺か高坏の口縁部で、上面を平坦に整える。8は外反・外傾する壺口縁部である。

9は中世の土師器坏で、底面に糸切り痕が残る。

10は縄文時代晩期から突帯文期の深鉢で、屈曲部が認められる。11は突帯文期の甕で、屈曲部に半截竹管状の工具で刻目を施す。

12・13は弥生時代後期の資料である。12は甕口縁部である。13は高坏脚部である。



第4図 範囲確認調査出土遺物 (S=1/3)

第1表 範囲確認調査出土遺物観察表

目	番号	類別	器種	調査坑	層位	文様・刻線		色澤		胎土	備考
						外周	内周	外周	内周		
	1	縄文土器	深鉢	TF.1	Ⅲ	十字	十字	橙・こみ・橙	橙	灰石・灰石・赤色粒子・白色粒子	
	2	縄文土器	浅鉢	TF.1	Ⅲ	縦線	縦線	こみ・赤褐色	明赤褐色	石灰・白色粒子	内面に灰化跡付着
	3	弥生早期土器	浅鉢	TF.1	Ⅲ	縦線/十字	十字	こみ・赤褐色	灰黄褐色	焼附石・石灰・白色粒子	
	4	弥生前期土器	不明	TF.1	Ⅲ	丹塗り/ハタメ	十字	明赤褐色	こみ・橙	灰石・石灰	内面に灰化跡付着
	5	弥生前期土器	壺	TF.1	Ⅲ	十字	十字	灰黄褐色	明黄褐色	焼附石・灰石・石灰・赤色粒子	内面に灰化跡付着
	6	弥生前期土器	鉢	TF.1	Ⅲ	十字	十字	こみ・赤褐色	橙	焼附石・石灰・白色粒子	
	7	弥生前期土器	甕・高杯	TF.1	Ⅲ	十字	十字	橙	明黄褐色	焼附石・灰石・石灰	内面に灰化跡付着
	8	弥生前期土器	甕	TF.1	Ⅲ	十字	十字	明赤褐色	明赤褐色	石灰・白色粒子	
	9	中世土器部	杯	TF.1	Ⅲ	斜線十字	斜線十字	橙	橙	赤色粒子	
	10	縄文土器・ 弥生早期土器	深鉢	TF.2	Ⅲ	十字	十字	橙	こみ・赤褐色	焼附石・灰石・石灰・赤色粒子	
	11	弥生早期土器	壺	TF.2	Ⅲ	縦線/十字	十字	明赤褐色	暗灰褐色	焼附石・灰石・石灰	内面に灰化跡付着
	12	弥生前期土器	壺	TF.2	Ⅲ	十字	十字	橙	橙	焼附石・灰石・石灰	内周面に灰化物
	13	弥生前期土器	高杯	TF.2	Ⅲ	ハタメ・十字	十字	灰黄褐色	こみ・赤褐色	焼附石・灰石・白色粒子	底面剥離

第三章 本調査

1 概略

本調査は、令和4年4月16日から令和4年8月2日の期間において実施した。まず、重機によって鉄道の道床であった砂利層と近世以降に造成された旧表土層とを二段階に分けて掘削、除去した。表土剥ぎが完了した段階で、調査区全体を網羅するように4m間隔のグリッドを設定し、メッシュ杭を設置した。北から南へアルファベットを、西から東へアラビア数字を割り振り、グリッド名称とした。また、土層観察用のベルトを、調査区を縦断するように北西・南東方向の傾斜に沿って3本設定し（ベルト1～3）、1～4区の調査小区を設けた。4mグリッドを単位として層位ごとに掘削調査を行い、遺物の取り上げについても基本的にはグリッドごとに層位別で一括して行った。遺構内出土の遺物については、遺構ごとに番号を振って取り上げた。

範囲確認調査の結果に基づき、調査はⅢ層を掘削調査の対象とし、Ⅵ層上面において遺構の検出作業を行った。調査区の北西壁沿いについては、調査区横を走る道路の建設時の攪乱がみられ、また近世以降の耕作地造成によってⅢ層が一部削平され、層厚が薄くなっている状況が確認された。

調査完了後は、道路建設工事が控えていたため、埋め戻しは行わず事業担当課に現地の引き渡しを行った。

2 基本土層

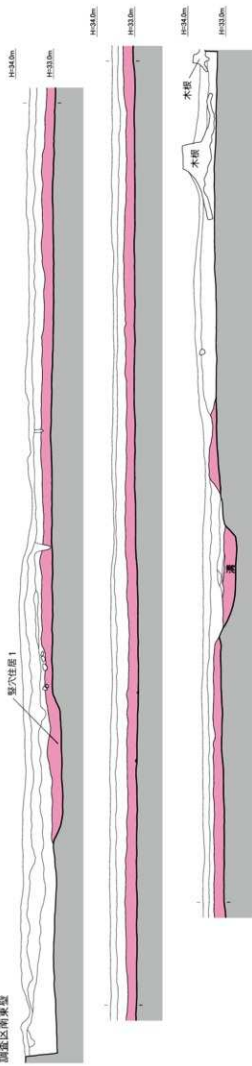
本調査における基本土層は以下のとおりである。

- I 層 灰黄褐（10YR4/2）色土。しまりは強くなく、1cm大以下の礫を含む。
- I' 層 灰黄褐（10YR4/2）色土。しまりは強くなく、3cm大以下の礫を多く含む。
- I* 層 黒褐（10YR3/1）色土。しまりは弱くきめ細かい。1cm大以下の礫を含む。
- Ⅱ 層 黒褐（10YR3/1）色土。しまりはやや強く、3cm大以下の礫を含む。近世以降の造成土。
- Ⅲ 層 黒（10YR3/1）色土。しまりはさほどなく、粘性は弱い。1cm大以下の礫を含む。下位は色調がやや明るくなり、黒褐（10YR3/2）を呈する。また、下位ほど礫の混入が多くなる。縄文時代後期～中世の遺物包含層。
- Ⅵ 層 オリーブ褐（2.5YR4/3）色土。1cm以下の礫を非常に多く含む。下位ほど礫の密度は増し、コブシ大までを含むようになる。
- Ⅶ 層 ぶい黄（2.5Y6/3）。半固結した砂礫。土石流堆積物。

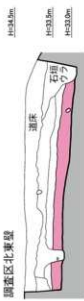
範囲確認調査の成果と同様、雲仙眉山の火山活動に伴う火砕サージである深江町域基本土層Ⅳ層、それから縄文時代早期、主に押型文土器を包含することの多い深江町域基本土層Ⅴ層については、確認されなかった。よって、深江町域基本土層との整合性をとるため、今回の二本権遺跡本調査における基本土層において、Ⅳ層・Ⅴ層については層序名から除外した。

今回の調査で検出した遺構のほぼすべてはⅥ層上面からのものであり、また、出土した遺物の大部分はⅢ層及びⅥ層上面検出の遺構内からのものである。

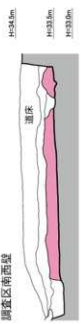
調査区南東壁



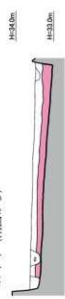
調査区北東壁



調査区南西壁



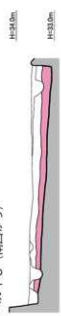
ベルト 1 (南西から)



ベルト 2 (南西から)



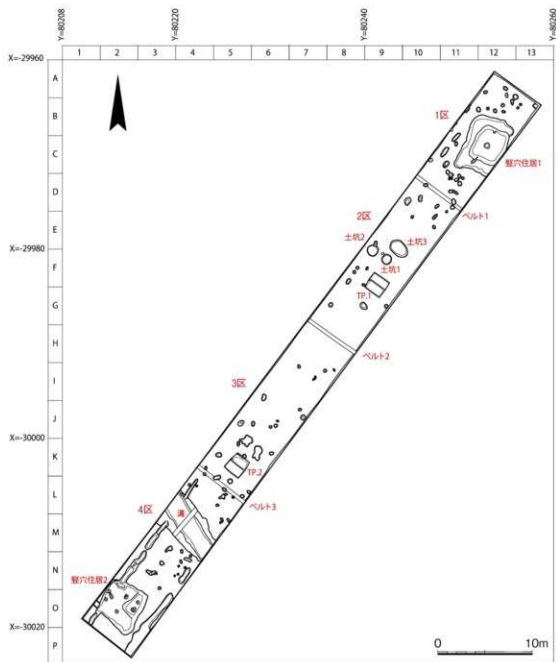
ベルト 3 (南西から)



土層



第 5 図 土層実測図 (S=1/100)



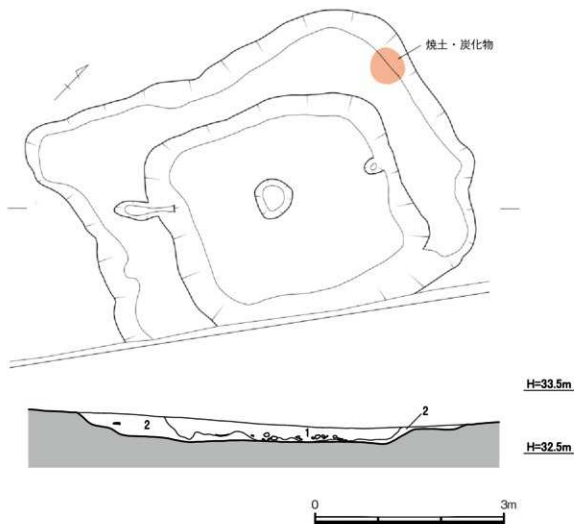
第6図 遺構配置図 (S=1/400)

3 検出遺構

Ⅵ層上面において検出した主な遺構として、竪穴住居2基、溝1条、土坑3基がある。いずれも弥生時代後期に属するものと判断する。

竪穴住居 1 (SI01)

調査区の北東端、グリッドB・C-11・12においての検出である。隅丸方形の平面を呈し、北東・南西方向に5.9～6.2m、北西・南東方向に4.7m以上を測る。検出面からの深さは、最深部で0.45mである。最深部付近は遺構検出面であるⅥ層を掘り抜き、Ⅶ層上面に達している。遺構中央で柱穴1基を確認した。また、遺構内北部において焼土と炭化物の集中的な検出がみられた。当初検出プランが不明瞭であったことから倒木痕として掘削を行っていたが、遺構内から多量の弥生後期土器を検出するに至り、また平面が隅丸方形を呈し、断面形状もすり鉢状ではなく平坦面を形成することから床面と判断し、竪穴住居として認定した。床面は中央部が一段下がり周縁が高くなっているが、海手の南東辺については調査区外に広がるため、判然としない。遺構内から多量に出土した土器群は、住居の廃絶にあたり廃棄したものと判断する。



第7図 竪穴住居1実測図 (S=1/60)

竪穴住居 1 出土遺物

(第 8 図～第 18 図)

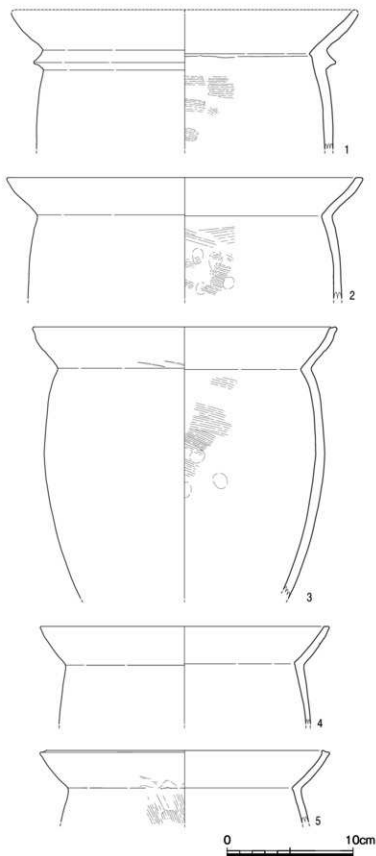
1～103は竪穴住居 1 内出土の遺物である。

1～53は甕の資料である。1は厚手の器壁で口縁部と胴部の境界には断面三角の突帯を巡らす。胴部の比較的上位に最大径をもつものと思われ、そこから口縁部へはわずかに内傾し、口縁部は外傾する。若干内面にハケメ調整を残すが、内外面ともに丁寧にナデ調整を施す。

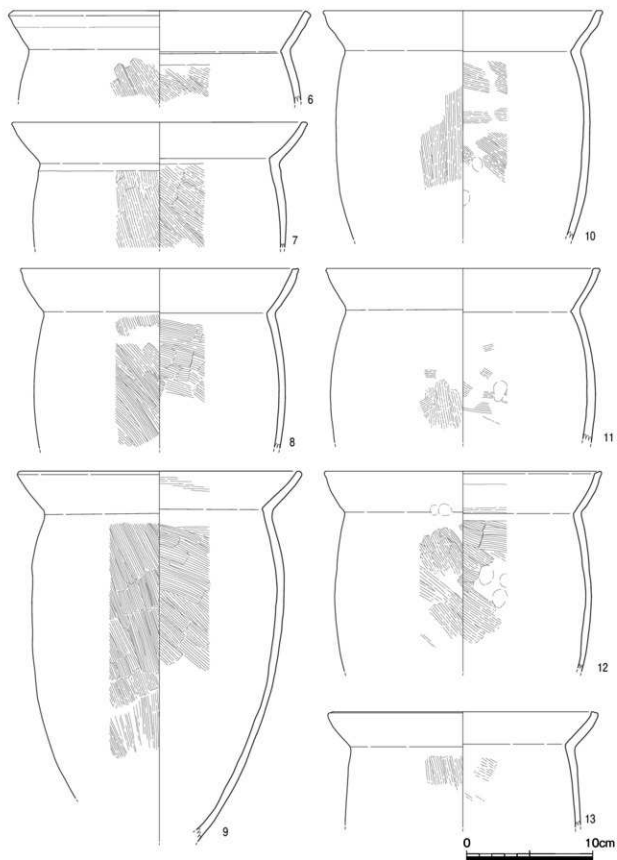
2～53は台付甕の資料である。

2～38は口縁部の残る資料である。いずれも外傾する口縁部でわずかに内湾する。2は胴部にハケメ調整と指頭圧痕を残す。口縁端部は平坦に整える。3は内外面ともにハケメ調整のちナデ調整を行う。口縁部外面の中ほどはわずかに肥厚し、同じく口縁部外面の下部には工具痕が確認できる。口縁端部は平坦に整える。4は口縁部外面に炭化物が付着する。5の胴部外面にはハケメ調整が残り、口縁部外面下部には工具痕が認められる。外面には炭化物が付着する。

6の口縁部はほかに比べると内湾の度合いが弱く、直線的である。端部は平坦である。胴部は内外面ともにハケメ調整のちナデ調整を行う。外面胴部に炭化物が認められる。7は内外面ともにハケメ調整のちナデ調整を行う。口縁部外面にわず



第 8 図 竪穴住居 1 出土遺物① (S=1/3)



第9図 竪穴住居1出土遺物② (S=1/3)

かに炭化物が付着する。8は、外面は比較的目的細かいハケメの調整を行い、内面は比較的目的粗いハケメの調整である。外面には炭化物が付着する。9は底部を欠くが胴部下半から口縁部まで比較的存在が良い。卵形の長い胴部は高い位置で最大径をもち、そこから一旦すぼまって外傾する口縁部に至る。内外面ともにハケメ調整を残すが、胴部下半についてはその後のナデ調整で明瞭ではない。胴部外面に黒斑をもつ。10の口縁部は外面下部を工具により横ナデすることによりその上部が肥厚したようになる。11は口縁端部を平坦に整える。12は口縁端部が平坦で、外面には炭化物が残る。13は口縁端部を上方から平坦にするためなでており、そのため内面側に張り出しを作る。

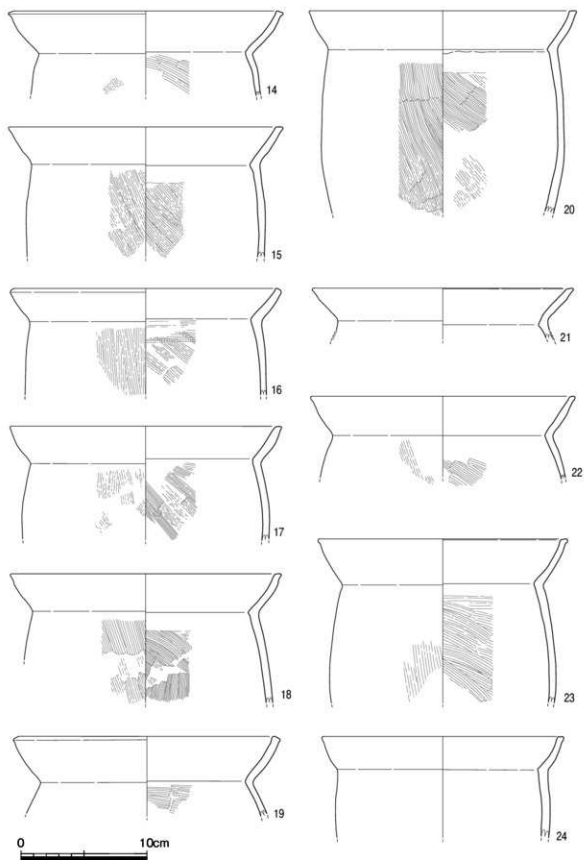
14はやや口縁部幅が広い。口縁端部の平坦整形のため、外面側に張り出しを作る。15は口縁部外面に炭化物が付着する。16の口縁部立ち上がりはやや短めである。17の外面には炭化物が付着する。18の胴部には内外面ともにハケメ調整が残るが、内面は中ほどまでは縦方向、上位は斜方向、外面は縦方向である。19はやや器面の状態が悪い。胴部の張りが強いものと思われる。20は特に胴部外面のハケメ調整を明瞭に残す。外面、口縁部から胴部上半にかけて炭化物の付着が認められる。21は外面の器壁の剥落が著しい。内面胴部には目的粗いハケメ調整が認められる。22は器壁の状態があまりよくない。23の口縁部は端部の整形により外側で段を作る。内外面のハケメ調整は比較的目的粗い工具によるものである。胴部外面には炭化物が付着する。24は胴部の張りが他に比べると弱く、口縁部の立ち上がりが短い。

25はほかに比べると胴上部でのすぼまりが強い。器壁の状態が良くないが、内外面ともに胴部にはハケメ調整が観察される。26は内外面ともにナデ調整が丁寧である。27は胴部の張りが弱く、口縁部は断面先細りとなって端部の平坦整形は認められない。外面胴部には炭化物が付着する。28は橙色系の器壁が特徴的である。口縁端部を平坦に整える。29・30も口縁端部を平坦に整える。30の外面胴部には炭化物が観察される。31は内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。

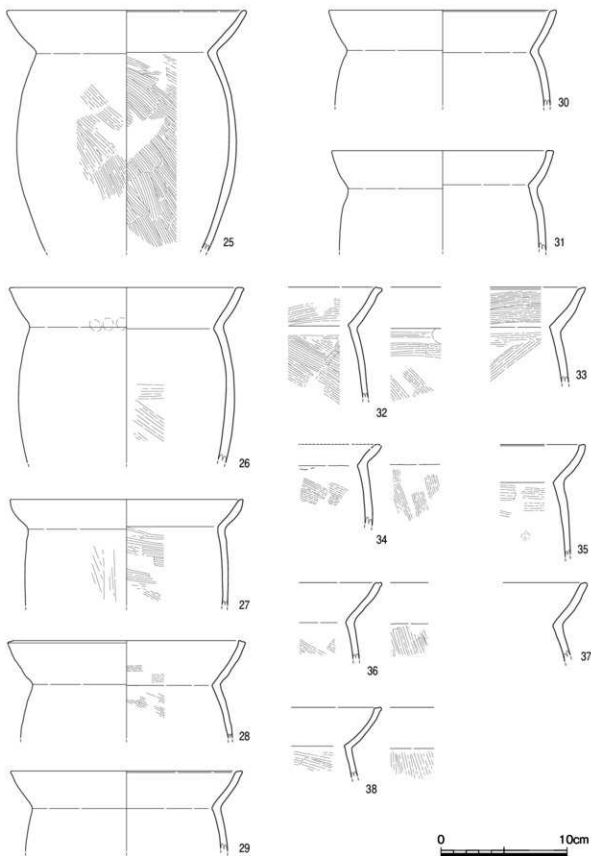
32は口縁端部が外側へと張り出す。33は外面に炭化物が付着する。34は口縁部の立ち上がりが短い。35は内湾の強い口縁部で、外面には炭化物が認められる。36～38は比較的手薄の器壁である。36の外面には炭化物が付着する。37は器面の状態が良くないが、口縁部外面には炭化物の付着が確認できる。

39～44は胴部の資料である。42～44には脚台部も一部残存する。39は底部・口縁部を欠くが、胴部全体の形状が把握できる。内外面ともに丁寧なナデ調整を施しているが、内面下半には幅2cm弱の工具による調整が確認できる。40は胴部下半の資料で、外面は丁寧なナデ調整を施しており、内面にはハケメ調整が残る。41は内外面にハケメ・ナデ調整を行ったのちに工具によりさらになでており、粗いミガキ調整を施したような器面となっている。42は胴部下半で、脚台がついたものと思われる。外面は丁寧なナデ調整で、内面には炭化物が付着する。43は、外面は比較的丁寧にナデ調整を行うが、内面はハケメ調整が残る。内面の底面近くには炭化物の残存が認められる。44は脚台部から胴部下半の資料で、外面のナデ調整は丁寧である。内面のハケメ調整は比較的目的細かい工具が用いられる。外面、脚部と胴部の境界付近に炭化物が認められる。

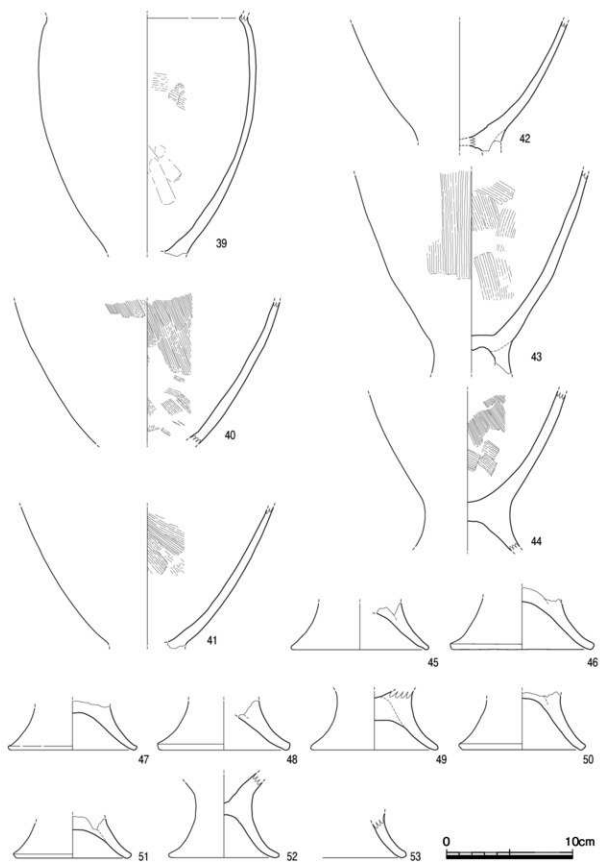
45～53は多くが上述してきたような甕の底部になるものと思われる脚台部の資料である。いずれも断面先細りとなって外反し、裾を広げるものである。破断面の観察から多くが胴部と脚台部との接合後に内面に粘土を充填していることが観察される。



第10図 竪穴住居1出土遺物③ (S=1/3)



第11図 竪穴住居1出土遺物④ (S=1/3)



第12図 竪穴住居1 出土遺物⑤ (S=1/3)

54~57は比較的背の低い堯もしくは鉢となるものである。54は胴部がわずかに外傾しながら立ち上がり、内湾・外傾する口縁部がつく。胴部最大径は口縁部との境界で、胴部上位でのすばまりはみられない。内面にはハケメ調整を明瞭に残すが、外面は丁寧になでている。外面には炭化物が付着する。55の胴部は中ほどでの膨らみが強くそこから上半はほぼ直立しており、口縁部は断面先細りとなって外傾する。内外面ともに目の粗いハケメ調整が施されている。56は半球状の胴部に外傾する口縁部がつく。内外面ともに目の粗いハケメ調整が施される。外面には黒斑が認められる。57の胴部は張りの弱い逆三角形をなし、口縁部は外傾する。底部には脚台がつくであろうか。内面の口縁部と胴部の境界となる稜はやや甘く不明瞭である。内外面ともに目の粗いハケメ調整を行う。58は脚台付の鉢である。大きく外反する脚台部に腰の張った胴部をもち、口縁部は断面直線的に外傾する。口縁端部は丸く整形する。

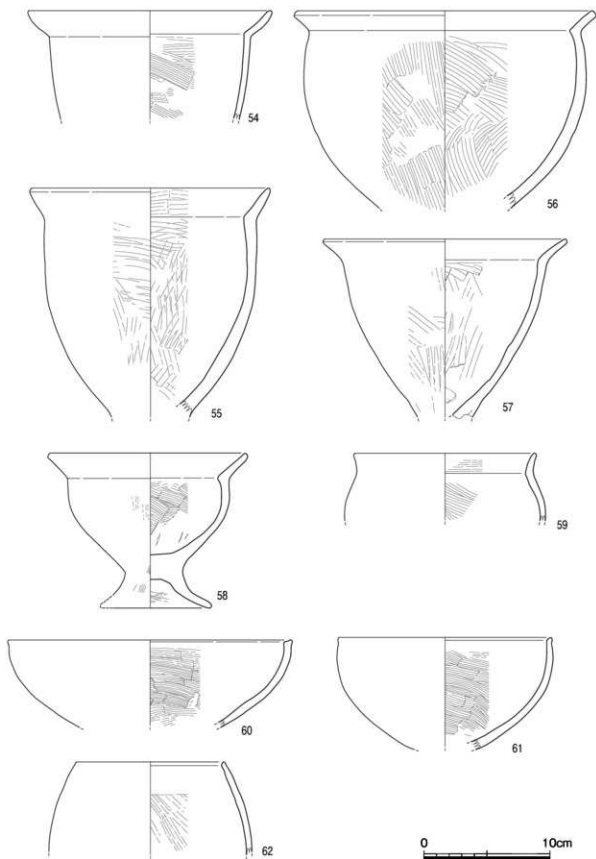
59は丸い胴部に短い口縁部がやや外傾してつく。内面に認められるハケメ調整は目が粗い。60は丸みを帯びた胴部の鉢で、内面にはハケメ調整が残る。口縁端部はナデ調整により外側にわずかな張り出しをもつ。61も丸い胴部の鉢で、底部は丸底か。内面にはハケメ調整を残すが、外面は丁寧にナデ調整を施す。62は丸みを帯びた胴部から口縁部はそのまま緩やかに内湾する。内外面ともにナデ調整で仕上げる。

63~90は壺の資料である。63は丸い肩部に大きく外反する長い頸部がつき、口縁部はそこから短く立ち上がる。肩部と頸部との境界では内面で段を作る。肩部には基部の付け根から放射状に延びる暗文を施す。64は63と比べると小ぶりであるが同様の器形で、口縁部の立ち上がりは短い。焼成不良で器面の状態が悪い。65は大きく外反する頸部に短い口縁部が立ち上がるが、下方へも張り出しをもつ。66の頸部はやはり外反するが短めで、外面の肩部と頸部との境界は緩やかにカーブして移行し、不明瞭である。口縁部はやや外傾して立ち上がる。また内面、肩部と頸部の境界で段を作る。67は大きく外反する頸部で、口縁部は上下にそれぞれつまみ出して若干張り出す程度である。68は頸部が大きく外反して開き肥厚させてそのまま口縁部となる。69は内傾する頸部が上方で外反し、直立する口縁部に至る。内外面ともに頸部と口縁部との境界は不明瞭である。口縁端部は丸く整える。

70は丸い肩部から頸部が外傾して立ち上がる。肩部内面にはハケメ調整が認められる。また肩部外面には黒色の彩文がやや乱雑に施される。71・72は同一個体の可能性が高い。同一個体であればやや縦に長い胴部から丸みを帯びた肩部に至り、外反して大きく開く頸部がつく。胴部には四角突帯が貼り付けられ、刻目が施される。また肩部外面にはナデ調整のちに粗くミガキ調整を施しており、あるいは暗文的効果を狙ったものであることも考えられる。73は肩部の資料で、内面、頸部との境界で段を作る。74は肩部と頸部の境界の資料で、三角突帯を巡らせる。

75は丸みを帯びた平底から胴部の上位で最大径を作り、若干丸みを帯びた肩部へと至り、口縁部は少し外傾して直線的に立ち上がる。内面にはハケメ調整を残し、また底面付近には指頭圧痕が顕著に認められる。外面は全体に丁寧なナデ調整を行い、肩部にはミガキによって暗文を施す。76は丸みを帯びた胴部・肩部からやや外傾する口縁部が直線的に延びる。器面の状態があまりよくないが、口縁部外面には黒色の彩文が認められる。

77は丸い体部に短い口縁部が若干外傾して立ち上がる。口縁端部はつまみ出しによりわずかに外側に張り出し、口縁部から肩部にかけてミガキによる暗文が巡る。胴部下半には焼成後に外面から穿た



第13図 竪穴住居1出土遺物⑥ (S=1/3)

れた穿孔がみられる。78は狭小な若干丸みを帯びた底部をもち、丸い体部に短い直立する口縁部がつく。外面での肩部から口縁部への移行は不明瞭である。肩部には黒色の彩文が乱雑に施される。79は狭小な平底から丸い胴部に至り、口縁部は短く直線的にやや外傾して立ちあがる。内外面ともにハケメ調整を施すが、外面はそののちナデ調整を行って肩部にはミガキによる暗文を入れる。80は肩部と口縁部の境界に三角突帯を巡らしており、やや長い口縁部は直線的に外傾する。口縁部と肩部にはミガキの暗文が入る。内面、頸部と口縁部との境界には段を作る。81はやや外傾する口縁部で、外面にはミガキによる暗文が施されている。82は外傾する口縁部で、端部はナデ調整により外側に段を作る。83は肩部の資料で、内面には明瞭にハケメ調整を残し、外面はハケメ調整・ナデ調整ののちにミガキによる暗文を施す。

84~90は壺底部の資料である。84~89はいずれも狭小で丸底気味の底部である。84・85は内面にハケメ調整を残し、外面は丁寧にナデ調整を行う。86の内面は丁寧にナデ調整を施しており、外面には目の細かいハケメ調整を施したのちにナデ調整を行っている。87は外面、底面付近に黒斑をもつ。外面は丁寧にナデ調整で、内面はハケメ調整で、特に底面付近には工具小口の痕跡が明瞭に残る。88の外面はハケメ調整ののちに丁寧にナデ調整を行う。89は、外面は丁寧にナデ調整を行い、内面はハケメ調整をそのまま残す。90は小型の壺の底部と思われる。内外面ともにハケメ調整が観察される。

91~99は高坏の資料である。

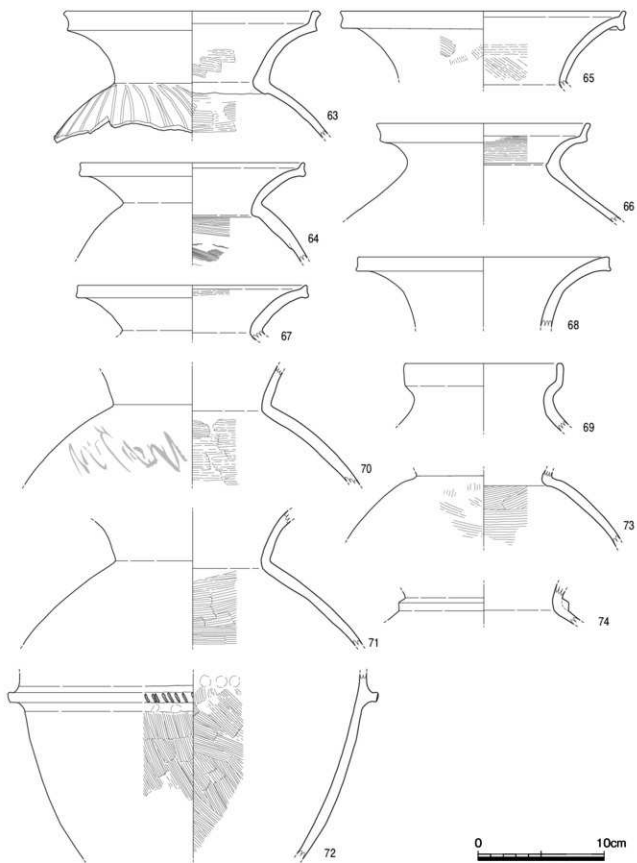
91は鐏状の口縁部がほぼ水平で延びるものと思われる。浅い皿部の外面はケズリ調整、内面はハケメ調整である。脚部は外面に縦方向のハケメ調整が施されている。92は皿部から屈曲して口縁部が大きく広がってつく。口縁部の断面は先細りである。内外面ともに丁寧にナデ調整が施されている。93は深めの皿部から屈曲して口縁部がつく。口縁部内面にはミガキによる暗文が入る。

94は浅い皿部から内外に段を作って口縁部が若干外反しながら大きく開いてつく。内面は全体にミガキをかけ、外面はハケメ調整・ナデ調整ののち線状のミガキを施し暗文としている。内面全体と、明瞭ではないが外面の口縁部には丹塗りを施している。砂粒を含まない精緻な胎土である。95は浅めの皿部にやや外傾する口縁部が立ち上がる。皿部と口縁部との境界には刻目突帯が巡り、口縁端部は外側へつまみ出して平坦部を作る。内外面ともにナデ調整を行い、口縁部には黒色の細線を連続して引き彩文となす。脚部には円周を三分割して透かしが入る。透かしは上部が半円形のもの1箇所、方形のもの2箇所である。

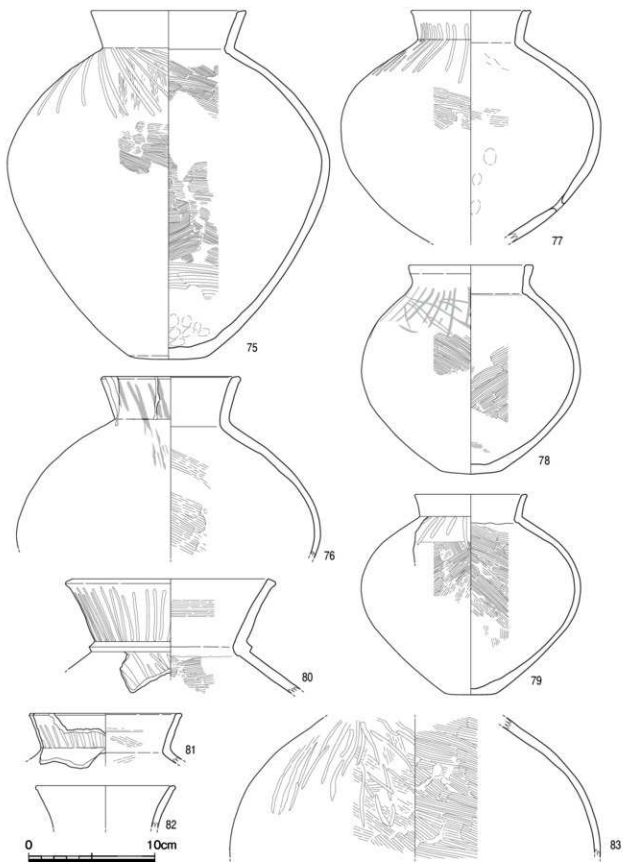
96は皿部の資料で外面にはケズリ調整が施される。97は脚部で、円周を四分分割する透かしが対角関係同士で高さをそろえて段違いとなる。透かし上部の形態はいずれも半円形である。98は脚部外面と皿部内面に丁寧にミガキ調整を行っている。99は比較的小型の高坏脚部である。砂粒を含まない精緻な胎土で外面にはミガキが施される。小さい円形の透かしをもつ。

100~102は器台の資料である。100は、上下の裾部は外反して大きく広がり、その端部はつまみ出しによって上下に張り出しをもつ。くびれ部には水平方向にクシメ文を施し、その上下に方形の透かしを、円周を四分分割して切り出す。101は裾部が大きく外反し、円周を三分分割する方形の透かしをもつ。102は強く外反して開く裾部である。

103は刻目突帯文をもつ弥生時代早期の甕である。さほど屈曲は強くなく、断面三角の突帯には指による刻目が施される。外面は擦過調整、内面はナデ調整である。

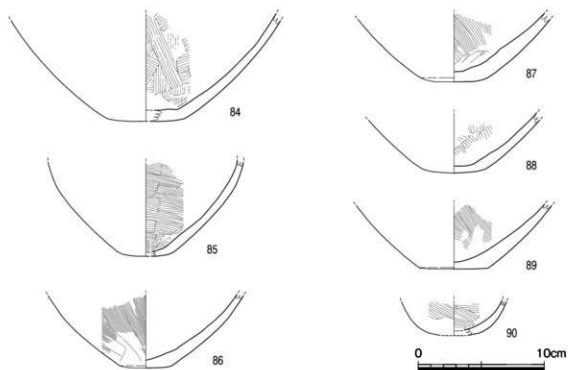


第14図 竪穴住居1出土遺物⑦ (S=1/3)

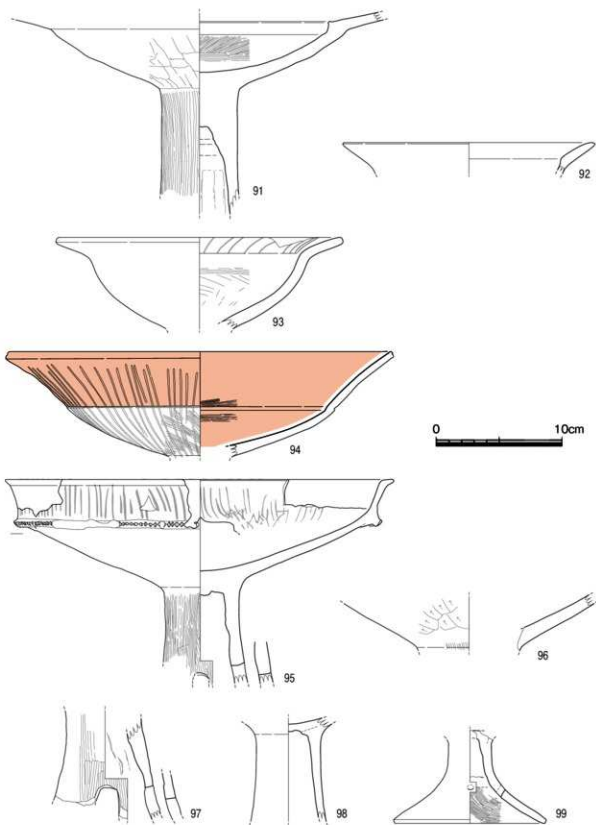


第15図 竪穴住居1出土遺物⑧ (S=1/3)

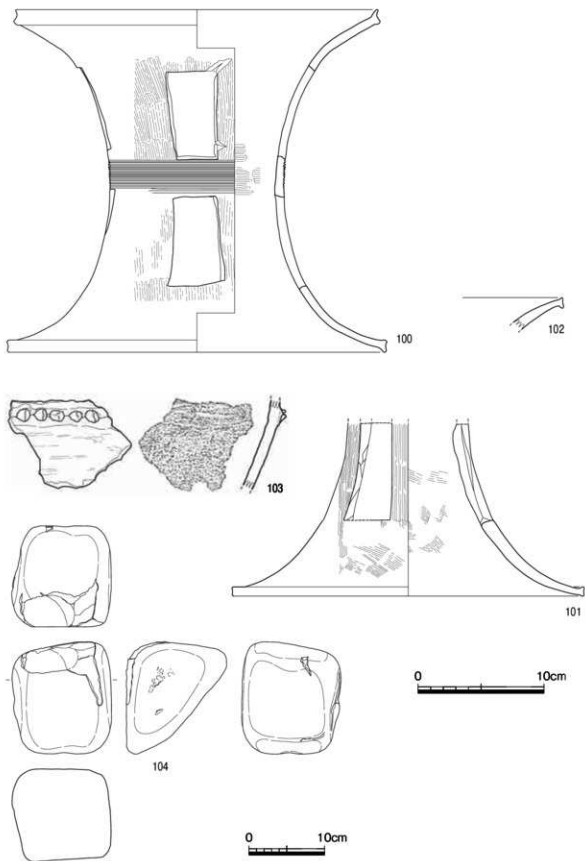
104は水磨を受けた砂岩の亜角礫を素材としており、平坦面を砥石や台石として使用している。



第16図 竪穴住居1出土遺物⑨ (S=1/3)



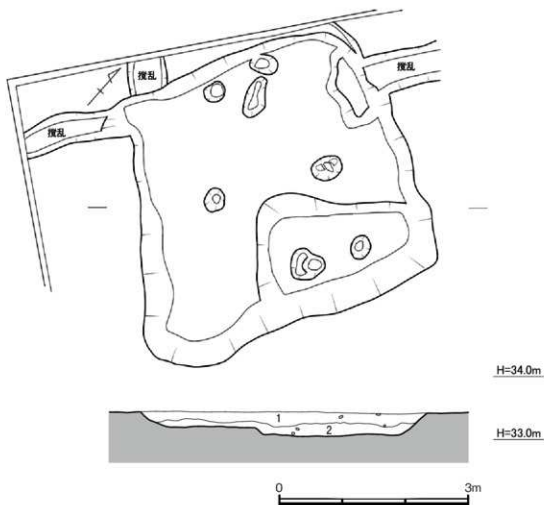
第17図 竪穴住居1出土遺物⑩ (S=1/3)



第18図 竪穴住居1出土遺物① (100~103 : S=1/3, 104 : S=1/5)

竪穴住居 2 (SI02)

調査区の南西端、グリッド N・O・2・3 における検出である。隅丸方形の平面を呈し、北東・南西方向に 4.0～4.8m、北西・南東方向に 4.3～4.5m を測る。遺構内で北東・南西方向に並ぶ 2 基の柱穴を検出しており、これらが住居の主柱となるものと思われる。検出面から床面までの深さは、0.4m を測る。床面はⅥ層を掘り抜き、Ⅶ層に達しているが、遺構内出土遺物をみると突帯文期の資料が多くみられるため、本来は遺構内堆積、2 層の上面あたりが床面であったことも考えられる。



第19図 竪穴住居 2 実測図 (S=1/60)

竪穴住居 2 出土遺物 (第20図～第22図)

1～24は竪穴住居 2 内出土の遺物である。

1～5は長胴甕の資料である。1は、縦に長い胴部は比較的上位で最大径をもち、そこから一旦すぼまって外傾・内湾する口縁部に至る。内外面ともにナデ調整を施すが、外面胴部中ほどにはハケメ調整が残る。外面の胴部上位から口縁部にかけて炭化物が付着する。2はほかの長胴甕に比べると胴部の最大径が低い位置にくる。底部は脚台付きである。器面の状態が良くないが、内面にはハケメ調整が観察される。外面には上半に炭化物の付着が認められる。3は胴部から口縁部へのすぼまりは弱い。外面には炭化物が付着する。4は脚台部から胴部下位の資料である。5は底部付近の資料で、内面には炭化物が残存する。6は比較的大型の甕もしくは壺の胴部である。突帯を巡らし刻目を施す。7は大型の甕もしくは壺の底部である。若干の丸みをもつ。

8・9は壺である。8はわずかに丸みをもつ平底で球形の胴部に外反して大きく開く頸部がつき、さらに口縁部が短く直立する。内面には明瞭にハケメ調整を残し、外面は全体にナデ調整を行うが体部上半についてはハケメ調整が残る。9は外反して大きく開く口縁部・頸部の資料で、口縁端部は上下に張り出しをもつ。

10・11は器台である。10は上下の裾部が外反して大きく開く。裾部端部はつまみだしにより張り出す。くびれ部にクシメ文を横方向に走らせ、その上下に円周を三分割して方形の透かしを切り出す。11は大きく外反する裾部である。

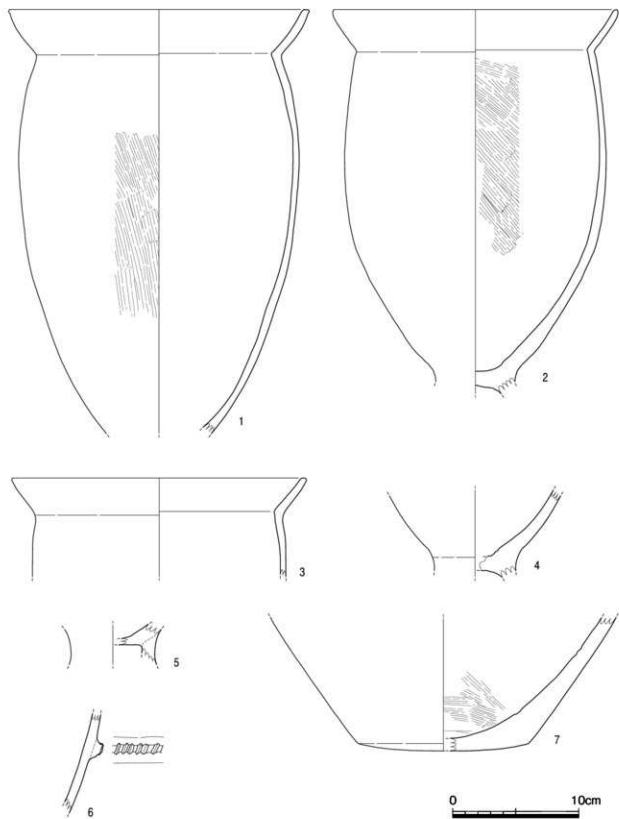
12～24は縄文時代後期から突帯文期の資料である。

12は強く外傾する深鉢の口縁部である。内外面ともにナデ調整である。13はやや内傾する深鉢口縁部である。口縁端部は上方からのナデ整形により外側へ張り出しを作る。14・15は刻目突帯文をもつ甕である。14は胴部突帯部分で強い屈曲をもち、口縁部は内傾し、端部は若干外反する。刻目は指によるものである。15は胴部突帯の資料で、屈曲はさほど強くない。刻目は棒状の工具の側面を押しあてたものと思われる。16は晩期深鉢もしくは突帯文期甕の底部である。断面、強い張り出しをもつ。

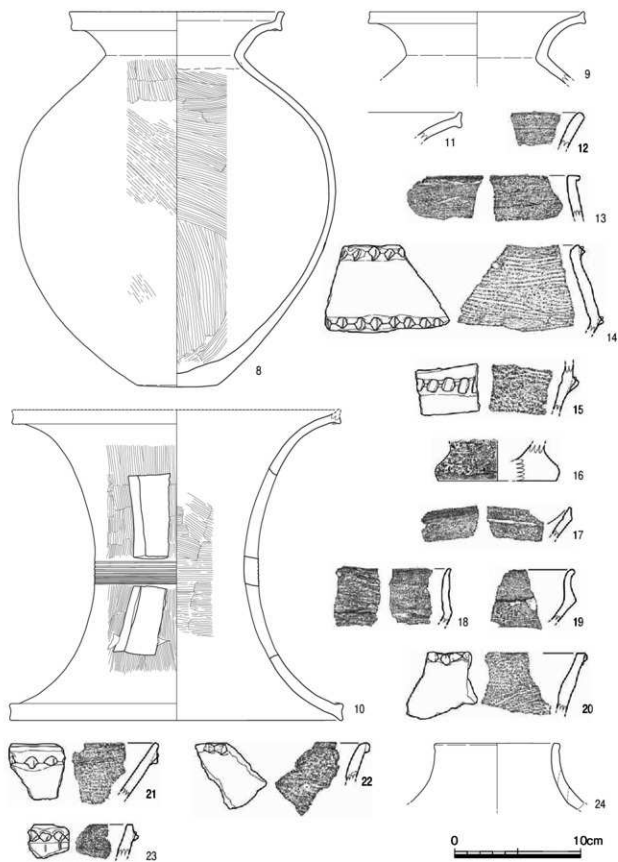
17は縄文時代後期の波状口縁鉢である。内面には段をもち、内外面ともに研磨調整が施される。18・19は断面逆「く」字形の浅鉢である。18は屈曲が弱く口縁部は垂直に近く立ち上がる。19の口縁部はしっかりと屈曲し内傾するが、端部は外反する。胴部外面に炭化物が付着する。

20～23は刻目をもつ粗製浅鉢である。20は外傾する口縁部で端部は上方から平坦に整える。刻目は指によるものか。21は外傾する口縁部で指刻みである。22は突帯を貼り付けず、口縁外端部に直接工具を押し引いて刻目を施す。23は口縁端部を平坦に整える。指刻みである。24は壺の口縁部・頸部である。内面は擦過調整、外面はナデ調整である。

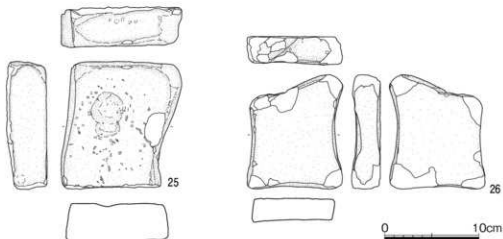
25は中央部に生痕化石をもつ砂岩を素材とした砥石である。3面を研ぎ面としており、正面には敲打痕も観察されることから、生痕の凹みも利用して台石としても使用したのと考えられる。26は赤いラミナ構造の縮模様が観察される堆積岩が素材で、6面ともを研ぎ面としている。うち上側面には溝状の研ぎ面がみられる。



第20図 竪穴住居2出土遺物① (S=1/3)



第21图 竖穴住居 2 出土遺物② (S=1/3)



第22図 竪穴住居2 出土遺物③ (S=1/4)

溝 (SD01)

L列～N列にかけて調査区を北西から南西に縦断するものである。幅は最大で3.8mを測る。堆積状況と遺構内出土遺物から掘削と埋没を複数回繰り返している。最初の掘削は少なくとも弥生時代後期以前と考えられる。最終的に完全埋没したのちも自然流路として存続したものと判断する。遺構内出土遺物としては、ほとんどが弥生時代後期と思われるものであるが、2層より近世磁器片の出土が1点みられた。

土坑1 (SK01)

グリッドF9からの検出で、土坑2と並ぶように検出した。北西・南東0.98m、北東・南西1.04mを測り、平面円形を呈する。深さは最深部で8cmと浅い。覆土にはⅢ層土と同質の黒色土が入るが、非常に多量の炭化木材を確認した。弥生土器小片の出土がみられた。

土坑2 (SK02)

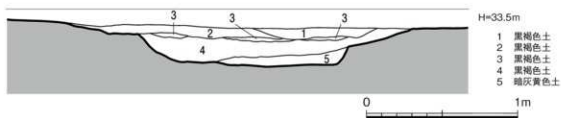
グリッドE9からの検出である。土坑1の北西側、山手に隣接する。北西・南東1.20m、北東・南西1.14mの平面円形を呈しており、最深部で深さは9cmである。土坑1よりひと回り大きい。覆土からは土坑1同様、多量の炭化木材を検出している。

土坑3 (SK03)

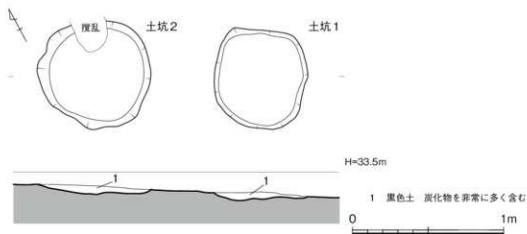
グリッドE9・E10からの検出である。土坑1の北東側に位置する。北西・南東2.10m、北東・南西1.46mの平面楕円形をなしており、最深部で深さは21cmである。1・2層より炭化物の検出がみられた。

土坑3出土遺物

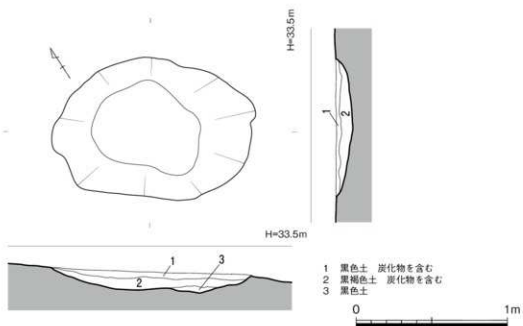
1は高坏の口縁部と思われる。口縁部下端には刻目を施す。内外面ともにナデ調整である。



第23図 溝実測図 (S=1/40)



第24図 土坑1・土坑2実測図 (S=1/40)



第25図 土坑3実測図 (S=1/40)



第26図 土坑3出土遺物 (S=1/3)

4 包含層ほか出土遺物

Ⅲ層出土遺物（第27図～第32図）

1～29は縄文時代晩期・突帯文期の資料，30～81は弥生時代後期の資料，82は中世の資料である。

1・2は縄文時代晩期の深鉢口縁部である。1はやや厚手で、大きく外反する。内外面ともに比較的丁寧にナデ調整を施す。2は内外面ともに擦過調整で、口縁端部はナデ調整の整形により外反する。

3～13は突帯文土器の甕である。3～6は口縁部の資料，7～13は胴屈曲部の資料である。12は工具による刻目を施すが、他は指先によって施された刻目である。3は器壁に焼成前の穿孔様のものがあるが、有機質のもの粘土への混入であることも考えられ意図的なものかは不明である。口唇部上端を平坦に整えている。4は非常に強い内傾を示す。内面には横方向の貝殻条痕調整が観察される。

5は口唇部上面を平坦に整える。

7は外面に炭化物の付着が認められる。8・9の屈曲は緩やかである。10は内外面に貝殻条痕調整を施す。11の外面には炭化物が付着する。12は厚手の器壁で、突帯裏には横方向の強いナデ調整を施す。

14・15は縄文時代晩期もしくは突帯文期の深鉢・甕の底部である。14は断面、強い張り出しをもつ。15の張り出しはここまで強くない。

16は突帯文期の断面逆「く」字をなす鉢である。強く胴部で屈曲し、口縁部は内傾、口唇部は先細りとなって強く外反する。外面、屈曲より下位は擦過調整、屈曲より上位は丁寧にナデ調整である。内面は貝殻条痕調整のちにナデ調整を施す。17は縄文時代後期の波状口縁の鉢である。波頂部の資料で、内面には段を作り、内外面ともに研磨調整を施す。

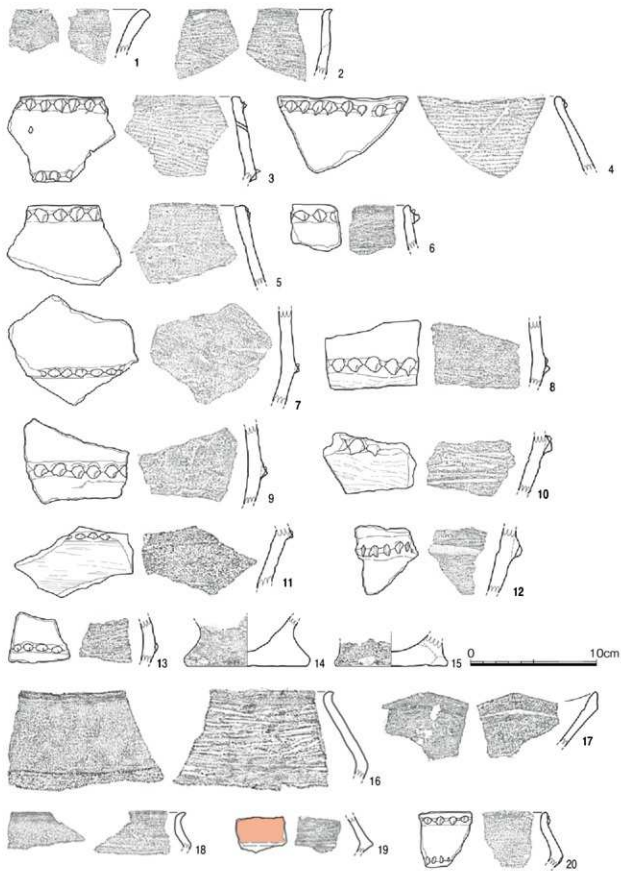
18～20は突帯文期の断面逆「く」字をなす浅鉢である。18の強く内傾する口縁部は、上位で強く外反し、先細りとなる。黒色磨研である。19は屈曲部から口縁部は強く内傾する。外面には赤色塗彩を行う。20の内傾する口縁部は上位で外反する。口縁部に指による刻目を、胴屈曲にはヘラ状工具による刻目を施す。

21～23は縄文時代晩期・突帯文期の粗製浅鉢である。21は胴部から緩やかに内湾して口縁部はわずかに外傾する。外面には厚い炭化物の付着が認められる。22は外傾する口縁部の資料で、器壁は比較的薄手である。外面には厚く炭化物が付着する。23は外傾する口縁部で、口唇部に接して突帯が貼り付けられ、指による刻目が施される。外面には炭化物が付着する。24は薄手の器壁で、細い断面三角の突帯に指による強い刻目を入れる。25は厚手の組織痕土器である。外面にはアングンの圧痕が観察される。

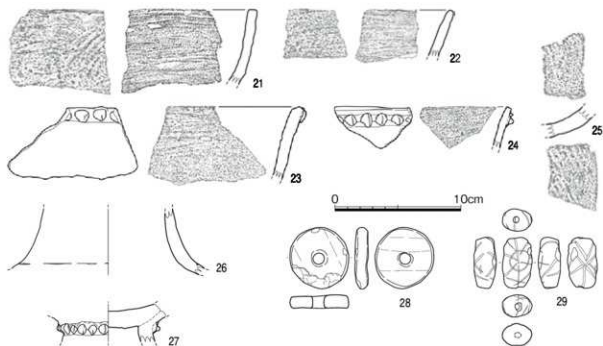
26はおそらく突帯文期のものと思われる壺の頸部である。外面には研磨調整を施す。肩部と頸部との境界には鋭利な工具による沈線が巡るが、その後の研磨調整で途切れ途切れである。27は突帯文期の高坏である。脚部最上位に刻目突帯をもつ。

28は紡錘車である。粗製土器片の周囲を打ち欠いたのちに研磨を施し、中央には穿孔を入れる。29は土鉢か、もしくは管玉の土製模造品と考えられる。線刻が施される。

30～41は脚台付長胴甕の資料である。いずれも胴部は高い位置で最大径を作り、そこから一旦内傾して内湾する口縁部が外傾する。30の口縁部は外端部のつまみ出しと外面のナデ調整で外側への張り出しが明瞭である。31の口縁部は立ち上がりやや短めである。32は外面に炭化物の付着が認められる。33は器壁が薄く、口縁部の外傾の度合いが強い。胴部外面最上位に炭化物が付着する。34は外面の胴部と口縁部の境界が不明瞭である。35は外面に炭化物が付着する。36の口唇部は平坦に整え、内面へと傾斜する。外面には炭化物が付着する。37は外面、胴部から口縁部への移行が緩やかである。



第27図 Ⅲ層出土遺物① (S=1/3)



第28図 III層出土遺物② (S=1/3)

口縁部外面上位に炭化物が付着する。38は器面の状態が悪いが、外面には炭化物が残存する。口唇部を平坦に整える。

42は胴部と口縁部との境界に三突帯を巡らす甕の資料である。

43~48は長胴甕の脚台の資料である。43~47はそれぞれ裾部が外反・先細りしながら大きく開く。

49は脚台部の資料で、裾端部外面に沈線を引く。

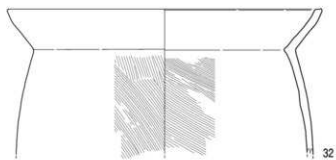
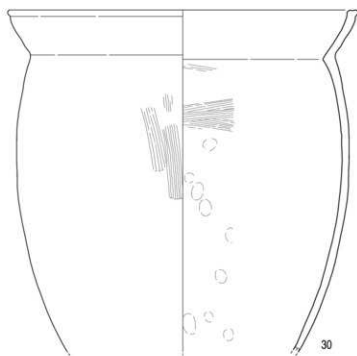
50~52は鉢の資料である。50は胎土に赤色粒子を含む。外面にはハケメ調整が明瞭に残る。51は丸みを帯びた胴部に口縁部が大きく外傾する。脚台をもつものか。52はボウル状の器形で、口縁部外面には段を作る。

53~67は壺の資料である。53は大きく開く頸部に短い口縁部が立ち上がる。54は口縁部の立ち上がりがやや高く、口縁部下位には「M」字状の二段の段をもつ。高坏の可能性もある。55の口縁部立ち上がりは短い。56は大きく開く頸部でその端部をそのまま上下につまみ出して口縁部とする。58の頸部は若干内湾する。

59~61は頸部が肩部から外傾してそのまま口縁部となる資料である。59・60は外反し、61は直線的である。62はおそらく長胴の胴部をもつもので、肩部はなで肩、そこから延びる頸部・口縁部は直線的で外傾する。橙色系の色調が特徴的である。63は胴部の資料で、断面四角の突帯に刻目を施す。64~67は底部の資料である。いずれも狭小な平底で内面にハケメ調整を残すが、64はやや丸みを帯びる。

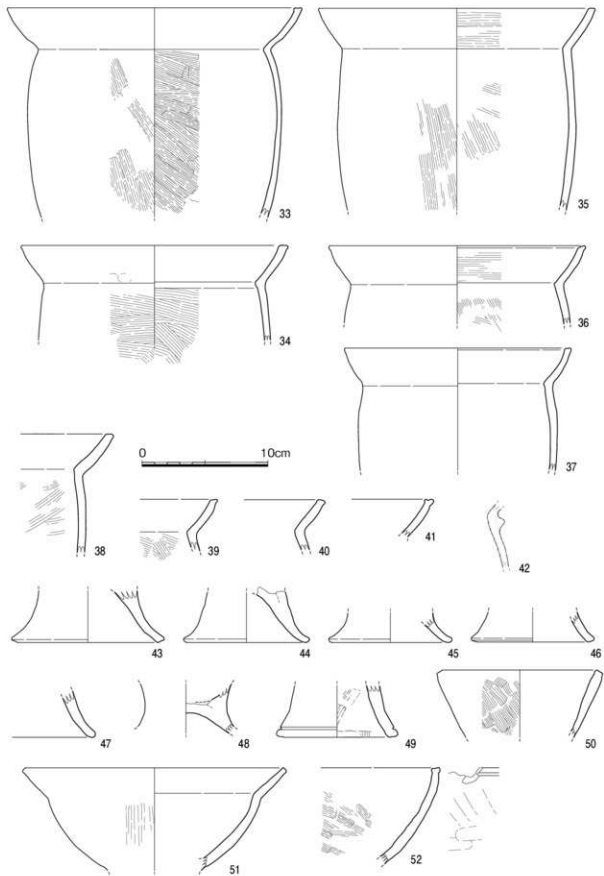
68~72は高坏の資料である。68は浅い坏部から口縁部が直線的に立ち上がり、その接合部には刻目を施す。口縁部は外側へつまみ出す。69は直立する口縁部で、外面には暗文を入れる。70・71は鐙状の口縁部をもつもので、どちらも内面、坏部と口縁部の境界には張り出しをもつ。70は外面にはハケメ調整を行い、内面はハケメ調整ののちにミガキを施す。72は脚部の資料である。

73~79は器台の資料である。73~77は裾部で、大きく外反し、端部をつまみ出す。78・79は透かしの部分で、工具による切り込みがみられる。

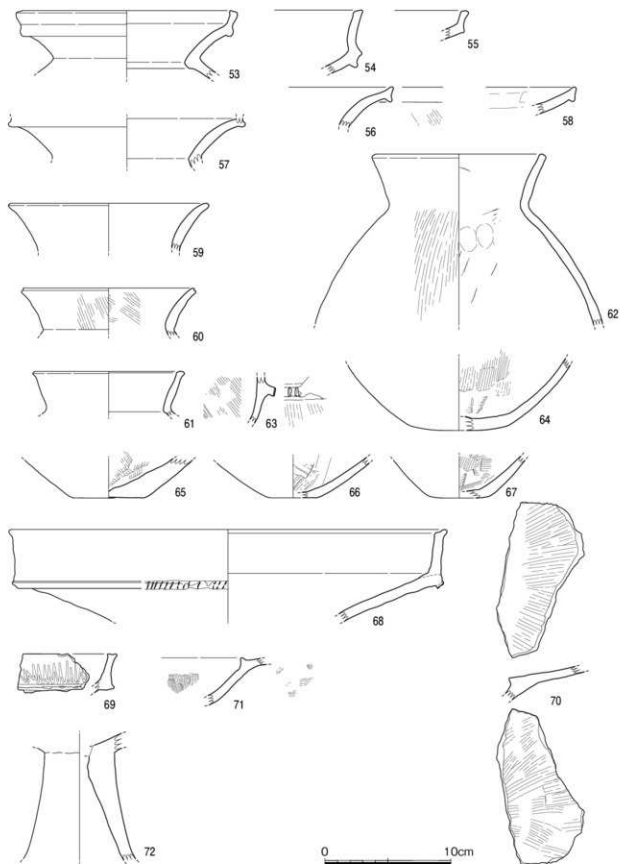


0 10cm

第29図 Ⅲ層出土遺物③ (S=1/3)



第30图 Ⅲ层出土遗物④ (S=1/3)

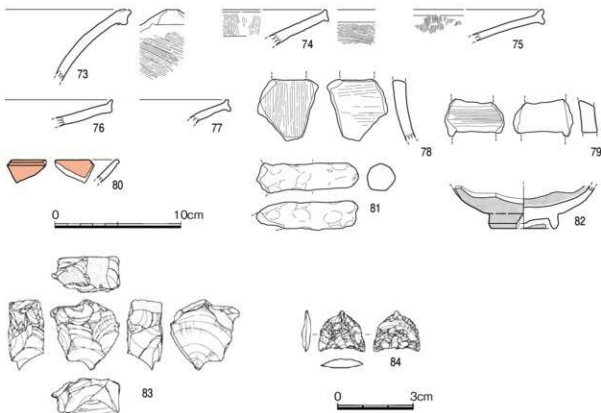


第31图 Ⅲ層出土遺物⑤ (S=1/3)

80は皿か坏となるもので、内外面ともに丹塗りである。口縁部外面には沈線を引く。81は杓子形土製品の柄の部分と思われる。

82は青磁の碗である。

83は黒曜石の石核である。打面を変えながら多方向から剥離を行っており、一部に自然面を残している。84は黒曜石製の石鏃である。長さに対して横幅のほうが広く、両側片は弧状である。また、基部については内湾する。83・84ともに漆黒色を呈し、不純物の少ない良質な黒曜石を素材とする。



第32図 Ⅲ層出土遺物⑤ (73~82:S=1/3, 83-84:S=2/3)

Ⅱ層ほか出土遺物 (第33図・第34図)

1~18は縄文時代後期から突帯文期にかけての資料, 19~40は弥生時代中・後期の資料, 41~48は中世の資料である。

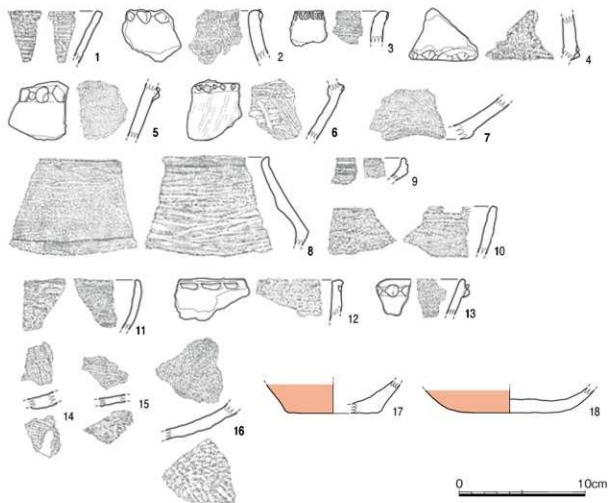
1は縄文時代晩期の深鉢で、外傾する口縁部である。比較的薄手の器壁である。

2~6は突帯文期の甕である。2は内傾する口縁部で、外反させた口唇部に直接刻目を施す。刻目は指先による。3は外反する口唇部に半截竹管状の工具で刻目を施す。4~6は胴部突帯の資料である。4・5は指による刻目である。6の刻目原体は不明である。

7は浅鉢の底部である。内外面ともに研磨調整を行う。8は鉢で、強い屈曲から口縁部は内傾し、口唇部は先細りとなって外反する。9は縄文時代後期の鉢口縁部で、口縁部文様帯に沈線と縄文が認められる。

10~13は粗製浅鉢である。10・11は外面に炭化物が付着する。12は工具の押しききにより刻目を入れる。13は指先による刻目である。

14~16は組織痕土器である。14・15はアンギン, 16は龍目の圧痕が認められる。



第33図 II層ほか出土遺物① (S=1/3)

17・18は壺の底部である。17は平底，18は平端部をもつが胴部との境界は不明瞭である。どちらも外面に丹塗りを施す。

19は弥生時代中期の甕である。断面三角で外側へのびる口縁部は上方へ反る。

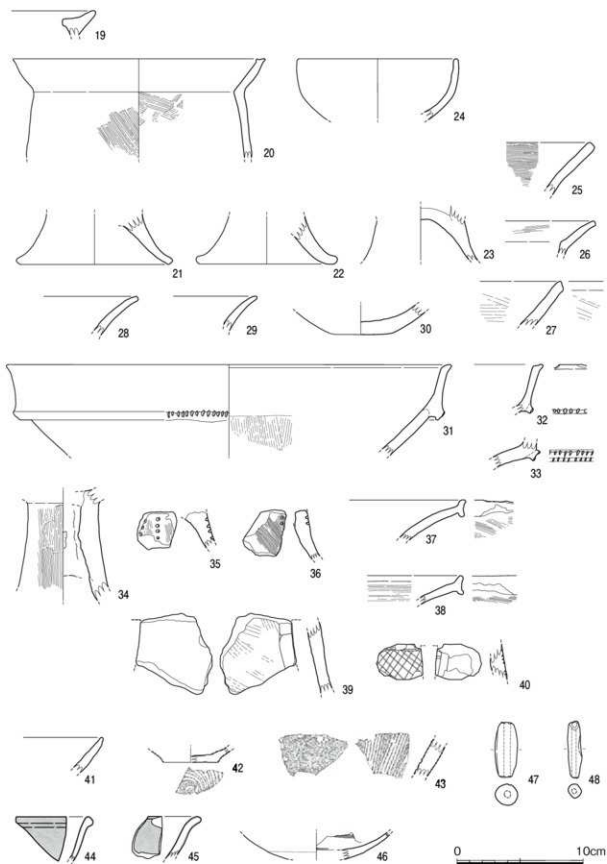
20～23は脚台付長胴甕である。20は内外面にハケメ調整を残す。21～23は脚台部の資料である。いずれも裾部は先細りとなって大きく外反する。24～27は鉢である。24は内外面ともに丁寧に作る。25は一応鉢と判断したが、高坏脚部の可能性もある。外面はミガキ調整，内面はハケメ調整である。26は大きく外傾する口縁部である。27は直線的に外傾する口縁部である。

28～30は壺である。28・29は外傾・外反する口縁部である。30は底部で、狭小な平底をなす。

31～36は高坏である。31は深めの坏部をもち、口縁部は若干外傾する。坏部と口縁部との境界には刻目を施す。32・33も31同様刻目をもつ。34～36は脚部である。34の外面には目の細かいハケメを縦方向に施す。35・36は列点文をもつ。

37～40は器台である。37・38は裾部で、端部は上下に張り出しをもつ。39・40は透かしの切り出しが確認できる。40は鋭利な工具によって格子目文が施される。

41・42は土師器の坏である。42は底面に糸切り痕をもつ。43は須恵質の挿鉢で、内面にクシメが入る。44・45は青磁碗である。44の口縁部は外側へ肥厚し、45の口縁部は外反する。46は唐津焼皿で、内面に鉄絵が認められる。47・48は土唾である。



第34図 II層ほか出土遺物② (S=1/3)

第2表 竪穴住居1出土遺物観察表①

図号	種類	数量	クワット	発掘層位	文様・彫刻		色澤		出土	備考
					外周	内周	外周	内周		
8	1 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	十字	ハクメ・十字	横	横	黄褐色・灰石・石灰・白色粒子・赤色粒子	採取層位 I層 27.80
	2 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	十字	ハクメ・十字	横	横	黄褐色・灰石・白色粒子	採取層位 I層 28.40 断面最大径 25.20
	3 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	明赤褐色	横	黄褐色・灰石・白色粒子・赤色粒子	採取層位 I層 28.40 断面最大径 22.50
	4 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	十字	ハクメ・十字	横	横・灰黄褐色	黄褐色・灰石・白色粒子	採取層位 I層に灰化層付着 I層 22.20
	5 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	ハクメ	十字	に高い稜	明赤褐色	黄褐色・灰石	採取層位 I層に灰化層付着 I層 22.20
9	6 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	に高い稜	横	黄褐色・灰石	採取層位 I層に灰化層付着 I層 24.20
	7 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	明赤褐色	横	黄褐色・灰石・白色粒子	採取層位 I層に灰化層付着 I層 22.70 断面最大径 20.30
	8 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	ハクメ	ハクメ・十字	に高い稜	に高い稜	黄褐色・灰石	採取層位 I層に灰化層付着 I層 22.20 断面最大径 26.20
	9 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	ハクメ	ハクメ	横	横	黄褐色・灰石・石灰・白色粒子	I層付着 断面最大径26.20
	10 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	横	横	黄褐色・灰石	採取層位 I層 22.40 断面最大径 20.30
	11 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	横	横	黄褐色・石灰	採取層位 I層 22.00
	12 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	横・灰黄褐色	横	黄褐色・石灰・白色粒子	採取層位 I層に灰化層付着 I層 22.20 断面最大径 20.60
	13 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	明赤褐色・灰黄褐色	明赤褐色	黄褐色・灰石・白色粒子	採取層位 I層 21.40
	14 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ	横	横	黄褐色・灰石・石灰	採取層位 I層 22.00
	15 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	に高い稜	に高い稜	黄褐色・灰石	採取層位 I層に灰化層付着 I層 22.00
	16 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	ハクメ	ハクメ・十字	明赤褐色・黄褐色	明赤褐色	黄褐色・灰石・白色粒子	採取層位
	10	17 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	横	横	黄褐色・灰石・白色粒子
18 竪穴住居1土器		壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ	横	横	黄褐色・灰石	I層
19 竪穴住居1土器		壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ・十字	横	横	黄褐色・灰石・白色粒子	採取層位 I層 21.00
20 竪穴住居1土器		壺	-	SRI	ハクメ	ハクメ	に高い稜	横	黄褐色・灰石	採取層位 I層に灰化層付着 I層 21.40 断面最大径 19.50
21 竪穴住居1土器		壺	-	SRI	-	ハクメ・十字	に高い稜	に高い稜	黄褐色・灰石	採取層位 I層 20.60
22 竪穴住居1土器		壺	-	SRI	ハクメ	ハクメ・十字	横	に高い稜	黄褐色・石灰・赤色粒子	採取層位 I層 21.20
23 竪穴住居1土器		壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ	に高い稜	横	黄褐色・灰石・石灰・白色粒子	採取層位 I層に灰化層付着 I層 20.00
24 竪穴住居1土器		壺	-	SRI	十字	十字	に高い稜	に高い稜	黄褐色・灰石・石灰	採取層位 I層 19.40 断面最大径 17.20
25 竪穴住居1土器		壺	-	SRI	ハクメ	ハクメ	横	に高い稜・灰黄褐色	黄褐色・灰石・石灰・白色粒子・赤色粒子	採取層位 I層 19.20 断面最大径 17.60
26 竪穴住居1土器		壺	-	SRI	十字	ハクメ・十字	明赤褐色	明赤褐色	黄褐色・灰石	採取層位 I層 18.20 断面最大径 17.20
11	27 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	十字	ハクメ・十字	に高い稜	に高い稜	黄褐色・灰石・白色粒子	採取層位 I層に灰化層付着 I層 18.20 断面最大径 16.20
	28 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	十字	ハクメ・十字	横	横	黄褐色・灰石・石灰	採取層位 I層 18.00
	29 竪穴住居1土器	壺	-	SRI	ハクメ・十字	ハクメ	明赤褐色	に高い稜	黄褐色・灰石	採取層位 I層 18.60

区	番号	種類	目的	グリッド	調査年度	文書・図面		色票		出土	備考
						外観	内観	外観	内観		
11	30	居住施設土部	壁	-	SRI	ナブ	ナブ	横・橙	横	黄褐色・石灰	灰褐色土、 稀に炭化物付着 （19）（24）
	31	居住施設土部	壁	-	SRI	ナブ	ナブ	上・白・黄緑	上・白・黄緑	黄褐色 （19）（27）	
	32	居住施設土部	壁	-	SRI	ハナメ・ナブ	ハナメ・ナブ	上・白・橙	横	黄褐色・石灰・白色粒子	稀に炭化物付着
	33	居住施設土部	壁	-	SRI	ナブ	ハナメ・ナブ	横	黄緑	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	稀に炭化物付着
	34	居住施設土部	壁	-	SRI	ハナメ・ナブ	ハナメ・ナブ	上・白・橙	横	黄褐色・石灰・石灰	
	35	居住施設土部	壁	-	SRI	ハナメ・ナブ	ナブ	横	黄緑	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	稀に炭化物付着
	36	居住施設土部	壁	-	SRI	ハナメ・ナブ	ハナメ・ナブ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	稀に炭化物付着
	37	居住施設土部	壁	-	SRI	ナブ	ハナメ・ナブ	黄緑	黄緑	黄褐色・石灰・白色粒子	稀に炭化物付着
38	居住施設土部	壁	-	SRI	ハナメ・ナブ	ハナメ	横	上・白・黄緑	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子・ 赤色粒子		

第3表 竪穴住居1出土物観察表②

区	番号	種類	目的	グリッド	調査年度	文書・図面		色票		出土	備考
						外観	内観	外観	内観		
12	39	居住施設土部	壁	-	SRI	ナブ	ハナメ・ナブ	横	上・白・黄緑	黄褐色・石灰・白色粒子	灰褐色土
	40	居住施設土部	壁	-	SRI	ナブ	ハナメ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土
	41	居住施設土部	壁	-	SRI	ハナメ・ナブ	ハナメ・ナブ	横	黄緑	黄褐色土	灰褐色土
	42	居住施設土部	壁	C12	SRI-B	ナブ	ナブ	上・白・黄緑	上・白・黄緑	石灰	灰褐色土、 稀に炭化物付着 （11）
	43	居住施設土部	壁	-	SRI	ハナメ・ナブ	ハナメ	上・白・黄緑	横	黄褐色・石灰・白色粒子	稀に炭化物付着
	44	居住施設土部	壁	-	SRI	ナブ	ハナメ	上・白・黄緑	上・白・黄緑	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	稀に炭化物付着
	45	居住施設土部	壁	B12	SRI-B	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土 （11）
	46	居住施設土部	壁	C12	SRI-B	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	（11）
	47	居住施設土部	壁	C12	SRI-B	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰・白色粒子	（10）
	48	居住施設土部	壁	C12	SRI-B	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰・白色粒子	（10）
	49	居住施設土部	壁	-	SRI	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰・白色粒子	（10）
	50	居住施設土部	壁	-	SRI	ナブ	ナブ	黄緑	黄緑	黄褐色・石灰・白色粒子	（10）
13	51	居住施設土部	壁	-	SRI	ナブ	ナブ	上・白・黄緑	上・白・黄緑	黄褐色・石灰・白色粒子	（10）
	52	居住施設土部	壁	-	SRI	ナブ	ナブ	上・白・黄緑	横	黄褐色・石灰 炭化物付着・黄緑 （10）	
	53	居住施設土部	壁	-	SRI	ナブ	ナブ	上・白・黄緑	上・白・黄緑	黄褐色・石灰・白色粒子	
	54	居住施設土部	壁	-	SRI	ハナメ・ナブ	ハナメ・ナブ	上・白・黄緑・黄緑	上・白・黄緑・黄緑	黄褐色・石灰・白色粒子	灰褐色土、 稀に炭化物付着 （19）（24）
	55	居住施設土部	壁	-	SRI	ハナメ	ハナメ	横	横	黄褐色・石灰・白色粒子	灰褐色土 （19）
	56	居住施設土部	床	-	SRI	ハナメ	ハナメ	横	横	黄褐色・石灰・白色粒子	灰褐色土 （19）（24）
	57	居住施設土部	床	-	SRI	ハナメ	ハナメ	横	横	黄褐色・白色粒子	灰褐色土 （19）
	58	居住施設土部	床	-	SRI	ハナメ・ナブ	ハナメ	横	上・白・橙・横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	（19）（24） （24）
	59	居住施設土部	床	-	SRI	ハナメ	ハナメ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土 （19）（24）
	60	居住施設土部	床	-	SRI	ナブ	ハナメ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子 赤色粒子	灰褐色土 （19）（27）
	61	居住施設土部	床	-	SRI	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土 （19）
	14	62	居住施設土部	床	C12	SRI-B	ナブ	ナブ	上・白・黄緑	上・白・黄緑	黄褐色・石灰・白色粒子
63		居住施設土部	壁	-	SRI	縦文・ハナメ・ナブ	ハナメ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子・ 赤色粒子	灰褐色土 （19）（26）
64		居住施設土部	壁	-	SRI	ナブ	ハナメ	横	横・上・白・黄緑	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子・赤色粒子	（19）（26）
65		居住施設土部	壁	C12	SRI-B	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰・白色粒子	（19）（22）
66		居住施設土部	壁	-	SRI	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子	灰褐色土 （19）（22）
67		居住施設土部	壁	-	SRI	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰	灰褐色土 （19）（26）
68		居住施設土部	壁	-	SRI	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰	灰褐色土
69		居住施設土部	壁	-	SRI	ナブ	ナブ	横	横	黄褐色・石灰・石灰・白色粒子・ 赤色粒子	灰褐色土
70		居住施設土部	壁	-	SRI	縦文・ナブ	ハナメ	横・上・白・橙	横	黄褐色・石灰・石灰	灰褐色土

群	番号	遺跡	グリッド	遺跡番号	文様・図型		色相		土質	備考	
					外周	内周	外周	内周			
14	71	弥生前期土部	崖	-	SRI	縄文/ナナ	ハナメ	に高い	崖	赤陶石・灰石・石灰・白色粘土・赤色粘土	採取済
	72	弥生前期土部	崖	-	SRI	縄文/ハナメ+ナナ	ハナメ	崖	崖	赤陶石・灰石・白色粘土	採取済
	73	弥生前期土部	崖	C12	SRI-B	ハナメ+ナナ	ハナメ	に高い	崖	赤陶石・灰石・石灰	採取済
	74	弥生前期土部	崖	C12	SRI-B	ナナ	ナナ	に高い	崖	赤陶石・灰石・石灰・白色粘土	採取済
	75	弥生前期土部	崖	-	SRI	縄文/ハナメ+ナナ	ハナメ	灰黄緑・に高い	崖	赤陶石・灰石・白色粘土	採取済 採集地不明 13号 11.4 採集地不明 (25.6)
	76	弥生前期土部	崖	-	SRI	縄文/ナナ	ハナメ	赤	赤	赤陶石・灰石・石灰・白色粘土	13号11.4 採集地不明 (25.6)
	77	弥生前期土部	崖	-	SRI	縄文/ハナメ+ナナ	ハナメ+ナナ	に高い	崖	赤陶石・灰石・石灰・白色粘土	採取済 13号 9.45 採集地不明 (20.8)
15	78	弥生前期土部	崖	-	SRI	縄文/ハナメ+ナナ	ハナメ	崖	崖	赤陶石・灰石・石灰・白色粘土	採取済 13号 10.0 採集地不明 (17.4)
	79	弥生前期土部	崖	-	SRI	縄文/ハナメ+ナナ	ハナメ	に高い	崖	赤陶石・灰石・石灰・白色粘土	採取済 13号 9.0 採集地不明 (17.4)
	80	弥生前期土部	崖	-	SRI	縄文/ナナ	ハナメ	崖	崖	赤陶石・灰石・石灰・白色粘土	採取済 13号 16.0
	81	弥生前期土部	崖	-	SRI	縄文/ナナ	ハナメ+ナナ	崖	崖	赤陶石・灰石・石灰・白色粘土・赤色粘土	採取済 13号 12.2
	82	弥生前期土部	崖	-	SRI	ナナ	ナナ	に高い	崖	赤陶石・灰石・石灰・白色粘土・赤色粘土	採取済

第4表 壑穴住居1出土遺物観察表③

群	番号	遺跡	グリッド	遺跡番号	文様・図型		色相		土質	備考	
					外周	内周	外周	内周			
16	82	弥生前期土部	崖	-	SRI	ナナ	ナナ	に高い	崖	赤陶石・灰石・石灰・白色粘土・赤色粘土	採取済
	83	弥生前期土部	崖	-	SRI	縄文/ハナメ+ナナ	ハナメ	に高い	崖	赤陶石・灰石	採取済
	84	弥生前期土部	崖	-	SRI	ナナ	ナナ	崖	崖	赤陶石・灰石	採取済
	85	弥生前期土部	崖	-	SRI	ハナメ+ナナ	ハナメ	に高い	崖	赤陶石・灰石・白色粘土	採取済
	86	弥生前期土部	崖	-	SRI	ハナメ+ナナ	ナナ	に高い	崖	赤陶石・灰石・白色粘土	採取済 13号 (4.2)
	87	弥生前期土部	崖	-	SRI	ナナ	ハナメ	に高い	崖	赤陶石・灰石・石灰・白色粘土	採取済 採集地不明 13号 5.4
	88	弥生前期土部	崖	-	SRI	ハナメ+ナナ	ハナメ	に高い	崖	赤陶石・灰石	採取済 13号 5.8
	89	弥生前期土部	崖	-	SRI	ナナ	ハナメ	崖	崖	赤陶石・灰石・石灰・白色粘土・赤色粘土	採取済 13号 5.5
	90	弥生前期土部	崖	-	SRI	ハナメ	ハナメ	に高い	崖	赤陶石・灰石	採取済
	91	弥生前期土部	高所	-	SRI	ナナ/ハナメ	ハナメ	明黄緑	明黄緑	赤陶石・灰石・石灰・赤色粘土	採取済
17	92	弥生前期土部	高所	-	SRI	ナナ	ナナ	に高い	崖	赤陶石・灰石・石灰・白色粘土	採取済 13号 20.2
	93	弥生前期土部	高所	-	SRI	ナナ	縄文/ナナ	明黄緑	明黄緑	赤陶石・灰石・白色粘土	採取済 13号 23.0
	94	弥生前期土部	高所	-	SRI	縄文/13号A、ハナメ	内周B/13号A、ハナメ	崖	崖	灰石・黒炭	内周B/赤黒内周 13号11.1
	95	弥生前期土部	高所	-	SRI	縄文・黒目・透かし/ナナ、ハナメ	13号/ナナ	崖	崖	赤陶石・灰石・石灰・白色粘土・赤色粘土	13号11.1
	96	弥生前期土部	高所	-	SRI	ナナ	ナナ	崖	崖	赤陶石・灰石・白色粘土・赤色粘土	採取済
	97	弥生前期土部	高所	C12	SRI-B	透かし/ハナメ+ナナ	ナナ	に高い	崖	赤陶石・灰石・石灰	採取済
	98	弥生前期土部	高所	-	SRI	ハナメ+ナナ	13号	崖	崖	赤陶石・灰石・白色粘土	採取済
	99	弥生前期土部	高所	-	SRI	透かし/13号	ハナメ	崖	崖	灰石	採取済 採集地不明 13号 12.2
	100	弥生前期土部	邸台	-	SRI	透かし・クシメ/ハナメ+ナナ	ハナメ+ナナ	崖	崖	赤陶石・灰石・石灰・白色粘土	採取済 13号 28.9 13号 30.2
	101	弥生土部・古式土部	邸台	-	SRI	透かし/ハナメ+ナナ	ハナメ+ナナ	赤	崖	赤陶石・灰石・石灰・白色粘土	採取済 採集地不明
102	弥生土部・古式土部	邸台	-	SRI	ナナ	ナナ	に高い	崖	赤陶石・灰石	採取済	
103	弥生中期土部	壘	-	SRI	縄文・縄文+ナナ	ナナ	暗黄緑・灰黄	灰白	赤陶石・灰石・白色粘土	採取済(土物)	

第5表 竪穴住居2出土遺物観察表

図号	種別	時期	グリッド	遺跡番号	文様・形状		色相		土土	備考
					外周	内周	外周	内周		
33	竪穴住居土器	甕	-	S102	ハナメ・ナメ	ナメ	こみ+黄	こみ+黄	焼酎石・灰石	灰土質 内周に灰化跡付着 139 (21.6)
	竪穴住居土器	甕	-	S102	ナメ	ハナメ・ナメ	こみ+黄	黄	焼酎石・灰石・石灰・白色粉子・赤色粉子	灰土質 内周に灰化跡付着 139 (22.8)
	竪穴住居土器	甕	-	S102	ナメ	ハナメ・ナメ	黄	黄	焼酎石・灰石・白色粉子	灰土質 内周に灰化跡付着
	竪穴住居土器	甕	-	S102	ナメ	ナメ	灰黄緑	こみ+黄緑	焼酎石・灰石・石灰・白色粉子	灰土質
	竪穴住居土器	甕	-	S102	ナメ	ナメ	黄	こみ+黄緑	焼酎石・灰石・石灰	灰土質 内周に灰化跡付着
	竪穴住居土器	甕+壺	-	S102	瓶目/ハナメ	ハナメ	黄	黄	焼酎石・石灰・白色粉子	
	竪穴住居土器	甕+壺	-	S102	ナメ	ハナメ	黄	黄	焼酎石・灰石・石灰・白色粉子	灰土質 内周 (15.6)
8	竪穴住居土器	甕	-	S102	ハナメ・ナメ	ハナメ	こみ+黄	こみ+黄	焼酎石・灰石・石灰・白色粉子・赤色粉子	灰土質 内周に灰化跡付着 (25.4)
9	竪穴住居土器	甕	02	S102-B	ナメ	ナメ	明黄緑	明黄緑	焼酎石・灰石・白色粉子	灰土質 内周 (17.2)
10	竪穴住居土器	器台	02	S102	遺物付・瓶目/ハナメ	ハナメ	こみ+黄緑	こみ+黄緑	焼酎石・灰石	灰土質 内周 (26.7)
11	竪穴住居土器	器台	-	S102	ハナメ・ナメ	ナメ	こみ+黄緑	こみ+黄緑	焼酎石・灰石・石灰	
12	縄文土器・ 竪穴住居土器	深鉢	-	S102	ナメ	ナメ	こみ+黄緑・黒	こみ+黄緑・黒	焼酎石・灰石・石灰・白色粉子	
13	縄文土器・ 竪穴住居土器	深鉢	-	S102	ナメ	ナメ	こみ+黄	こみ+黄緑	焼酎石・灰石・石灰・白色粉子	
14	縄文土器・ 竪穴住居土器	甕	-	S102	瓶目/ナメ	段取縁	浅黄緑	浅黄緑	焼酎石・灰石・石灰	
15	縄文土器・ 竪穴住居土器	甕	-	S102	瓶目/ナメ	縁高	こみ+黄緑	こみ+黄緑	焼酎石・灰石・白色粉子	
16	縄文土器・ 竪穴住居土器	深鉢+甕	-	S102	ナメ	ナメ	こみ+黄緑	黄	焼酎石・灰石・石灰・白色粉子	灰土質 内周 (9.5)
17	縄文土器・ 竪穴住居土器	鉢	-	S102	縁高	縁高	こみ+黄緑	黄	焼酎石・灰石・白色粉子	器台口縁
18	縄文土器・ 竪穴住居土器	浅鉢	-	S102	縁高	縁高	こみ+黄	こみ+黄	焼酎石・灰石・石灰・白色粉子	
19	縄文土器・ 竪穴住居土器	浅鉢	-	S102	縁高	縁高	浅黄緑	こみ+黄緑	焼酎石・灰石・白色粉子	内周に灰化跡付着
20	縄文土器・ 竪穴住居土器	浅鉢	-	S102	瓶目/縁高	ナメ・縁高	こみ+黄緑	こみ+黄緑	焼酎石・灰石・白色粉子	
21	縄文土器・ 竪穴住居土器	浅鉢	-	S102	瓶目/縁高・ナメ	ナメ	こみ+黄緑	こみ+黄緑	焼酎石・灰石	
22	縄文土器・ 竪穴住居土器	浅鉢	-	S102	瓶目/ナメ	ナメ	こみ+黄緑	浅黄緑	焼酎石・灰石・石灰・白色粉子	
23	縄文土器・ 竪穴住居土器	浅鉢	-	S102	瓶目/ナメ	ナメ	黄	浅黄緑	焼酎石・灰石・石灰・白色粉子	
24	縄文土器・ 竪穴住居土器	甕	-	S102	ナメ	縁高	明黄緑	浅黄	焼酎石・灰石・石灰	灰土質 内周 (16.1)

第6表 土坑3出土遺物観察表

図号	種別	時期	グリッド	遺跡番号	文様・形状		色相		土土	備考
					外周	内周	外周	内周		
25	竪穴住居土器	高杯	E9-E10	S101	瓶目/ナメ	ナメ	こみ+黄緑	こみ+黄緑	焼酎石・灰石・石灰	

第7表 III層出土遺物観察表①

図 番号	種類	数量	グロット	層位	文相・形状				土質	備考
					内側		外側			
					外端	内端	外端	内端		
27	縄文上部	遺跡	-	Ⅲ	ナテ	ナテ	こぶし	直筒	角閃石・炭石・石炭	外側に炭化物付着
	縄文上部	遺跡	D9	Ⅲ	磨石	磨石	棒・こぶし	直筒	角閃石・炭石・石炭	
	弥生早期土部	壺	D89	Ⅲ	磨石/ナテ	筒状巻縁	直筒	直筒	角閃石・炭石・石炭	
	弥生早期土部	壺	D81	Ⅲ	磨石/ナテ	筒状巻縁	こぶし	直筒	角閃石・炭石・石炭	
	弥生早期土部	壺	D89	Ⅲ	磨石/ナテ	ナテ	両翼部・こぶし	両翼部・直筒	角閃石・炭石・石炭	
	弥生早期土部	壺	N4	Ⅲ	磨石/ナテ	ナテ	直筒	直筒	角閃石・炭石・石炭	
	弥生早期土部	壺	CE	Ⅲ	磨石/ナテ	ナテ	こぶし	こぶし	角閃石・炭石・白色粒子	外側に炭化物付着
	弥生早期土部	壺	C11	Ⅲ	磨石/ナテ	ナテ	棒・こぶし	両翼部	角閃石・炭石・白色粒子	
	弥生早期土部	壺	D81	Ⅲ	磨石/磨石	ナテ	角閃石	角閃石	角閃石	
	弥生早期土部	壺	D89	Ⅲ	磨石/筒状巻縁	筒状巻縁	こぶし	こぶし	角閃石・炭石・白色粒子	
	弥生早期土部	壺	CE	Ⅲ	磨石/筒状巻縁	磨石	磨石	磨石	角閃石・炭石・白色粒子	外側に炭化物付着
	弥生早期土部	壺	D81	Ⅲ	磨石/ナテ	ナテ	こぶし	こぶし	炭石・石炭	
	弥生早期土部	壺	D89	Ⅲ	磨石/ナテ	磨石	こぶし	こぶし	角閃石・炭石・白色粒子	
	縄文上部・ 弥生早期土部	遺跡・壺	B22	Ⅲ	ナテ	ナテ	こぶし	こぶし	角閃石・炭石・白色粒子	灰赤褐色 土質(28.0)
縄文上部・ 弥生早期土部	遺跡・壺	D81	Ⅲ	ナテ	ナテ	棒	こぶし	角閃石・白色粒子	灰赤褐色 土質(28.0)	
縄文上部・ 弥生早期土部	鉢	D89	Ⅲ	ナテ・磨石	筒状巻縁・ナテ	こぶし	こぶし	角閃石・炭石・石炭		
縄文上部	鉢	B21	Ⅲ	磨石	磨石	直筒部・磨	直筒部・磨	角閃石・炭石	直筒口縁	
弥生早期土部	直筒	C11	Ⅲ	磨石	磨石	両翼部	直筒	角閃石・炭石・石炭		
弥生早期土部	直筒	D81	Ⅲ	磨石	磨石	こぶし	こぶし	角閃石・炭石・石炭	外側に炭化物付着 赤色皮殻	
弥生早期土部	直筒	D89	Ⅲ	磨石/ナテ	ナテ	直筒部	直筒部	角閃石・炭石・石炭・白色粒子		
28	縄文上部・ 弥生早期土部	直筒	3/2	Ⅲ	筒状巻縁	筒状巻縁	こぶし	こぶし	角閃石・炭石・白色粒子	外側に炭化物付着
	縄文上部・ 弥生早期土部	直筒	4/6・1/3	Ⅲ	筒状巻縁	ナテ	炭	炭山	角閃石	外側に炭化物付着
	縄文上部・ 弥生早期土部	直筒	D89	Ⅲ	磨石/ナテ	ナテ	こぶし	直筒部	角閃石・炭石・白色粒子	外側に炭化物付着
	縄文上部・ 弥生早期土部	直筒	C12	Ⅲ	磨石/ナテ	ナテ	こぶし	直筒部	炭石・白色粒子	
	縄文上部・ 弥生早期土部	直筒	C12	Ⅲ	磨石(アノゴ)	ナテ	磨	こぶし	炭石・石炭	
	縄文上部・ 弥生早期土部	壺	C8	Ⅲ	直筒/磨石	ナテ・磨石	直筒部	直筒部	角閃石・炭石・石炭・白色	灰赤褐色 外側に炭化物付着
	縄文上部・ 弥生早期土部	高坪	C12	Ⅲ	磨石/ナテ	ナテ	直筒部・両翼部	直筒部	炭石・石炭・赤色粒子	灰赤褐色・珪石点
	縄文上部・ 弥生早期土部	磨石	Ⅲ	-	-	-	両翼部	-	角閃石・炭石・石炭	
	縄文上部・ 弥生早期土部	土鍋	Ⅲ	磨石/ナテ	-	-	こぶし	-	角閃石・炭石・石炭	
	30	弥生前期土部	壺	Ⅲ	ハナメ・ナテ	ハナメ・ナテ	磨	こぶし	角閃石・炭石・石炭・白色粒子	灰赤褐色 土質(22.0) 磨石最大径(26.4)
弥生前期土部		壺	B22	Ⅲ	ハナメ・ナテ	ハナメ・ナテ	磨	こぶし	角閃石・炭石・白色粒子・赤色粒子	灰赤褐色 土質(25.0) 磨石最大径(24.2)
弥生前期土部		壺	C12	Ⅲ	ハナメ・ナテ	ハナメ	こぶし	直筒部	角閃石・炭石・石炭・白色粒子	灰赤褐色 外側に炭化物付着 土質(25.0) 磨石最大径(23.6)
31	弥生前期土部	壺	C11	Ⅲ	ハナメ・ナテ	ハナメ・ナテ	両翼部	両翼部	角閃石・炭石・白色粒子	灰赤褐色 外側に炭化物付着 土質(23.2) 磨石最大径(29.2)
	弥生前期土部	壺	B11・C11	Ⅲ	ハナメ・ナテ	ハナメ	両翼部	両翼部	炭石・白色粒子	灰赤褐色 土質(22.2)
	弥生前期土部	壺	B21	Ⅲ	ハナメ・ナテ	ハナメ	磨	磨	角閃石・炭石	外側に炭化物付着 土質(22.0) 磨石最大径(29.0)
	弥生前期土部	壺	B21	Ⅲ	ハナメ・ナテ	ハナメ・ナテ	両翼部	こぶし	角閃石・炭石・石炭	灰赤褐色 外側に炭化物付着 土質(23.0)

第8表 III層出土遺物観察表②

図号	種類	数量	フリット	層位	文様・彫刻			色澤			出土	備考	
					外縁	内縁	内底	外縁	内縁	内底			
37	磁片(板瓦)	壹	B02	Ⅲ	ナテ			ハナメ・ナテ	こみい-黄緑	こみい-黄緑		角閃石・炭石・白色粒子	瓦板瓦文 彫刻(瓦板瓦片者 1面・18.0)
38	磁片(板瓦)	壹	B02	Ⅲ	ナテ			ハナメ・ナテ	黄	黄		角閃石・炭石	彫刻(瓦板瓦片者 1面・18.0)
39	磁片(板瓦)	壹	C12	Ⅲ	ナテ			ハナメ	黄	黄		角閃石・炭石・白色粒子	彫刻(瓦板瓦片者 1面・18.0)
40	磁片(板瓦)	壹	D01	Ⅲ	ナテ			ナテ	黄緑	こみい-黄緑		角閃石・炭石・白色粒子	
41	磁片(板瓦)	壹	D01	Ⅲ	ナテ			ナテ	こみい-黄緑	こみい-黄緑		角閃石・炭石・白色粒子	
42	磁片(板瓦)	壹	B01	Ⅲ	ナテ			ナテ	黄	黄		炭石・炭石・白色粒子	
43	磁片(板瓦)	壹	A22 B03	Ⅲ	ナテ			ナテ	こみい-黄緑	こみい-黄緑		角閃石・炭石・石炭	瓦板瓦文 彫刻(12.0)
44	磁片(板瓦)	壹	A23	Ⅲ	ナテ			ナテ	こみい-黄緑	こみい-黄緑・こみい-黄緑		角閃石・炭石・石炭	瓦板瓦文 彫刻(16.0)
45	磁片(板瓦)	壹	S01	Ⅲ	ナテ			ナテ	明赤黄	明赤黄		角閃石・炭石・石炭	瓦板瓦文 彫刻(9.0)
46	磁片(板瓦)	壹	I02	Ⅲ	ナテ			ナテ	明赤黄	明赤黄		角閃石・炭石・石炭	瓦板瓦文 彫刻(9.0)
47	磁片(板瓦)	壹	H4-13	Ⅲ	ナテ			ナテ	こみい-黄緑	こみい-黄緑		角閃石・炭石・石炭	
48	磁片(板瓦)	壹	D01	Ⅲ	ナテ			ナテ	こみい-黄緑	こみい-黄緑・黄緑		角閃石・炭石・石炭	瓦板瓦文
49	磁片(板瓦)	高円台	D09	Ⅲ	瓦葺/ナテ			ナテ	こみい-黄緑	黄赤黄		角閃石・炭石・石炭	瓦板瓦文 1面(19.0)
50	磁片(板瓦)	鉢	C11	Ⅲ	ハナメ			ナテ	黄	黄		角閃石・炭石・石炭・赤色粒子	瓦板瓦文 1面(12.0)
51	磁片(板瓦)	鉢	I02	Ⅲ	ハナメ・ナテ			ナテ	明赤黄	明赤黄		角閃石・炭石・石炭・赤色粒子	瓦板瓦文 1面(26.0)
52	磁片(板瓦)	鉢	C11	Ⅲ	ナテ			ナテ	こみい-黄緑	黄赤黄		角閃石・炭石・石炭	瓦板瓦文 1面(17.0)
53	磁片(板瓦)	鉢	C11	Ⅲ	ナテ			ナテ	こみい-黄緑	黄		角閃石	瓦板瓦文 1面(17.0)
54	磁片(板瓦)	鉢	C12	Ⅲ	ナテ			ナテ	黄緑	黄緑		角閃石・炭石・白色粒子	
55	磁片(板瓦)	鉢	B02	Ⅲ	ナテ			ナテ	黄	黄		角閃石・炭石・白色粒子・赤色粒子	
56	磁片(板瓦)	鉢	C12	Ⅲ	ナテ			ナテ	こみい-黄緑	黄		角閃石・炭石・白色粒子	
57	磁片(板瓦)	鉢	B02	Ⅲ	ナテ			ナテ	黄	黄		角閃石・炭石	瓦板瓦文
58	磁片(板瓦)	鉢	B02	Ⅲ	ナテ			ナテ	黄	黄		角閃石・炭石・白色粒子	
59	磁片(板瓦)	鉢	C11	Ⅲ	ナテ			ナテ	黄	黄		角閃石・炭石・石炭	瓦板瓦文 彫刻(15.0)
60	磁片(板瓦)	鉢	C12	Ⅲ	ハナメ・ナテ			ナテ	黄	黄		角閃石・炭石・白色粒子	瓦板瓦文 1面(12.0)
61	磁片(板瓦)	鉢	C22	Ⅲ	ナテ			ナテ	黄	黄		角閃石・炭石・石炭	瓦板瓦文 1面(12.0)
62	磁片(板瓦)	鉢	B02	Ⅲ	ハナメ			ナテ	黄	黄・こみい-黄緑		角閃石・炭石・石炭・白色粒子	瓦板瓦文 1面(15.0)
63	磁片(板瓦)	鉢	C12	Ⅲ	黄瓦/ナテ			ハナメ	黄	黄		角閃石・炭石	
64	磁片(板瓦)	鉢	C12	Ⅲ	ナテ			ハナメ・ナテ	黄赤	黄赤黄		角閃石・炭石・石炭	瓦板瓦文 彫刻(8.0)
65	磁片(板瓦)	鉢	C12	Ⅲ	ナテ			ハナメ	こみい-黄	こみい-黄		角閃石・炭石・石炭	瓦板瓦文(15.0)
66	磁片(板瓦)	鉢	B02	Ⅲ	ナテ			ナテ	こみい-黄緑	こみい-黄		角閃石・炭石・石炭	瓦板瓦文 彫刻(3.0)
67	磁片(板瓦)	鉢	B01	Ⅲ	ナテ			ハナメ	黄赤黄	黄赤黄		角閃石・炭石・石炭	瓦板瓦文 彫刻(4.0)
68	磁片(板瓦)	高円台	C02	Ⅲ	黄瓦/ナテ			ナテ	黄	黄・灰		角閃石・炭石・石炭	瓦板瓦文 彫刻(9.0)
69	磁片(板瓦)	高円台		Ⅲ	黄瓦/ナテ			ナテ	こみい-黄	こみい-黄		角閃石・炭石・白色粒子・赤色粒子	
70	磁片(板瓦)	高円台	B02	Ⅲ	ハナメ			ハナメ・1面ナテ	黄赤黄・こみい-黄緑	黄赤黄・こみい-黄緑		角閃石・炭石・石炭	彫刻(9.0)
71	磁片(板瓦)	高円台	C12	Ⅲ	ナテ			ナテ	黄	黄		角閃石・炭石・石炭	彫刻(9.0)
72	磁片(板瓦)	高円台	C11	Ⅲ	ハナメ・ナテ			ハナメ・ナテ	黄赤・こみい-黄緑	こみい-黄緑		角閃石・炭石・石炭	瓦板瓦文
73	磁片(板瓦)	高円台	C11	Ⅲ	ハナメ			ナテ	黄	こみい-黄		角閃石・炭石・白色粒子	
74	磁片(板瓦)	高円台	B01	Ⅲ	ハナメ			ハナメ・ナテ	こみい-黄緑	こみい-黄緑		角閃石・炭石・石炭	彫刻(9.0)
75	磁片(板瓦)	高円台	B01	Ⅲ	ナテ			ナテ	こみい-黄緑	こみい-黄緑		角閃石・炭石・石炭	彫刻(9.0)
76	磁片(板瓦)	高円台	B01	Ⅲ	ナテ			ナテ	こみい-黄緑	黄		角閃石・炭石・石炭	彫刻(9.0)
77	磁片(板瓦)	高円台	C22	Ⅲ	ナテ			ナテ	明赤黄	明赤黄		角閃石・炭石・石炭	
78	磁片(板瓦)	高円台	C11	Ⅲ	黄赤/ハナメ・ナテ			ハナメ・ナテ	こみい-黄緑	こみい-黄緑		角閃石・炭石・石炭	
79	磁片(板瓦)	高円台	H4-13	Ⅲ	黄赤/ハナメ・ナテ			ハナメ	黄	黄		角閃石・炭石・石炭	
80	磁片(板瓦)	高円台	B02	Ⅲ	黄赤/瓦葺/黄赤			ナテ	黄赤黄・黄赤	黄赤・黄赤黄		角閃石・炭石	
81	磁片(板瓦)	土製品	-	Ⅲ	ナテ			-	-	-		-	
82	中核陶器部	黄赤黄	C12	Ⅲ	-			-	灰白	灰白		白色粒子	瓦板瓦文 彫刻(5.0)

第9表 II層ほか出土遺物観察表

図	番号	種類	材質	フリット	形状	文様・装飾				色相	出土層	備考		
						外周		内周					外周	内周
						外周	内周	外周	内周					
10	1	縄文土器・ 弥生早期土器	灰緑	E11	Ⅱ	貝殻装飾		貝殻装飾		灰黄緑	川内・赤褐色	陶器・黒色・灰土	内面に黒化跡付着	
	2	弥生早期土器	黄	H5-11	Ⅱ	横線ノリヤ	ナヤ			川内・赤褐色	川内・赤褐色・ 灰黄緑	陶器・黒色・石灰		
	3	弥生早期土器	黄	-	横線	横線ノリヤ	ナヤ			黄	黄緑	灰石・石灰	内面に黒化跡付着	
	4	弥生早期土器	黄	E10	Ⅱ	横線ノリヤ	ナヤ			川内・赤褐色	川内・赤褐色	陶器・黒色・灰土		
	5	弥生早期土器	黄	-	横土	横線ノリヤ	ナヤ			灰黄緑	黄緑	陶器・黒色・石灰	内面に黒化跡付着	
	6	弥生早期土器	黄	E9	Ⅱ	横線ノリヤ	貝殻装飾	貝殻装飾		明赤褐色	明赤褐色	陶器・黒色・石灰	内面に黒化跡付着	
	7	縄文土器・ 弥生早期土器	灰緑	-	横土	横線	横線			川内・赤褐色	黄緑	陶器・黒色・石灰		
	8	弥生早期土器	黄	E9	Ⅱ	ナヤ	貝殻装飾ノリヤ			黄緑	黄緑	陶器・黒色・石灰		
	9	縄文土器	灰	E2	Ⅱ	波線・横線ノリヤ	ナヤ			川内・赤褐色	川内・赤褐色	赤褐色・石灰		
	10	縄文土器・ 弥生早期土器	灰緑	-	横土	貝殻装飾ノリヤ	貝殻装飾ノリヤ			黄緑	川内・赤褐色	陶器・黒色・白色灰土	内面に黒化跡付着	
	11	縄文土器・ 弥生早期土器	灰緑	E9	Ⅱ	横土	ナヤ			黄緑	川内・赤褐色	灰石・石灰	内面に黒化跡付着	
	12	弥生早期土器	灰緑	M1	Ⅱ	横線ノリヤ	ナヤ			川内・赤褐色	川内・赤褐色	陶器・黒色・赤褐色灰土		
	13	弥生早期土器	灰緑	E9	Ⅱ	横線ノリヤ	ナヤ			川内・赤褐色	黄緑	陶器・黒色・石灰	内面に黒化跡付着	
	14	縄文土器・ 弥生早期土器	灰緑	E7	Ⅱ	縦線装(アノボ)	ナヤ			川内・赤褐色	黄緑	灰石・石灰		
	15	縄文土器・ 弥生早期土器	灰緑	-	横土	縦線装(アノボ)	ナヤ			黄緑	明赤褐色	陶器・黒色		
16	縄文土器・ 弥生早期土器	灰緑	-	横土	縦線装(横目)	ナヤ			黄	川内・赤褐色	陶器・黒色・石灰・白色灰土			
17	弥生早期土器	黄	-	横土	丹塗リ/横線	ナヤ			川内・赤褐色・ 明赤褐色	川内・赤褐色	陶器・黒色・石灰	灰緑褐色・ 灰土(10)		
18	弥生早期土器	黄	E8	Ⅱ	丹塗リノリヤ	ナヤ			川内・赤褐色・ 黄	川内・赤褐色	陶器・黒色・石灰	灰緑褐色・ 灰土(10)		
19	弥生中期土器	黄	L4	Ⅱ	ナヤ	ナヤ			川内・赤褐色	川内・赤褐色	陶器・黒色・石灰			
20	弥生後期土器	黄	E10	Ⅱ	ハナメ	ハナメ			川内・赤褐色・ 黄	川内・赤褐色・ 黄	陶器・黒色・石灰	灰緑褐色・ 内面に黒化跡付着 (10) (12)		
21	弥生後期土器	黄	E9	Ⅱ	ナヤ	ナヤ			川内・赤褐色	川内・赤褐色	陶器・黒色・石灰	灰緑褐色 (12)		
22	弥生後期土器	黄	-	横土	ナヤ	ナヤ			川内・赤褐色	川内・赤褐色	陶器・黒色・白色灰土	灰緑褐色・ 灰土(12)		
23	弥生後期土器	黄	E9	Ⅱ	ナヤ	ナヤ			川内・赤褐色	灰黄緑	陶器・黒色・石灰	灰緑褐色 (12)		
24	弥生後期土器	灰	-	横土	ナヤ	ナヤ			川内・赤褐色	川内・赤褐色	陶器・黒色・石灰	灰緑褐色 (12)		
25	弥生後期土器	灰	-	横土	1/2ホ	ハナメ			黄	川内・赤褐色	灰石・石灰	内面に黒化跡付着		
26	弥生後期土器	黄	-	横土	ナヤ	ナヤ			赤褐色	赤褐色	陶器・黒色・石灰			
27	弥生後期土器	灰	F10	Ⅱ	ナヤ	ナヤ			明赤褐色	明赤褐色	陶器・黒色・石灰			
28	弥生後期土器	黄	J6	Ⅱ	ナヤ	1/2ホ			黄	黄	陶器・黒色・石灰・赤褐色			
29	弥生後期土器	黄	C11	Ⅱ	ナヤ	ナヤ			川内・赤褐色	川内・赤褐色	陶器・黒色・石灰			
30	弥生後期土器	黄	C11	Ⅱ	ナヤ	ナヤ			灰黄緑	川内・赤褐色	陶器・黒色・石灰	灰緑褐色・ 灰土(15)		
31	弥生後期土器	黄緑	-	横土	横線ノリヤ	ナヤ			黄	黄	陶器・黒色・石灰	灰緑褐色・ 内面に黒化跡付着 (10) (12)		
32	弥生後期土器	黄緑	E10	Ⅱ	横線ノリヤ	ナヤ			川内・赤褐色	川内・赤褐色	陶器・黒色・石灰			
33	弥生後期土器	黄緑	G6	Ⅱ	横線ノリヤ	ナヤ			川内・赤褐色	川内・赤褐色	陶器・黒色・石灰			
34	弥生後期土器	黄緑	E10	Ⅱ	ハナメノリヤ	ナヤ			川内・赤褐色	川内・赤褐色	陶器・黒色・石灰			
35	弥生後期土器	黄緑	E10	Ⅱ	横線ノリヤ	ナヤ			明赤褐色	黄	灰石・石灰	内面に黒化跡付着		
36	弥生後期土器	黄緑	J5	Ⅱ	横線ノリヤ	ナヤ			黄	黄	灰石・石灰・白色灰土	内面に黒化跡付着		
37	弥生後期土器	黄緑	D9	Ⅱ	ハナメノリヤ	ナヤ			川内・赤褐色	川内・赤褐色	陶器・黒色・石灰			
38	弥生後期土器	黄緑	L4	Ⅱ	ハナメ	ナヤ			黄	黄	陶器・黒色・石灰			
39	弥生後期土器	黄緑	C12	Ⅱ	波線ノリヤ	ハナメノリヤ			黄	黄	陶器・黒色・石灰			
40	弥生後期土器	黄緑	E10	Ⅱ	波線ノリヤ	ナヤ			黄	黄	陶器・黒色・石灰			
41	弥生土器	灰	F10	Ⅱ	横線ノリヤ	横線ノリヤ			明赤褐色	明赤褐色	陶器・黒色			
42	弥生土器	灰	K	Ⅱ	横線ノリヤ	横線ノリヤ			黄	黄	灰石			
43	弥生土器	灰黄褐色	B	Ⅱ	ナヤ	横線ノリヤ			灰	灰	赤褐色灰土			
44	弥生陶器	赤褐色	-	横土	-	-			灰ノリヤ	ナヤ	-			
45	弥生陶器	赤褐色	B	Ⅱ	-	-			ナヤ	ナヤ	-			
46	弥生陶器	灰黄緑	E11	Ⅱ	-	横線			川内・赤褐色・ 灰	灰	白色灰土	灰緑褐色		
47	弥生土器	土黄	J7	Ⅱ	ナヤ	-			黄	-	-			
48	弥生土器	土黄	E9	Ⅱ	ナヤ	-			明赤褐色	-	-			

第10表 石器観察表

図	番号	グリット	遺跡・層位	遺物	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
18	194	-	Ⅱ	硯石・白石	硯石	14.8	13.2	12.2	366.0	
19	25	-	Ⅱ	硯石	硯石	13.15	12.8	4.05	127.0	
20	26	-	Ⅱ	硯石	硯石	10.15	11.1	2.35	51.0	
21	83	19	Ⅱ	石炭	黒曜石	2.8	2.7	1.4	9.9	
22	84	19	Ⅱ	石炭	黒曜石	1.05	1.05	0.35	4.15	

第IV章 まとめ

今回の発掘調査は、二本榑遺跡が新規発見の遺跡として周知されてから初めて実施されたものであり、今後具体的に遺跡の性格を明らかにしていくうえでの第一歩となるものである。成果としては、弥生時代後期の方形プランの竪穴住居2基、溝1条、土坑群といった遺構の検出、そして、竪穴住居からの土器群の一括出土、Ⅲ層からの弥生時代早期及び弥生時代後期の遺物の出土がある。また、縄文時代後期や弥生時代中期、中世の資料も散見され、二本榑遺跡及びその周辺においては、縄文時代から現在に至るまで断続的に生活が営まれてきたことがわかる。なかでも特に竪穴住居の検出は、南島原市北部地域（深江町・布津町域）において弥生時代を通じて初めてとなるもので、その意義は非常に大きい。円形住居から方形住居への移行時期という観点から弥生時代・古墳時代を考えていくときにも、ひとつの事例として重要になってこよう。

竪穴住居内より出土した土器群は一括性が高く、特に竪穴住居1からのものは住居廃絶に伴い廃棄されたと考えられ、ほぼ単一の時期に使用されたことがうかがわれる。ここでは、2棟の竪穴住居より出土した土器群を中心にしてⅢ層出土のものも含め、二本榑遺跡から出土した弥生時代後期土器の様相について概観しておきたい。

構成される器種としては、甕、鉢、壺、高坏、器台がある。

甕については、脚台付長胴甕（竪穴住居1出土・第8図3、第9図9、竪穴住居2出土・第20図1など）が大半を占める。細身の倒卵形をなす長胴の胴部にわずかに内湾しながら外傾する「く」字形の口縁部が接続する。底部については、明らかに長胴甕の底部になるような平底や丸底の資料は検出されておらず、裾を大きく広げて断面先細りとなる脚台が備わるものと判断される。胴部最大径は胴部のかなり上位に位置するものがほとんどで、そこから口縁部接続部にむかってのすぼまりはさほど強くない。口径が22cm前後、胴部最大径が20cm前後となるものが多くみられ、ある程度の規格性がうかがわれる。甕としては、脚台付長胴甕のほか口縁部と胴部の境界に三角安帯をもつもの（竪穴住居1出土・第8図1）が1点、また大型甕の可能性のある底部（竪穴住居2出土・第20図7）が1点あり、これらの存在にも注意を払っておきたい。

二本榑遺跡における脚台付長甕の様相は、胴部最大径が胴部のほぼ中ほどにきて口径を上回り、底部形態も丸底と脚台のものが共存する肥後地方で出土する長胴甕の状況とは一線を画している。また、脚台をほぼ持つことなく、平底か凸レンズ底で構成される佐賀平野の長胴甕の様相とも異なっている。肥後地方や佐賀平野においては長胴甕に伴ってタケキやケズリによって製作される畿内・庄内系の甕も出土するが、二本榑遺跡においては皆無である。

背の低い甕か鉢となる資料としては、口縁部を外へと屈曲させるもの（竪穴住居1出土・第13図54

～58)、丸い胴部から口縁部を外反させるもの(堅穴住居1出土・第13図59)、ボウル状のもの(堅穴住居1出土・第13図60・61)、口縁部が内傾する金魚鉢状のもの(堅穴住居1出土・第13図62)がみられる。堅穴住居1出土の第13図55～57は、厚手の器壁、断面直線的にのびる口縁部、粗い目の工具によって施されたハケム調整といった点で長胴甕とは全く異なった製作手法がとられており、脚台付長胴甕を製作する集団とは別の集団による製作を想定しておく必要がある。

壺としては、大別して長頸のもの(堅穴住居1出土・第14図63～68)、短頸のもの(堅穴住居1出土・第15図75～81)の二つがみられる。長頸のものは、ラッパ状に外反して大きく開き、口縁部は二重口縁となるものと、単口縁のものがある。短頸のものは、断面直線的な口縁部が直立するかやや外傾する。全体的な形状までわかるのは短頸のものに限られるが、狭小な平底か凸レンズ状の丸みを帯びた底部をもち、胴部は球状である。口縁部から肩部にかけてミガキによる暗文や黒色塗料による彩文を施すものが含まれる。また、なで肩でおそらく長胴となり、断面直線的に外傾する口縁部をもつもの(Ⅲ層出土・第31図62)が1点みられるが、これは肥後系のものであろうか。

高坏は、鈎状の口縁がつくもの(堅穴住居1出土・第17図91・93)、口縁部が外反気味に外へと長くのびるもの(堅穴住居1出土・第17図94)、口縁部が直立し、皿部と口縁部との境界に刻目を施すもの(堅穴住居1出土・第17図95、Ⅲ層出土・第31図68)の三種に大別される。脚部には透かしをもつものもある。壺同様、ミガキによる暗文や黒色塗料による彩文を施すものがみられる。

器台は、いわゆる「肥前型器台」と呼ばれる透かしをもつものが出土している。上下二段の方形透かしをもち、その間の筒部にクシメ文を入れるもの(堅穴住居1出土・第18図100、堅穴住居2出土・第21図10)である。これらの器台は、単体で据え置くことのできない丸底や狭小な平底である壺とのセットで考えるべきであり、実用的用途の上での位置づけを考慮しておく必要がある。その使用実態のひとつとして、二本榎遺跡においては堅穴住居廃絶に際しての祭儀的行為の存在の可能性を指摘しておきたい。

以上、二本榎遺跡における弥生時代後期土器についてみてきた。二本榎遺跡で多数の出土をみた脚台付長胴甕は、島原半島北部の伊古遺跡(雲仙市瑞穂町)、十園遺跡(雲仙市国見町)などでも出土が認められ、島原半島における在地系土器として位置づけられよう。弥生時代後期、有明海を媒介としたヒトの移動や文化的交流の中で、甕形の土器は弥生時代中期から続く脚台の伝統を維持しつつ有明海沿岸地域とも密接に連動して長胴化し、島原半島独自の脚台付長胴甕の成立に至ったものと考えられる。

ただ一方、二本榎遺跡の場合は煮炊き用と考えられる甕のほはすべてを在地系の脚台付長胴甕が占めるのに対し、島原半島北部の伊古遺跡などでは肥後系の甕や庄内系の甕の出土も見られ、島原半島内においても遺跡ごとに様相は異なるようである。こうした在地系甕と搬入系甕の導入と使用実態の差異は、有明海という海によって隔てられた、あるいは繋がった沿岸地域の地理的位置関係のみならず、政治的関係性や生活形態の違いなども反映している可能性があり、そうした視野も研究の展望として持ち合わせておきたい。

以上、二本榎遺跡において主に堅穴住居及びⅢ層から出土した弥生時代後期の土器群についてみてきた。今後周辺地域の様相とも照らし合わせながら詳細に検討していく必要があるが、現時点での二本榎遺跡出土のこれらの土器群の時期的な位置づけについては、弥生時代後期後葉の、やや古い様

相を示すものを一部含みながら、後期終末をその主たる位置にするものとして捉えたい。

【参考文献】

- 宮崎貴夫 1986 「今福遺跡Ⅲ」長崎県文化財調査報告書第84集 長崎県教育委員会
- 古庄浩明 1989 「中九州における古式土師器の成立－白川・緑川水系地域について－」『考古学資料館紀要』第5輯 國學院大學考古学資料館
- 原田範昭 1999 「中九州における弥生時代後期土器の編年－熊本平野部の土器にみる社会背景－」『先史学・考古学 論究Ⅲ』 龍田考古学会
- 古門雅高 2005 「有明海西岸地域における弥生時代後期の土器」『西海考古』第6号 西海考古同人会
- 竹中哲朗・辻田直人 2005 「十園遺跡Ⅱ」国見町文化財調査報告書第5集 国見町教育委員会
- 辻田直人・小野綾夏・大野瑞恵・村子晴奈 2010 「伊古遺跡Ⅲ」雲仙市文化財調査報告書第8集 雲仙市教育委員会
- 辻田直人・村子晴奈 2017 「十園遺跡Ⅲ・伊古遺跡Ⅳ」雲仙市文化財調査報告書第16集 雲仙市教育委員会
- 古門雅高 2018 「長崎県本土部における弥生後期土器研究の現状と課題」『竹松遺跡Ⅲ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第6集 長崎県教育委員会
- 蒲原宏行 2019 「佐賀平野における弥生後期の土器編年」『弥生・古墳時代論叢』六一書房
- 宮崎貴夫 2019 「環有明海とその周辺をめぐる流動と変動」『長崎地域の考古学研究』株式会社昭和堂
- 小川慶晴編 2021 「内野貝塚（第1分冊）」南島原市文化財調査報告書第23集 南島原市教育委員会
- 本多和典 2021 「推現脇遺跡」南島原市文化財調査報告書第28集 南島原市教育委員会

圖 版



航空写真① (南東から)



航空写真②（北から）



航空写真③（俯瞰）



範囲確認調査 TP.1南西壁



範囲確認調査 TP.2南西壁



範囲確認調査 TP.3南西壁



範囲確認調査 TP.4南西壁



範囲確認調査作業状況①



範囲確認調査作業状況②



調査前状況①（北東から）



調査前状況②（南から）



表土剥ぎ状況① (南から)



表土剥ぎ状況② (道床除去・南西から)



表土剥ぎ状況③（南西から）



表土剥ぎ状況④（掘削完了・北東から）



作業状況



Ⅱ層遺物検出状況①（北東から）



Ⅱ層遺物検出状況②（南西から）



Ⅲ層遺物検出状況③（1区・東から）



Ⅲ層遺物検出状況④（2区・東から）



Ⅲ層遺物検出状況⑤（2区・北から）



Ⅲ層遺物検出状況⑥（3区・北から）



Ⅵ層上面遺構検出状況①（北東から）



Ⅵ層上面遺構検出状況②（南西から）



竪穴住居 1 検出状況① (東から)



竪穴住居 1 検出状況② (南から)



溝堆積状況① (南東から)



溝堆積状況② (南東から)



竪穴住居 2 検出状況① (西から)



竪穴住居 2 検出状況② (南東から)



竪穴住居1堆積状況(南から)



竪穴住居2堆積状況(南東から)



溝検出状況①（東から）



溝検出状況②（南から）



土坑群検出状況 (南から)



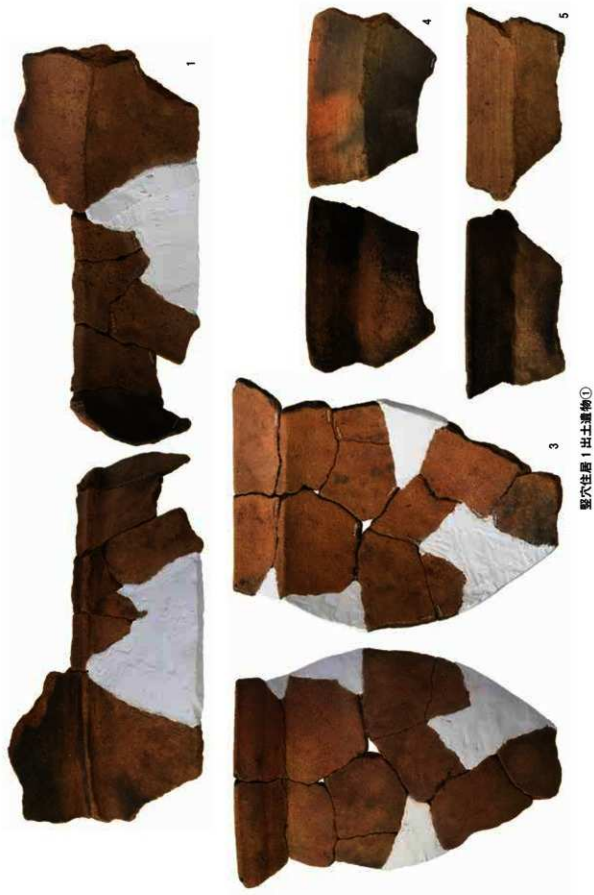
土坑1検出状況 (南から)



土坑2検出状況（東から）



土坑3検出状況（北から）



整穴住居 1 出土遺物①



2



6



7



8

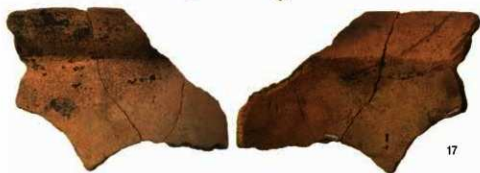
豎穴住居 1 出土遺物②



整穴住居 1 出土遺物③



整穴住居 1 出土遺物④



竖穴住居 1 出土遺物⑤



19



20



21



22

豎穴住居 1 出土遺物⑥



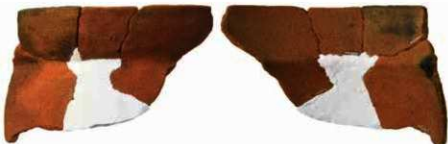
23



24



25

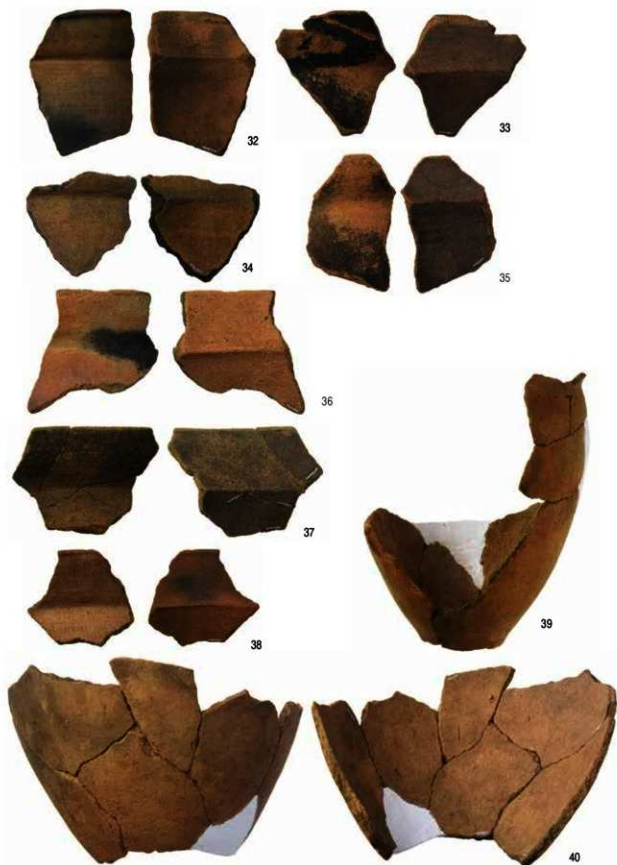


26

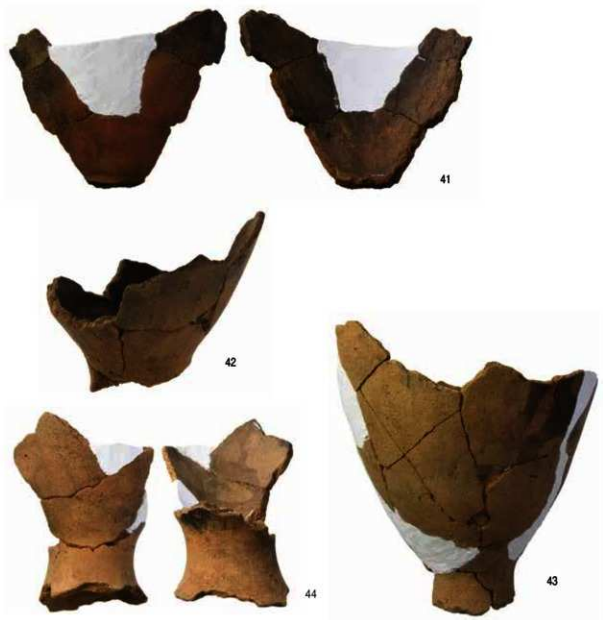
豎穴住居 1 出土遺物⑦



豎穴住居1出土遺物⑧



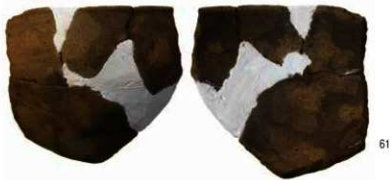
豎穴住居 1 出土遺物⑨



豎穴住居 1 出土遺物⑩



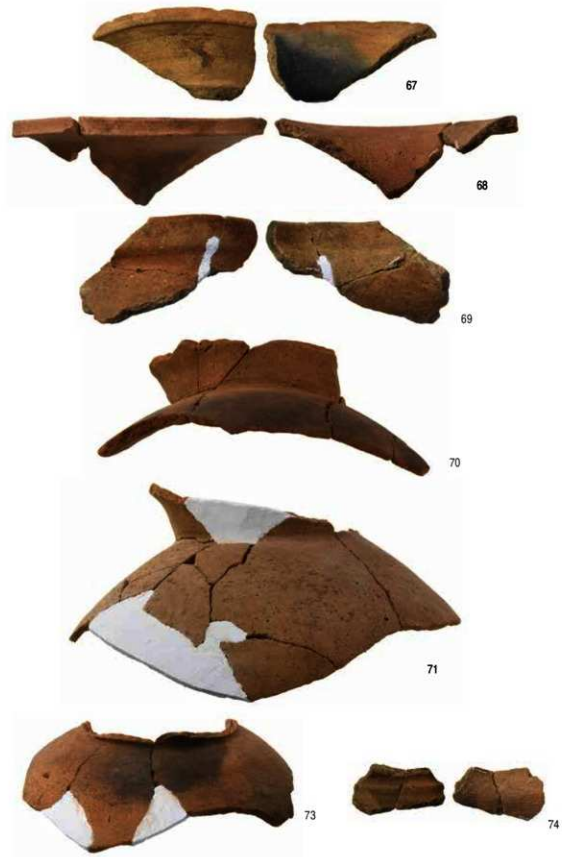
豎穴住居 1 出土遺物①



雙穴住居 1 出土遺物②



豎穴住居 1 出土遺物③



豎穴住居1出土遺物⑭



整穴住居 | 出土遺物⑨



雙穴住居 1 出土遺物^⑬



80



81



82



83



84



86



87



85



89

雙穴住居 1 出土遺物⑦



豎穴住居 1 出土遺物^⑧



竖穴住居 1 出土遺物⑯



雙穴住居 1 出土遺物②



豎穴住居 2 出土遺物①



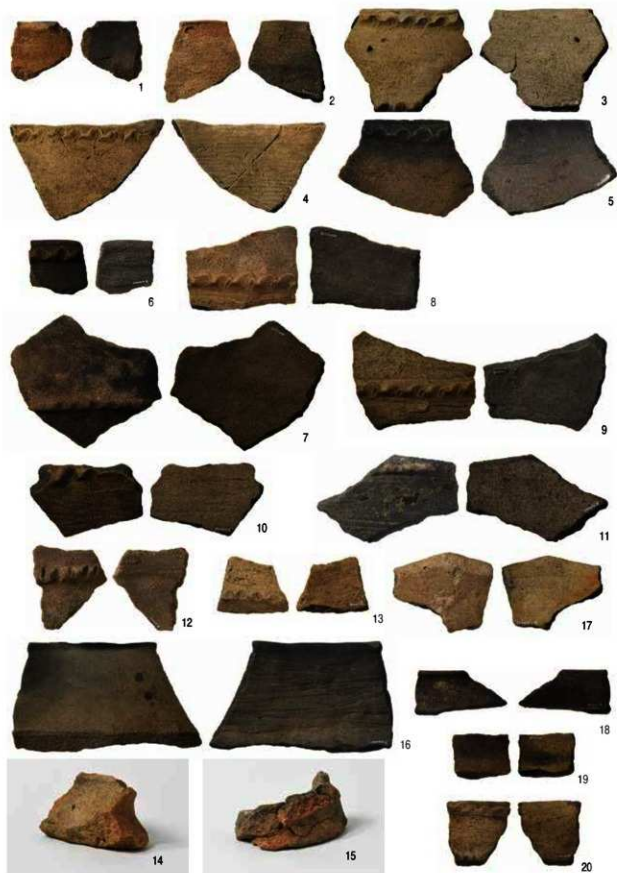
豎穴住居 2 出土遺物②



雙穴住居 2 出土遺物③



豎穴住居 2 出土遺物④



Ⅱ層出土遺物①



Ⅲ層出土遺物②



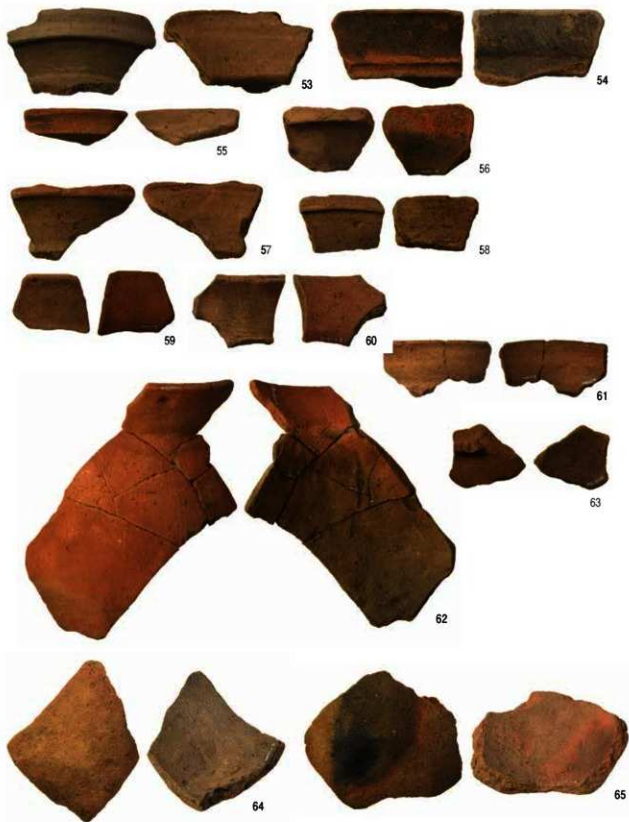
Ⅲ層出土遺物③



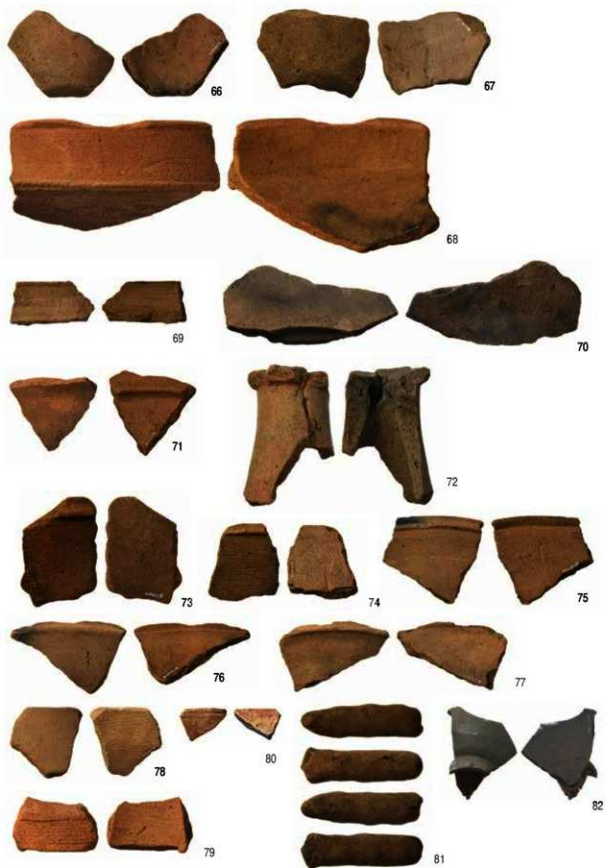
Ⅲ層出土遺物④



Ⅲ層出土遺物⑤



Ⅱ層出土遺物⑥



Ⅲ層出土遺物②



Ⅱ層ほか出土遺物①



Ⅱ層ほか出土遺物②



竖穴住居1-104



竖穴住居2-25

竖穴住居2-26



Ⅲ層-83



Ⅲ層-84

出土石器

報告書抄録

ふりがな	にほんはぜいせき							
書名	二本榎遺跡							
副書名	市道南島原自転車道線整備工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第37集							
編著者名	本多 和典							
編集機関	南島原市教育委員会							
所在地	〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地 TEL0957-73-6705							
発行年月日	西暦2024年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にほんはぜいせき 二本榎遺跡	みなみしまはら 南島原市 ふかやまちょう 深江町	42214	141	32° 43' 36"	130° 21' 22"	20220416 ～ 20220802	452㎡	道路整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
二本榎遺跡	遺物包含地	縄文時代 弥生時代 中世		竪穴住居 溝 土坑		刻目突帯文土器 脚台付長胴甕 暗文甕		

南島原市文化財調査報告書 第37集

二本櫨遺跡

2024. 3. 31

発行 長崎県南島原市教育委員会
〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷 株式会社 昭和堂

